
デジュン

セイクリッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジュン

【Zコード】

N0175D

【作者名】
セイクリッド

【あらすじ】

世界の真実、戦う意味、彼等はこの戦いで何を見、何を感じるのか・・・ファルスティアという世界、丸い珍獣『デジュン』の熱血ファンタジー小説です。

第一話 硝煙の中で

小さな村、バランに住む丸い少年デジュン
彼は山に狩りに行つたその帰りだつた

「結構遅くなつちまつたなあ・・・」

もつ空は赤く染まつており、山の道は暗かつた

「今日は収穫少ないし帰りにくいなあ・・・」

トボトボ歩き、山道から出たときだつた

彼は空の赤より更に赤く燃えたバランを田の辺たりにした

「な、なんじやこじやーーー！」

狩りで獲つた獲物を捨て、村へ走り出す

「おーい！——誰か、誰かーつ！——」

「デ、デジュ・・・ン・・・」

小さな家のドアにもたれ掛かっていた中年の男女がデジュンに呼び
かける

「親父！——それにお袋・・・一体何があつたんだよこれ！——」

「クリーチャーだ・・・大量のクリーチャーどもがいきなり村を・・
・がふつ」

男は息を引き取り地面に倒れた

「デジュン・・・早く・・・逃げ・・・て・・・」

女も男の後を追うように倒れてしまった

「親父、お袋・・・う、うわああ！！誰か一つ！！誰か生きてる人いないのか一つ！！」

村の中心部へと走り出し、更に残酷な光景をみてしまう
それは老若男女、様々な人達の体のパーツが大量に転がっていた
デジュンは体が震え、足に力が入らなくなり地面に倒れた

「一体何のためにこんな惨い事を・・・」

「ガイアじや、ガイアの仕業じや・・・」

木の陰から一人の老人が現れた

「長老！…ガイアで何なんですか！？クリーチャーと何か関係があるんですか！？」

「古に封印されし忌まわしきのガイア・・・
異形の姿をした人類の天敵ともいるべき存在、クリーチャー・・・
奴はクリーチャーを操り、このファルスティアを滅ぼそうとしているのかもしけん・・・」

「意味わっかんねえよ！…村をこんなふうにしゃがって…！」

オレがガイアを倒して仇を取つてやる……！」

「さつまつと『テジュー』はその場から走り出した

「待て！『テジュー』！」

長老の声も空しく、『テジュー』は見えない所まで行ってしまった

「これも運命なのか……」

村から結構離れて気付く

「ガイアでビニにこいんねん……」

第一話 謎の使者ドクターZ

「はあはあ・・・一体どーなんだい」は・・・

デジュンは村から出て一一日間歩きっぱなしだった
しかし、周りは見渡す限り砂漠で食べ物はおろか、水さえなかつた
上からの太陽光、下からの砂の熱
水の準備さえしていない者にとてはこれほど過酷な場所はないだ
う

「めまいが・・・」

デジュンが倒れる刹那、誰かが支えたが
氣を失つた彼にはわからなかつた

「ん・・・」

「気が付いたか坊主」

気が付くとそこはベッドの上だった

「ここは・・・?」

「レダーヨ村の宿屋だ。砂漠のど真ん中で倒れてたんで助けてやつ
たんだよ」

ベッドの隣のイスに座つてた全身白タイツの怪しい男が言つ

「あなたは・・・? あからさまに怪しそうだが・・・」

「私の名前はドクターＺ、これでも医者だ」

「やうか、一應礼は言つておくれ」

そうこうとテジュンはベッドから降り、宿屋から出ようとした

「やうだ、あんたガイアで奴を知らないか？」

『デジュンはドアに向かつたまま尋ねたがドクターＺは少し間を開け
答えた

「ガイア・・・」

「知つてんのか！？」

「Ｚの村で毎年格闘大会が開かれる。そこに手掛かりがあるはずだ」

「おじつ……知つてるならもつとおしえ……うわっ……」

ドクターＺはけむり玉を地面に投げつけ消えてしまった

「一体何なんだあいつは・・・」

けむりに気が付いた店主が部屋に入ってきた

「ちよつとあんた何やつてんだ！？」

「いやオレ違うでーー！」

「まあいいや、ちゃんと休憩代一人分払つていつてよね！…」

「マジかよ・・・」

無一文なデジュンに払える訳もなく、
この場をどう切り抜けるか悩んでるちょうど先に
格闘大会ザ・エンペラー・オブ・ファイターズのポスターが見えた
優勝賞金1000万

「あんたまさか金持つてないのかい！？」

「出ぬしか・・・ないのか・・・」

このあとデジュンは大会の受付を済ませに行く
店主の見張りつきで・・・

第三話 ザ・エンペラー・オブ・ファイターズ

「はあ・・・」

選手控室でデジュンがため息をつく

「どうした、あんちゃん？元気がないようだが」

選手の一人だろうか、一人のいかにも強そうなマッチョマンが後ろから話しかけてきた

「いや、なんでもないよ」

後ろを振り向くとあまり人がいない事に気づいた

「なあ、この大会で結構人気あんただろ？」

「ああ、ここまでデカい格闘大会でいつたらこのエンファイしかないぜ」

「の割には選手が少なくねえか？見たところオレ含め8人くらいぽいが・・・」

まわりを見渡しながらデジュンは言つたが男はある選手を見つめている

「奴さ・・・」

「奴？」

「ああ、あそこのベンチに座っている奴だ」

男は、ベンチで寝ている男を指差した。

長く鮮やかな青色の髪をしており
まだ10代後半だろうか

あどけなさの残り、女性と見間違つほど美形な男だった

「あいつがどうかしたのか？」

「奴の名はスラップ、15歳から2年間ここでのチャンピオンだ」

「15歳でチャンピオンかよ…?それはすげえな…」

「強過ぎるんだよな、だからかこの大会に出場するのはオレみたいな余所者くらいだ」

「あんた、この町の人じゃないんか」

「まあな、出稼ぎみたいなもんだ
だが、一番の目的は格闘家として奴と手合わせてみたく出場した
んだがな」

「あ～…オレはあんまり興味ない世界だな…」

一人で燃えてる男のとなりでテジュンは顔をひくつかせながら言った

「あんたは何で出場したんだ?」

「まあ色々な理由があるんだよ…」

ヒトジュンが言つてすぐアナウンスが流れた

「トーナメント表が決まりましたので選手の方は確認して下さい、繰り返します・・・」

「お、どうやら決まったみたいだぜ。あそこの壁に係が貼ってるのがそうみたいだな」

「オレは楽な選手がいいなあ・・・」

「・・・」

男は表を見て驚きの表情をした

「どうした? ウン? か?」

「いや、一回戦の相手が奴だ・・・」

「ほんとだな、まあやられなによつ頑張れよ(笑)」

デジュンの声が聞こえてないのか男は手を握り締め震えていた

「それではあ・・・ヒンファイ第一回戦を始めます! !」

レフリーがリングの中央でさつと会場は一斉に歓声が沸いた

「ホントに『デカイ大会なのね』……」

あまりの観客の熱気にさながらの「ジユンはビビり気味だつた

「赤コーナー！…ドルガン選手のお入場です！…」

ドルガンと呼ばれた男はさつきのマッチョマンだった
それなりの歓声を浴び男はリングに上がる

「青コ一ナー！！3年連続チャンピオン、スラップ選手のお入場です！！」

「アーティストを回れ!」などいつて――。」

「キャー！…私に手を振つてくれたわあ…！」

スラッシュ選手が入場しリングに上がつても尚、黄色い声援は止まらなかつた

「なんすかコレ・・・」

「デジコーンはドン引きだつた

「それではあ
・
・
・」

レフリーがそういつと黄色い声援は止まつた

「エンペラー・オブ・ファイトー!!-レディ・...」

ドルガンとスラップが構える

「「オオオオオオオオオオオオオオ！」」

その掛け声とともに会場は熱狂の渦に巻き込まれる

「スラップ殿、いくぞ！－！」

「いいぜ、おっさん！－－来い！－－」

ドルガンはスラップ目掛け飛び蹴りをかます
だがスラップは余裕の表情で避ける

「どうした、おっさん！－－もつと来いよ！－－」

「くつ・・・・どあいや―――つ――」

すごい豪腕パンチのラッシュだが
スラップはすべて避けている

「たいした事ないよアンタ・・・」

スラップはドルガンの腹にパンチを当てる

「がふお・・・・！」

「出直してきな・・・・」

スラップが言い終わるとドルガンは吹っ飛んだ

床に倒れ、立ち上がることは不可能なのは誰の目にもあきらかだった

「お見事……スラッシュ選手のＫＯ勝ちです……」

会場は更にすごい歓声が沸いた

「さすがチャンピオンだな……あのパンチ、一発に見えて三発も繰り出すとは……」

どこかで聞いたような台詞をデジュンは吐く
こう見えてデジュンは長い間狩りで猛獣と戦つていたため
それなりに強い……かも知れない

「それでは第四回戦です……赤コーナー、デジュン選手のお入場です……！」

「よつしや……いつちよやるか……」

控室からデジュンが出てくる

「3位まで賞金出るから何とか頑張れぐ」

歓声の中から宿屋の親父の声が聞こえた

「ふつ、田指すのは優勝だぜ……」

そう呟いた刹那、後ろから声が聞こえた

「調子に乗るなダスよ」

「……」

振り向いた先には何とも不気味なグリグリ眼鏡の学ラン男がいた

「おおっとーーベンゾウ選手、こつの中にカーリングに上がっていたあ！！」

「優勝するのはオマエでもスラップでもない、ワシだす！！！
優勝してコキさんへ振り向いてもらうダスよーー！」

「女田這ひのオマエなんかに負けるかよーー..」

「一触即発な雰囲気なので始めますーーレディーーー、ファイツーー！」

試合開始の合図とともにベンゾウがデジコンに襲い掛かる

「コキセーん、今いくだすよーーー！」

ベンゾウは上着のポケットからペンを取り出し、デジコンに投げた

「つねう危ねつーー飛び道具ありなんかよーーー！」

「まだまだいくだすよーーーコキセーんーーー！」

ベンゾウは定規、消しゴム、口哨、色んな物を投げてきた

「さすが学生だな、色々な物持つてやがるーーー！」

「なつ！？全部避けたダス！？」

「デジュンは一瞬でベンゾウの懷に潜り込んだ

「悪いな、オレも優勝しなきゃ いかん訳があるのでなーー。」

ド「ロッ

ベンゾウのみぞおちから二三づい音が鳴った

「ぐあ マセタ レーフ ハラハラジロー・・・」

ベンゾウはその場で崩れ落ち、観客は沈黙になつた

「お、おおひとーー！なんと丸い生物、デジュン選手一発KO勝利ですーー！」

一気に歓声が沸き上がり、それはスラップの勝利と同等、それ以上かもしけない

デジュンはガツツポーズを取り、リングの外にいるスラップを見た

「あいつ、丸いくせにオレと同じ三発繰り出しあがつた・・・
ふつ・・・今回はなかなか楽しめそうじゃねえかーー！」

「奴らがそうか・・・?」

「みたいだな」

黒装束をまとつた二人は会場から離れた場所でリングを眺めていた

第四話 その業、まるで衝撃

「ふう何とか決勝まで上がつてこれたなあ・・・」

デジュンは決勝までなんとか勝ち残り、控室で休憩していた
決勝まで残れたもののデジュンの体にはキズ一つなく
明らかに余裕の勝ち残りだった

「よお丸いの」

「お？スラップに負けたおっちゃんじやん」

デジュンに声を掛けたのは一回戦でスラップに敗れたドルガンだった

「まさかオマエみたいな丸いのが決勝まで来るのは思わなかつたよ」

「あんたこそ筋肉マンなのに一回戦で敗れるとは思わなかつたよ」

「ふ・・・まあオマエさんには期待してるんだぜ？」

「せつかぐここまで来たんだ。あの美形に一発かましてやれよ！――」

力強い握手を交わし、ドルガンは去つていった

「勝つてみせるさ・・・店に借金があるしな――」

「それではあ……決勝戦を始めます……」

レフリーの挨拶が始まり選手入場が始まる

「よお丸いの。オマエなかなか強そうじやないか」

リングで向かい合ってすぐスラップが喋りかけた

「あんたこそな。伊達に3年連続チャンピオンじゃねえってか？」

「ふ・・・回りが弱すぎたんだよ。オレはオマエみたいな強い奴を待っていた！！」

「楽しめそうだな！――」

「ああ――」

「おおつとー！既に一人は盛り上がりってる様子！――
さっそくゴングを鳴らしましよう！――」

「行くぞ『ジユン！』

ゴングが鳴ってすぐスラップは仕掛けてきた

「正面！――そこか！――」

スラップに向かって飛び蹴りをかましたが残像だった

「な、残像だと！？」

氣付いたときには遅く、スラッシュは背後にいた

「甘いぜ、丸いの！…」

ドガツ！…

デジュンは空高く蹴り飛ばされ、スラッシュもそれを追いかけた。

「このままリングアウトで終わらすのは惜しいだろ？」

スラッシュの空中での乱撃が炸裂した

「どうした丸いの！…オマエはこんなもんな…・・が！…？」

スラッシュは顔面に一撃を受け地面に急降下する

「まだだ！…くらえロング！…」

デジュンもそれを追い、スラッシュ掛け急降下する
スラッシュはダメージ最小限に着地し、上を見上げた

「いいね！…久々だよ、こんな痛みは！…」

二人の拳がぶつかり合い、リングに衝撃で穴が空いた

「す、す、すきてとてもリングにいれません！…」

レフリーはリングから降り、外から実況を続けた

「やっぱオマエなかなかやるよ・・・」

「オマエも美形のくせに強いな！」

「羨ましいのか？ま、悪いけどそもそも決めといかせてもらつよ。オレも何かと忙しい身でね」

「オレも」の試合に勝ち、やらなければいけない事があるんでな」

二人は一斉に構え

スラップは右手にオーラを溜め始めた

「敬意を表してオレのとつておきで仕留めてやるよーー。」

「オレも切り札を使わせてもらひうぜえーー！」

デジュンの体中にオーラがみなぎり、二人の間に緊迫した空気が流れれた

「アベヒコ」

「来いや丸いの――――――つ――」

お互^い正面に走り出し、一人がぶつかりあう刹那

ドオオオオオオオ

リングに何かが衝突し、エンファイ会場は跡形もなく崩れた

「な、なにが起きたんだ！？」

瓦礫の山から『デジュン』が顔を出し、回りを見渡した

「くつそ・・・一体誰だ！！邪魔しやがったのは！！」

スラップは立ち上がり、目の前の砂埃につつすらと見える一人の人影に向かつて叫んだ

「茶番だな・・・」

姿が見え始め、頭にはフードみたいなを被つた黒装束の一人が咳いた
右肩には銀の甲冑をし、表情は伺えないが何ともいえない冷たい雰囲気を漂わせた

「くだらんな、雑魚同士で盛り上がってよ」

逆に左肩に金の甲冑をした男は赤い瞳でスラップと『デジュン』を見やつた

「なんだ貴様らは！！」

『デジュン』は金の甲冑の男に近いた

「これから死ぬ奴にとつては関係ない事だろ？」

右の手の平を『デジュン』に向けた瞬間

「がはあっ！－！」

「デジュンは何かに吹っ飛ばされ、地面に転がった

「デジュンー！」

スラップはデジュンに駆け寄ろうとしたが

彼もまた金の甲冑の男の不思議な力に吹っ飛ばされた

「ぐ、なんだこれは・・・」

デジュンは立ち上がり、一人を見やつた

「まあ名も知らぬ奴に殺されるのも不憫だな。

こいつはエイス、オレはオージだ。

オレは衝撃を操る、貴様「！」ときではオレに近づく事さえ出来ん

よ

「衝撃・・・だと！？」

「そりだ。貴様のようなチンケな格闘ことは違つんだよーー！」

先程よりも激しい赤い突風のような衝撃がスラップを襲う

「ぐ、ぐうつ・・・・・・！」

「スラップー！」

「貴様の相手はオレだ・・・・」

「ーーー！」

いつのまにか背後に銀の甲冑の男がいたが
蛇に睨まれた蛙のように、デジュンは身動きが取れなかつた

(なんだこの冷たすぎる気配は・・・今振り向けば確実に殺される。
・・・)

「大人しくしていれば貴様は殺さない・・・」

「待てい！！」

リングの中央に大量の煙が現れた

「！」しゃくなマネを！――！」

金の甲冑の男は衝撃で煙を吹き飛ばし

煙が晴れたそこには全身白タイツの男が立っていた

「変態ドクターＺ！――！」

「助けに来たぞデジュン、スラップ！――！」

「な、なんだあの恥ずかしい格好した奴は・・・」

スラップはドン引きだつた

「貴様は・・・」

「何だエイス、知り合いか？」

「いや、何でもない・・・」

「今こじで、ここからをやり切る訳にはいかんのねーー。」

ドクターＺは煙玉を地面上に投げ付けた

「やせるかーー。」

オージは衝撃波で煙を拝つたが、そこにはドクターＺの姿ではなくデジュン、スラップの姿も消えていた

「やられたなーー。」

「ああ・・・だが奴らの目的は検討が付く・・・。」

「なら後はオマエにまかせるぜ、オレには別の用事があるんでな」

「憑巧みか？ オージ・・・。」

「まあそんなところだ」

オージは一矢口と笑みを浮かべた

「また何かあつたら呼んでくれや」

やつこいつとオージはどうかへ消えてしまった

「食えん奴だ・・・。」

エイスモーの場を去り切った瞬間

「ぐ・・・がつ！！」

エイスは口から血を吐き出した

「そ、うか・・・も、う時間がないのだな・・・
早くしなければ・・・なんとしても奴を・・・」

血を拭い、エイスも瓦礫の会場から姿を消した
エンファイ会場は先程の騒ぎが嘘のように、
初めから誰もいなかつたように静かだった・・・

第五話 仲間を求めて

広い高原で一人の少年の声が木霊する

「テメエ 一体何のつもりだ！？」

「…………」

「…………じゃねえよ…………」

スラップがデジュンとドクターZの間にに入る

「もうよせデジュン、こいつが助けてくれなければオレ達は間違いなく殺されていた…………」

「くわ……！」

「ふむ、スラップの方が賢いじゃないか

「テメエっ！？」

デジュンの一度は収まりかけた怒りが再び燃え上がる

「オマエは少し黙つてろ」

スラップの膝蹴りがデジュンの顔にヒットし、デジュンはその場に倒れた

「…………それで、オマエの目的は何だ？何故オレ達を助けた？」

先程までは穢やかだったスラップが鋭い目付きで睨みながら問い掛ける

「その目付き、態度、あいつにそつくりだな・・・」

「何言つてるんだお前は？」

「いいか、これから言つ私の言つ事は何一つ疑う事なく聞いて欲しい」

ドクターZは急に真剣な表情、いや顔も白タイツで覆われているため真剣かどうかはわからないが

何となく真剣に思えたため、スラップは怒りを落ち着け、耳を傾けた

「率直に言おう、キミ達は1000年以上昔にガイアを封印した伝説の勇者の転生した姿だ」

「は？」

「ガイアだつて！？」

何言つてるのかわからないといった表情のスラップの後ろで、デジモンが起き上がった

「そう、クリーチャー達の長、ガイア・・・

遥か昔、4人の勇者によつて封印され、

ファルステイアからはクリーチャーが消え、平和になるはずだった・・・

「オレが生まれたときには既にクリーチャーは存在していたが、そのガイアとやらが復活したとでもいうのか？」

「そうだ、およそ100年前にガイアは復活し、昨今ではクリーチャー達の動きも活発になつてきている」

「奴らのせいでオレの村が・・・」

「デジュン、キミをスラップに命わせるために私はキミを大会に参加させるよう仕向けたのだ」

「なー?」

「出来ることなら、自然にキミ達の勇者の力の共鳴で引き合わせたかったのだが、

今はそつは言つていられん。いつまた先程のガイアの手下に襲われるかわからぬしな」

「それでオマエはオレとデジュンを引き合わせ、ガイアを倒せとうのか?」

「今のオマエ達では無理だ、確実に殺される」

「じゃあどうすんだよ!...ガイアは村のみんなの仇なんだ!...ビッグリすればいい!...」

「落ち着け、今まではといふ事だ。」

「これからオマエ達には、同じ勇者の生まれ変わりを探し出し、精霊の加護を受けに行つてもらう」

「精靈の加護やら勇者の生まれ変わりやら、一番肝心なのはオマエの正体だろ？」

「一体オマエは何者なんだ？」

「ふむ、スラップ君の言ひことも正しい……いいだらう」

「そうこいつとダクターZは一人に近づくへり」

「私は1000年前、伝説の勇者達をサポートしていた者だ」

「またえらいジイさんだな……」

「私は人間ではなく、遙か古代に造られしロボット……
勇者達がガイアを封印したあと眠りに着いた、
しかし世界の異変に気付き、私は眠りから目覚めた……
そう、ガイアを倒せる者、つまり勇者の生まれ変わりを探すため
に……」

「いやあ、なんか突っ込み所が多くすぎて、
どこから突っ込んでいいのやら……」

デジュンはかなり引いた

「なるほどな、わかつたよ
オレもクリーチャー達には恨みもあるし、
さつきのガイアの手下の一人組みの件もあるしな、やつてやるよ
「わかつたのかよ！？」

スラップの物分かりの良さにデジュンはかなり引いた

「セツシツヒモハハハると助かるよ」

「でよ、オレ等これからどうすんだ？」

「それについてだが、勇者の一人の場所を突き止めたので
そこに行ってくれたまえ」

セツシツヒモハハハとクターは簡単な地図を差し出した

「ここから北は遠くはない森の中にネコフン村と書いてある

「ソルには大地の精霊もいるので、精霊の加護も受けてくれ」

「なるほど、一石二鳥で訳か。だがこの森は・・・」

地図を眺めるスラップとは別に、隣にいたデジュンが叫び出した

「おっしゃああ……やつたるゼー……すぐ出発だーー！」

「その意気だデジュン、私は残りの勇者、精霊の情報を集める
頼むぞ、ファルスティアの未来はキミ達にかかるているのだ」

ドクターはお約束の煙球を地面に投げ付け姿を消してしまった

「ゲホッゲホッ・・・くつれ、あの変態またかよーー！」

煙に囲むトジコンとは別に、スラップは地図を眺め悩んでいる

「しかし、ソの森は確か・・・」

「何やつてんだよスラップ、早く行こうぜ！…」

「あ、ああ、わかった」

薄暗い大広間に一人の男がいた

その大広間に一人の鎧を纏つた、腕が6本の男が現れた

「お呼びでしょうか、エイス様・・・」

「アシュラか・・・貴様にガイア様より承った命令を言い渡す」

「ハツ、何なりとお申し付け下さい・・・」

「ネコフン村へ行き、村の住人、施設、全て破壊しろ」

「ハツ、しかしその村に何かあるのでしょうか・・・？」

「ガイア様の意志だ、口答えは許さん・・・」

その直後、アシュラの頭の中に声が流れた

『我ノ命令ガ不服力・・・?』

それは紛れも無い、エイスの後ろの巨大なカーテンの後ろにいるガイアの声だった

「い、いえ！－滅相もございません・・・」

先程までは命令に不満を感じたアシュラもガイアの声を聞いた瞬間、萎縮してしまった

「ならば行け－、兵はいくら使つても構わん－－」

「ハツ－－」

そう返事をするとアシュラはすぐに大広間から出た

「大地の精靈・・・奴等をあそこに行かす訳にはいかん・・・」

エイスは不適な笑みを浮かべ呟いた・・・

「うむ？今日は森の小鳥が騒がしいのう」

そう言つと少女は空を見上げた

「何か、不吉な予感がするのう、
氣のせいならば良いのじやが・・・」

第六話 訪れる悪夢

深い森の中を歩く人間一人と珍獸一匹

「おーおー、こんな森の中に村なんてあるのかよ・・・」

珍獸は文句を言いながら歩いていた。

「ああ、確かにこの森には古くから伝わる一族が・・・」

「おー?なんか村っぽいのがあるぜ!...」

そういう感じでジュンは前方に見えるある村に走っていった。

「おー待て!..」

スラップの声空しく、デジュンは何かに吹き飛ばされ、スラップの目の前に転がってきた。

「だから言つただろう・・・」

「な、なにが起こったんだ!?また衝撃の何とかか!?」

「この村には、古より古代魔法を扱う種族が住んでいるんだよ。デジュンに手を差し伸べ、スラップは続けた。

「ここに住む連中はな、こりやつて結界を張つて完全に外界との接觸を断つているんだ。」

「なんでそんな事するんだよ。」

「滅びたはずの古代魔法、それを扱えるのは『ジニ』の『ゲミル族』だけだ。

ゲミル族はかなりプライドが高く、外界の人間との接触を嫌う。だからこうやって結界を張り、この土地、そしてゲミル族としての誇りを守り続けているんだよ。」

「オマエ、結構物知りなんだな・・・

ただの格闘バカかと思ったが（笑）」

「オマエと一緒にするなよ・・・

スラップはネコフン村に向き直った。

「もし、ここに勇者や精霊がいるとしても
中に入れないんじゃどうしようもないよな・・・」

そのとき、後ろに何者かの気配を感じた。

「誰だーー！」

二人が振り向いた先には白いワンピースの女性がいた。
肩くらいまであるブロンドの髪がとても美しく、
かなり美人である。

「お主等こそ誰じゃ」

「オレはスラップ、この丸い奴はデジュンていうんだ。」

「ほう……それで、お主等は如何の用じや？」

「オレ達、旅の途中ですよ。この森で迷っちゃったんだ。」

今まで離れてるのに

オーマエが言へ」と更に憤しあれるたゞ二か月と、スラッシュは心中で叫んだ。

卷之三

そう女は少し考えた後

「せふ田か暮れる頃じゃ、おれの家に来んか?」

突然の言葉に一人は啞然とした

「そういえば自己紹介が遅れたのう」

「僕の名はリアナ＝フェズリールじゃ。
見ての通り、ただの女じや。」

「ではこちらも改めて自己紹介しよう、
オレはスラップ＝トーラーで
ここがデジュンだ。」

「よひしぐな……」

さて、ヒスラップは話を続けた。

「なんで初対面のオレ達にこんな親切なんだ？」

「ふむ、その前にこちらから聞いてもいいかのう？」

リアナはお茶を一口飲み、続けた。

「お主等、あれの村に何の用じや？」

まさに心中でデジュンは口に含んだお茶を噴出した。
そんなデジュンをよそにスラップは冷静に答えた。

「よくわかったな・・・」

「こなん深い森の、小さな村に来ると言えば、あの村しかあるまご」

「そんなショッちゅう誰か来るのか？」

「ゲミル族の古代魔法の技術、永年祀られている精靈、
あそこに行くといえばそれが目的しかあるまい。
今までもそれを狙う奴らがショッちゅう来てな。」

「なるほどな、やはり研究者とかが来るのか？」

「研究者もあれば、ただ純粹に魔法を力を得たいがために来る者もある。

しかし、ゲミル族は何人であろうと村には入れぬ。」

「そうか・・・何とか中に入れさせてはもらえないのか？」

「無理じゃな、どんな理由があるにせよ無駄じや。諦めるがよい。
して、如何な用じや？」

「それは・・・すまない、言えないんだ」

「素直に勇者探しに来たつて言えばいいじゃねえか（笑）」

空気が読めず突拍子もない事を言い出したデジュンは
スラップに殴り飛ばされた

「バカかオマエはー？そんな事言って逆に混乱をせるだらつがー！」

「オマエは回りくどいんだよー！」のロングがあーー！」

そんな一人のやり取りを見たリアナは

「ふ・・・あはははははーー」

「ん?」

突然のリアナの大爆笑に一人の喧嘩は収まつた。

「いやいや失敬、お主等があまりにも面白くてのう。」

「はあ」

「何故かお主等を初めて見た瞬間、今までの連中とは違うと思つてな、」

「ひやつて話を聞いてみたいと思つたのじや」

「かなり変わり者だな、あんたは」

「いやいや、お主の方が変わり者だから。丸いし。」

「まあそれはそれで、どうしてもあるの村に用があるんだが、何か良い方法はないか?」

「ふむ、難しいのう・・・

先程も言つた通り、ゲミル族はああいう種族だからのう。出来れば儂もお主等なら手伝つてやりたいのじやが・・・」

そのときだつた。

ネコフン村の方から凄まじい爆音が聞こえたのは。

「な、なんだ!?」

「おこ……」〔フン村が燃えていた……」

「あ……な、なんてこと……」

突然の出来事にリアナは放心状態だった。

「まさかガイア……なのか!??」

スラップの言葉を聞いてか
リアナは家から飛び出した

「おい……へれつ、追いかけるぞデジューん!…」

「いや、まだお茶が残ってるからじぎし待て。」

「いいから早くしつらひーー!」

スラップは家の外にデジューんを蹴り飛ばした。

「ふん、こんなちんけな結界などオレに掛かれば軽いものよ。」

「貴ミル族の結界はアシュラの不思議な術で爆発と共に消え失せた。

そして突然の来訪者達にゲミル族は驚きの顔を露せなかつた。

「貴様何者だ！－！」の村に何か用か！？」

「さあ？これが命令なんでな・・・殺れ」

アシュラの号令が出ると同時に多数の武装した黒服の手下達はゲミル族を殺すべく向かつて行つた

「問答無用ならひらりも容赦はしない－！」

そう言つとゲミル族は一斉にアシュラ達に向かつて呪文を唱え始めた

「むー？」

アシュラの足元から突然炎が立ち昇り、そしてそれは大きな火柱となつて黒服達も巻き込む。

「やつたか！？」

「ゲミル族の同時一斉魔法だ！－！これで灰にならん奴はいない！－！」

しかし、その大きな火柱が一気に消し飛んだ。

「な・・・まさかー?」

そのままさかである。

アシコウラは鎧に多少の焦げはあれど、身には焦げ一つなかつた。

「ふん、ムシケラにしてはなかなかやるじゃないか・・・
おかげで手下は黒焦げ、オレの鎧も黒焦げだ。」

「き、貴様は一体・・・」

「これから死ぬ奴に召乗る必要があるか?」

「く・・・みんな!—一気に仕掛けるぞ!—!」

「いいぜ、来いよ。

そちらから向かつて来た方がオレも楽だぜ。」

やつ面つとアシコウラは6本の腕に剣を持ち構えた。

「はあはあ、これは……！？」

リアナが村に着いた直後、見にした光景は凄まじく、誰もが目を背けるであらう惨劇であつた・・・

「なんじゃこれは……」

「や、やめろ……」
ゲミル族が一人の男に向かう度に真つ二つにされ、
その男の足元には何人もの、両断にされたモノが転がっていた。

リアナは声を何とか出そうとする。

「……………せじのひめ」

だがあの鬼神の「」とき男には届かない。

「ヒヤーッハッハー……どうした……」こんなもんかよ！？
所詮、結界の中に引き籠るしか能がねえ種族なんか田じやねえん
だよ！！」

「ફણન——

「あん? なんだあの女は?」

リアナのやつと出せた大きな声に、アシュラはその存在に気付いた。

「ふん、女だらうと容赦はしねえぜ・・・・・」

セーフティードライバーはリアナの元へ凄まじい勢いで走り始めた。

「ぐ・・・」

リアナは敵わないと知りつつも構え始めた。

皮肉なものじゃな・・・

儂等を蔑んできた者達を庇つ事にならうとせ・・・

そう思い、覚悟した瞬間・・・

「ぐはっ・・・」

アシュラの頭上にデジュンが落ちてきた。

「こつてーーーあのロングゼット一ぶつ殺すーー！」

デジュンはそう呟いたあと、自分の下に倒れているモノを見た。

「ん？誰だこいつ？」

「があーーー！」

アシュラは勢いよく立ち上がり、デジュンは転がった。

「貴様・・・貴様だけは楽には死ねんぞ・・・ーー！」

「おーおー？一体何が？？」

やはりこの緊迫した雰囲気には
この丸い生物は似合わない
この場にいる誰もがそう思った・・・

「せせらぎ」

長いブロンズの女性に、同じブロンズの髪の子供が駆け寄る。

「どうしたのリアナ？」

「みんなが儂をいじめるのじゃーーー！」

リアナも大きくなつたら必ず上手になれるわ。

「ほんとか！？」

「ええ、本当よ。

卷之三

「喋り方？」

ג' ניירן

女の子なんだから、ちゃんと女の子らしい喋り方をしないとダメよ?」「

「ふむ、せうかのハ・・・」

母のカレンはネコフン村でもトップに立つ大魔法使いであり、

かつてファルステイアの大魔法使いであった現長老ジグマールの一人娘である。

儂はその娘なのだ・・・

ネコフン村でのトップともなると、村の住人達への魔法講習等で儂と共にする時間などまるで無かつた・・・

だから儂は幼いときから祖父のジグマールに面倒を見てもらっていた。

「困ったわねえ、おじいちゃんの言葉が移っちゃったのかしじ?」

「儂は何も困らんぞ?」

「まあリアナがそう言つなら良いんだけど・・・」

「それより、今日は母上はずつと家にいるのだ」「へ、なら儂の魔法の特訓をして欲しいのじや!!--」

「ええ、いいわよ。

今日は炎の呪文のレベル1からだつたかしら?」

母が家にいるときはよく魔法を教えてもらっていた。
しかし、いくら特訓しても一向に上達しなかった。
大魔法使いの母の一人娘なのに魔法がまったく使えない、
そんな事では母の名に傷をつけてしまつ・・・
カレンの娘で恥ずかしくならないよう
頑張らなければならなかつた。

そんなプレッシャーは日に日に大きくなつていぐ・・・

そんなプレッシャーに押し潰されそうなとき、
父のラルフと久しぶりに会つた。

父も大魔法使いの夫となると、やはり多忙だった。

母の手伝い、村の管理等で母同様、家に帰る時はあまりない。

「父上、儂は母上みたいに魔法をうまく使えないのじゃ・・・
やはり儂には才能がないのかのう・・・」

「そんな事はないよ、

リアナは今のままでいいじゃないか。

魔法だって完璧な訳じゃないんだよ・・・」

「うむ・・・」

「お父さんだって魔法は使えないが、
こうして何不自由なく暮らしている。
そうだろう?」

「うむ・・・」

儂はこのとき一つの疑問を持った。

ネコフン村の住人達は皆、うまい下手はあれど
全員魔法を扱える。

しかし、父だけは使えなかつた。

魔法使つたのを見たことが無かつた。

何故使えないのか、幼いときからの疑問であつたが
父や祖父、母にも聞いたことはなかつた。
触れてはいけない事だと思ったのだ。

母は大魔法使いなのに、父は使えない。
もしかしたら父は落ちこぼれなのかとも思った。
そう思うと余計に聞けなかつた。

しかし、その謎はある日突然

何の前触れもなく解き明かされる事になる・・・

「長老！大変です！！」

「何事じや、騒々しいぞ！！」

「そ、それが・・・

突然村の結界が解かれ、何者が侵入して来ました！？」

「なんじゅと！？一体誰が結界を・・・
いや、まずはその侵入者を何とかせねばならん！..
侵入者は何人じや？」

「約200人です！！」

「現在は中央広場で他の者が足止めしています！！」

「わかつた。

至急女子供は避難させ、
カレン達大魔法使いを集合させるのじや！..」

「了解しました！！

祖父の冷静な命令を受け、
村人はすぐさま家を飛び出した。

「しかし妙じゃな。

結界が解け、200人の侵入者・・・
偶然にしてはあまりにも出来過ぎていい・・・
まさか裏切り者が！？」

そんな祖父の独り言を聞き、
儂は何か嫌な予感がした。

「リアナ、オマエは他の者と一緒に避難するのじゃぞ？」

「了解じゃー！」

そう言つと祖父は急いで家を出た。

儂は一いつそり祖父の後を尾ける事にした。

「結界を解いたのは貴様等か・・・
この村に何の用があつて来た?」

ジグマールは武装した集団の中にはいるリーダーらしき人物に問い合わせた。

儂はそれを、100m程離れた場所で見る。

「これはこれは、かつてファルスティアの大魔法使いと謳われたジグマール様ではありませんか。
私はクルクート国のアルバドと申します。
以後、お見知りおきを・・・」

「クルクート國じやと・・・?」

「まあこんな所で引き籠もつているあなた達には外の世界の事など知らないでしょう。」

「さつさと用件を言え。
返答によつては・・・」

「まあ率直に言いますと、この薄汚い村に存在する精靈を頂きにきました。」

「な、なんじやと!?
貴様一体何を企んでる!?!」

「あなたもクリーチャーをご存知でしょう?
今、我々の国ではクリーチャーに対抗すべく、ある兵器が開発されていてね。」

「その兵器には是非、精靈の力を与えたいのですよ。」

「精靈をむやみに扱うとファルステイアのバランスが狂うのじゃぞ
！！

それが貴様にはわからんのか……」

「我々がこの世界を救おうと言つのです。
まあクリーチャーを駆除した後は、
我が国がこの世界を支配しますがね。
大人しく精靈のもとへ案内して頂ければ、
我々も手荒な真似はしませんが？」

「貴様等のような連中に精靈を渡す訳にはいかん！！」

「ふ、そうですか。
それでは自分達で探しますよ、
あなた達を殺してね！！」

アルバドの命図と共に他の兵士達が構えた。
それに合わせてジグマール、ゲミル族の男達も構えた。

「逃げても構いませんよ？
無駄ですけどね！！」

「あ、あ・・・」

突如目の前で始まつた戦いに、儂は体が震えた。
早く止めなければ一杯人が死んでしまう・・・
どうすればいいのか何とか頭を働かせた。
母はまだ来ないのか辺りを見回す。

いた。

母だ。

母と共に数人の大魔法使いと呼ばれる村人が数人やつてきた。

「あなた達、一体自分達が何をやつてているのかわかつてゐるの！？」

母は戦いを始めている相手側に問い合わせた。

「これはジグマール様の御息女のカレン様ではありませんか。」

「あなた、何故それを！？」

ジグマールは外の世界でも有名な大魔法使いであつたが、その娘である母の存在は村の外には一切知られていない。

はずであつたが、何故かこの男は知つている。

一体何故・・・

「ふふふ、まだわかりませんかねえ。
ではこれを見てもらいましょうか・・・」

そうアルバドは言つと、後ろから一人の男が現れた。

「な・・・！」

その男を見た瞬間、儂も村人達も凍りついた。

「あ、あなた・・・？」

見間違うはずがない。

あれは儂の父のラルフだ。

もう頭が混乱して、状況を把握出来ない。

「やはりお主じやつたか！！」

「裏切り者は！！」

「裏切り者？

それは違いますよ義父上。」

「あなたが何故そこにいるの！？」

誰もが思つた事を母が先に問い合わせた。

「カレン・・・

オレと初めて会つたときの事を覚えてているか？

あの激しい雨の日を・・・」

「覚えているわ、忘れるはずもない・・・

村の外にボロボロになつたあなたが倒れていた田の事を・・・」

「そうだ、そしてたまたま村の外にいたオマエに助けられたんだよな。

そして外の世界のオレに、オマエは優しくしてくれた。

オレはオマエのそんな優しさに心引かれ、家族になつた・・・

それからはず外の世界のオレに冷たかつた村の住人も優しく接してくれたよな？

そこでオレはやつとこの村に認められ、この村に住む事に許しを得た・・・

得た・・・

「・・・そうよ。」

「だがな、これは始めから仕組まれた事なんだよ！－！
オレはクルクート国の者であり、オレに課せられた任務は
この村で貴様等の信用を得、そして今日といつこの日のために
村の結界の解き方を調べ、結界を解き、
アルバド様をこの村に招き入れる事なのだ！－！」

「そんな・・・」

母は泣きながらその場に崩れ落ちた・・・
儂も父のそれを聞いて母と同じで崩れ落ちた。
儂と母を愛してくれた父の突然の裏切り。
今までの愛は全部嘘だったの・・・？

「！」の外道があ－－！－－

「ぐーあ－－！」

「いや－－－－－！」

祖父の放った光の矢が父を貫いた

母の目の前で父はあっけなく殺された。

「まあラルフの役目は終わりましたし、
丁度良かつたですよ、ゴミ掃除を手伝つてもうつてね。」

そのアルバドの台詞を聞いて

儂の中で何かが切れた

突然の儂の雄叫びに、全ての人気が儂に振り向いた。

「リア・ナ・?」

母の消え入りそうな声が聞こえたが、

僕は構わすその場は巨大な光の塊を投げこむた

「な!?」この魔法の力は・・・
ぐ、ぐわやあおおおあー。」「

その場にいる敵は文字通り全て消滅し、儂は気を失つてしまつた・・・

母の話では儂は三日間は寝たままだつたらし。

更にこの現状を聞くと母は消え入りそうな声で答えてくれた。
裏切り者の女とその娘はもう村には住めないとのことだ。
しかし、本来なら責任を問われ処刑されてもおかしくないのだが、
祖父のおかげで村から追放されただけで済んだらしい。

そして僕は母と一人で見知らぬ土地で暮らす事になる。だが母はやはり父の裏切りがショックだったのだろう。食事も口クに取らず、1年後には他界してしまった・・・

儂は母を火葬した後、ネコフン村のすぐ外にある森に住むことにした。

理由は、母の遺骨を母が生まれ育った大地に埋めてやりたい。だから僕は村の結界が解かれるまでここに住むのだ。

だが結界は再度あつけなく解かれる事になる。

「 わあゞのよつに死にたい？ 珍獸」

「 オレは死にたくないし、珍獸でもねえ……」

「 ほやけ珍獸！…！」

「 デジュンはまた蹴り飛ばされた
そしてデジュンが落ちた先には・・・

「 くつそお、また蹴り飛ばされたぜ・・・ん？」

足の裏に何か不愉快な感触があった。

「 な、これは人間！？」

そこにはアシュラに細切れにされた人間のパートがいくつも落ちていた。

「 貴様もそのよつになりたいか？ 珍獸」

「 てめえ・・・これじゃオレの村と同じじゃねえか・・・」

「 ああ？ 聞こえんなあ！…！」

アシュラはものすじいスピードでデジュンに向かった。

「 なんでオマエ達はこんな事をするんだあ！…！」

「ゴッ！…！」

鈍い音でアシュラの顔面にデジュンのパンチが決まった。

「な、なんだと！？」

予想だにもしない珍獣のパンチに
アシコラはよろめいた。

「テメヒ・・・テメヒの血は何色だあーー！」

デジュンは今までにないほどにシリアスだった・・・

村に向かって走るスラップ。

「デジュンの奴、もうやられたりしてないだろつな・・・」

『ミシケタヨ・・・』

「え・・・？」

何か頭の中に直接話しかけられている感覚だ。

『ヤツト・・・ミシケタ・・・』

スラップはその不思議な声がする方へ導かれるように歩いた。

第八話 決着！！受け継がれたその力

「まぐれで当てたくらいで良いきになるなよ、珍獣」

アシュラは口に溜まった血を吐き捨て、
剣を構え直した。

「オマエは何者だ！！
何でこんな惨い事をする！？」

「オレに一撃をくれた礼に教えてやる！」
オレはアシュラ・・・
この世界の王であるガイア様直属四天王の一人である。」

「四天王・・・やはりガイアの手下か！？」

「これが命令なんだよ。

貴様等のような下等生物に拒否権は無い！！」

「オマエが・・・オマエらが・・・！」

デジュンの体から黄色いオーラが噴き出した。

「こいつ・・・珍獣がどうしたのだ！？」

「うおああああああああああ！」

「どうした！何故動かん！？」

デジュンの気迫に気圧されたのが、
アシュラは向かってくるデジュンを避ける事が出来なかつた。

「だああああああつ……」

身動き出来ないアシュラにデジュンは無数の乱打を引いた。

「ぶ、ぶるあああ！」

「これでえラストオオオオ……」

デジュンの渾身の一撃が決まつた
と思ひきや、やられたのはデジュンだつた。

「く・・・、何だあれは・・・・?」

「うへへへへ・・・ははははは……」

アシュラの体には無数の触手が生えていた。
それはとても禍々しく、見るものに恐怖を抱かせるものであつた。

「貴様のよつな下等生物にオレの真の姿を見せる事になるとはな・・・」

そう告げるとアシュラの体はみるみる大きくなり、異形の姿に変貌
を遂げた。

それに従い無数の触手が醜く動き出す。
「マジすか・・・」

そう呟いた瞬間何かが「デジコ」田掛けて飛んできた。

「はふっ……」

「デジコ」の体は「アシコ」の触手に捕まれた。
そしてその触手はじんじんと「デジコ」を締め付けた。

「あぐっ、ぐぐぐぐ……」

「ハハハハ、そのまま内臓を口から吐き出されちゃう……。」

「ぐ・・・ぐわっ……。」

意識が朦朧とし、もうダメかと思つた瞬間

ドサッ

「ゲホッゲホッ……。」

「無事か「デジコ」よ……。」

どうやら切れた触手と一緒に地面に落ちたようだ。

「リアナー? オマエが助けてくれたのか?」

「・・・お主は早々逃げるがよい。」

「せ? 何言つてんのセー?」

「いれせいの村の問題じや、お主は関係ない。」

「待てよ！－！こいつはこの村の住人を何人も殺してゐるんだぞ！－？
このまま引き下がる訳にはいかない！－！」

「しかし・・・」

「もうオレの目の前で誰かが殺されるのは嫌なんだよ・・・」

「そうか……わかった！！」

リアナは決心し、腰にぶら下げる袋から一つの玉を取り出した。

「僕が艰辛を作る。お主は奴に力一杯攻撃を撃ち込むのじゃ！」

スミレが咲くのが

「まあ見ておれ・・・・」

「母上、これは？」

ある誕生日、母は私にいくつもの直径3cm程の丸い石をくれた。

「これはね、魔石といつなのよ。」

「マセキ?」

魔石と呼ばれた石は淡い蒼色をしていて、とても美しかった。

「この魔石には古代より、ゲミル族による魔法が封じ込まれていてね、

魔法の詠唱が苦手なあなたでも簡単に魔法が使えるのよ。」

「それは便利じゃーー！」

でも何でみんなはこんな便利なものを使わないのじゃ？」

「魔石というのはゲミル族なら、誰でも詠唱を短縮させて魔法が使えるぶん、

魔力を大量に消費するものなの。普通のゲミル族ならすぐ魔力が尽きてしまうわ。」

「だからみんなは使わないのじゃな。

でもそれじゃ僕も使えないのでは・・・?」

「あなたは大丈夫。

あなたはみんなよりも魔力が高いから・・・」

今ならわかる・・・

魔力が高いのは母譲りだからだろう。

そして魔法の詠唱を唱えてもうまく発動しないのは、儂の血にゲミル族以外の血が混じっているからだ……

母はわかつていたのだ、儂が魔法をうまく扱えない理由が・・・
だから儂に魔石を託したのだ・・・

事実・・・だがあのとき、その魔石、母譲りの魔力が原因で儂が暴走したのも

もう一度と魔法は使わないと心に決めた。・・・

しかし今はそんな事を言つてゐる場合ではない。

儂が魔法を使う事によつて、村のみんなが助かるのならば・・・

「属性『風』、レベル『5』、発動！！」

そうリアナが叫ぶと、右手に握られた玉が光だし、玉から放たれた風の刃がアシュラ目掛け飛んでゆく。

「ま、魔法！？」

「オマエ、ゲミル族なのか!?」

「何をしたのーー早よせんかーー。」

「あ、ああ、わかったーー！」

風の刃がアシコラの体を切り刻み、
青色の血が噴き出す。

「うーーーあの小娘、魔法が使えるのかーー。」

「おああああああああーー。」

「なーー？」

リアナの魔法に気を取られ、
デジュンに気付かなかつたアシコラは渾身の一撃を食ひついーーー。

「ぐふるああああーー。」

「今度こそやつたかーー？」

「こや、まだじやーー。」

アシコラの傷口から触手が生え始め、
もつ触手だけの悍ましい生物になつてしまつた。

「貴様等下等生物にイイイーーヤラれルワケーハアアアーー。」

「おこおこ、こんななどうしきつてゐのよーー。」

「まだ・・・まだ諦める訳にはいかぬ！！

属性『火』、レベル『10』発動！！

属性『水』、レベル『10』発動！！

リアナの魔法がアシュラに炸裂するが、
ダメージを受けた部分にまたいくつもの触手が生える。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

アシュラの無数の触手が村の建物、残っている村の住人を攻撃する。
触手が触れるだけで建物は粉々に砕け、
触手が締め付けるだけで住人の骨は砕け、内臓が潰れる。

「なんで・・・なんでこんな事をするのじゃ・・・
儂等や、この村の住人が何をしたというのじゃ・・・」

「くっそ！！

どうすればいい・・・どうすれば奴に勝てる・・・」

「流星落！！」

突然空からアシュラの脳天向かって、スラップのかかと落としが決
ました。

「アグアアグオ！！」

アシュラは凄まじい雄叫びを上げるが
割れた頭からはまた触手が生える。

「スラップキタ（。。。）！」

「待たせたな！！パワーアップしたオレ様が帰つて来たぜーー！」

「オマエ今まで何やつてたのさーー！」

「それはこの化け物倒してから話してやるよ。
デジュン、リアナ、お前等は下がつてるーー！」

「下がつてるつてオマエ・・・

そいつは触手でうねうねで、すぐ再生するんだぞーー？」

「言つたら？パワーアップしたつてーー！」

この威圧感、ハッタリではなく本当にパワーアップしたんだ、
デジュンはそう体で感じた。

「一撃でカタ付けてやるぜーー！」

スラップは拳に氣を溜め始めた。

「デジュンーー！」

これが大会のときにオマエに食らわす予定だつた
オレのとつておきの必殺技だーー！」

スラップの凄まじい氣を感じたのか、

アシュラの無数の触手がスラップ目掛け飛んでくる。

「行くぜーー！」

「無敵流ーー牙神突ーー！」

アシュラに向かつて物凄いスピードで向かう。スラップの拳に触れる触手は跡形もなく消滅し、それでもスラップのスピードは揺らがない。

「消えろおおおおおおおおーー！」

アシュラの腹に正拳が決ました。

「キサ、マラ、はコレデガイア様ノ敵トミナサレタ・・・!」

「上等だ、オレ達はそのために戦っている！！」

「クハハハハ・・・セイゼイソノヒまテ悔いのナイよつ生きノビル
ガイイ!!」

そう言い残すとアシュラは触手同様、

跡形もなく文字通り一片の歯片すら残らず消滅した

スリーハン

一體ど、こだわる事ない?

デジュンはまじまじとスラップを見たが、特に変わってる訳でもなく、ただのスラップだった。

「ああ、大地の精霊の力を得たんだよ。

「あれか」「あれハ」「アラハ」などはたゞ

「マジかＹＯ！！

一体どうしてだ!?

オレもパワーアップ出来るのか!?」

「後で話してやるよ。

それより、酷いなこの有様は・・・」

スラップは辺りの死体を見ながら囁つ。

「ああ、罪もない人を何人も殺しやがって・・・
ガイアの野郎絶対許せねえよ・・・」

あつ！－と思い出したようにデジュンはリアナの元へ歩み寄る。

「リアナてゲミル族なんだろ？魔法で生き返らすとか出来ないのか
？」

「ゲミル族、リアナが・・・？」

「ああ！－すんげえんだぜ！－
魔法があればみんなを生き返らす事くらい・・・」

リアナの涙を見た瞬間デジュンは自分の無神経さに気が付き、
自分の発した軽はずみな言葉に悔いた。

「魔法は・・・魔法は完璧じゃないのじゃよ・・・」

「リアナ・・・？」

「ゲミル族なんて、決して優れてる訳ではないのじゃ！－
魔法が使えるだけで、タダの人間と変わらない！－
魔法だって何でも出来る便利な物ではないのじゃ！－」

「すまない・・・オレが無神経すぎた・・・」

その言葉を聞いてか否か、

גַּם־עַמְקָדָה וְעַמְקָדָה

「リアナ・・・」

リアナは泣いた
・
・
・

父の裏切り、母の死、村の崩壊、
決して今まで泣かなかつた訳ではない。

それでも泣いた。

今までの悲しみを全て吐き出すよ！」・・・

第九話 悲しみの痕には

あの戦いの後、オレ達はリアナの家に戻った。
いや、戻らざるを得なかつた。

村の住人達の供養をしようとしたら、
車椅子に乗つたリアナのじいちゃんが現れ、追い出されたからだ。
オレ達がよそ者だからなのか、
やはりこの村の住民達はどこかオレ達とは違う人種なのかも知れない・・・

「落ち着いたか？」

「ああ、済まぬな・・・」

「あ〜いや、オレが無神経な事言つたのが悪いんだし・・・

「気にするな、お主のせこではないよ。
それより・・・」

「ん?」

「儂の村を助けてくれて・・・その・・・
ありがとう・・・」

泣いて目を真つ赤にしたリアナが

「デジュンとスラップに礼を言つ。

「いやいやいや……

オレ達は当然の事をしたまでよ?
なあスラップ。」

「ああ。オレ達は奴らの親玉、ガイアを倒すために戦つてゐる。
しかし、残念な事に村の人達は助けられなかつたがな……」

「お主等のせいではない……

そうだ、儂をお主達の仲間にしてはくれぬか?」

突拍子もない突然のリアナの発言に一人は驚いた。

「女の子をオレ達の旅には連れて行けない!!」

「デジュンの言つ通りだな。

オレ達が相手にするのはとんでもない化け物だ。」

「儂は奴らが許せない!!

村のみんなの仇を討ちたいのじや!!

頼む!!」この通りじゃ!!」

「そう言われてもな……」

「ここの村に勇者を探しに来たのじやろ?
勇者探しも手伝つから頼む!!」

「あへ、そういうえばそんな目的だったな確か(笑)」

「デジコン……オマエは本つ 当にバカだな……」

そのとき、リアナの家にあの人物が入つて來た。
そう、あの全身白タイツの男が……

「勇者はキミ達の目の前にいるよ。」

「変態アーッ！」

「・・・・・ドクターノだつちゅうの」「……」

「なんじゃ、この変態は・・・」

やはり初めて見る人にとっては、この全身白タイツは衝撃的なよう
だった。

「それで変態、勇者が目の前にいるってどうこいつ事だ？」

「言葉通りだ。

リアナ、キミがその勇者なのだよ。」

やはりこの人物の言ひ事は衝撃的な事ばかりだった……

「ドクター、それは本当なのか？」

「本當だ、スラップ。

そして君は無事、精靈の加護を受けられたようだね。」

「おかげさまでな、それより詳しく述べてくれ。」

「ああ、キミ達は勇者であると同時に、お互に共鳴し合いつ力がある。デジュンとスラップの出会いは特に何も無かつたと思つたが、今回はキミ達二人とリアナの力の共鳴を感じたはずだ。」

「言われてみれば、儂は何か不思議なものを感じたのう・・・」

「まだ君達は勇者の力はほとんど無いに等しいので共鳴する事は出来ないが、近くに精靈が存在する事によつて勇者の力は増幅され、力の共鳴が可能だ。

そしてスラップ、キミは精靈の加護を受けた際に感じたはずだ。勇者としての力の共鳴が大きくなるのを・・・」

「今回オレは土の精靈の力を得た。

そのとき確かにデジュンとリアナの力の共鳴を強く感じたな・・・」

「

「私は特別なセンサーが内臓されててな。

そのセンサーのおかげで大まかではあるが、勇者の力、精靈の力を感知することが出来るのだよ。」

「それで今回、お主等はこの村に辿り着いた訳じやないか（笑）

「みたいだなあ、変態ノも役に立つじやないか（笑）」

「・・・次の目的地は決まっているので
そこに向かつて欲しいのだがいいかね？」

「わかった、次はビニに行けばいい?」

「次はカイリーーン海域の底に行つてくれ。
そこに精靈がいるはずだ。」

「いや海の底なんてどうやって行けばいいんだよ……」

「安心したまえデジモン、ちゃんと手は打つてある。
とりあえず明日の正午、先にコビナメ村の船の前で待つてくれ
ないか。」

「了解だ、何か海に潜る策があるんだなドクター。」

「任せておけ諸君。

それでは明日コビナメ村で落ち合おうぞ……」

ボムツ……

「ふほふほ……あの変態はいいかげんにしろよ……」

「！」ほつ……こつもこつなのかな? あのドクターとやらうせ……

「ああ、すまないな。

いつもああなんだドクターは……

「困った奴じやのう……
といひで……」

「あん?」

「儂がお主等が求む勇者とこいつ」とじやな?」

「まあやつこいつ事だな、あの変態が言ひつけ。」

「では儂はお主等の旅に連れて行つてもいいべののじやな?」

「腑に落ちないが、勇者だもんな・・・

OKだよなスラップ?」

「ああ。

だがキリサゲミル族といつ事を何故隠してた?」

「やつだぜ!…これから共に戦つ仲間になるからひそかに
教えてもらひつけ!…」

「やつじやな・・・

お世等にはりませんと話すべきじやな・・・

「・・・とこいつ」とじや。」

「そんな過去があつたのか・・・」

「すまぬな、どうしても結界の外に住む以上、
ゲミル族と知られると面倒な事になりかねぬ故なのじや。」

「それはしょうがないぜ、オレだつてそんな事があつたら隠すもん

「オマエは見たまんま不思議な生物だろ？」「

「あ？ オマエはオレに喧嘩売つてんのかロングー！？」

「やるか？精霊の加護を受けたこのオレと。」

「ぐう・・・オレが精霊の加護を受けたら必ず仕返しするからな！」

「やせつねやしれ二のいぬはむかしめ・・・

儂は純粹なゲミル族ではないので魔石が無ければ魔法は使えぬ。だが足手まといにならぬよう頑張る故、よろしく頼むぞ……」

「おお、まだへこむやうな顔だわ！」

「ああ、またこんな悲劇が起きない様に頑張ろうな。」

「それで、出発は明日のよひなので、儂は少し村に行つてくのだよ。」

「ん? じゃあオレも・・・」

「デジモンはリアナを追おうとしたが、

スラップに引き止められた。

「一人で行かせてやれ・・・」

「すまぬな・・・明日の朝までには戻る。

それまでゆっくりこの部屋でくつろいでもらつて構わんぞよ。」

そう言い残すとリアナは外に出でてしまった。

その悲しさが滲み出た後ろ姿を一人の目に焼き付けて・・・

「結構無理してるんだろうなリアナは・・・」

「そうだな、まあオレ達は明日までくつりようぜ。
てか、精霊の話、詳しく聞かせうよ。」

「構わないが、リアナも一緒にいいだろ。
これからのおマエ等のためにもな・・・」

母上・・・

やつとこの村に歸らせてあげる事が出来ます・・・

リアナは村の隅に小さな墓を作り、花を添えた・・・
この下には母の遺骨を埋めてある。

簡易的だがちゃんとした墓だ。

そしてリアナの背後に、車椅子に乗った祖父のジグマールが現れる。
簡易的な墓を見て・・・

「それはカレンの墓か?」

「そうじや・・・」

「この村はオマエがいたからこそ、
被害はこの程度で済んだ。」

「・・・・・・」

リアナは振り向かず、背を向けたままである。
それに構わずジグマールは喋り続けた。

「だからこの村に、村を追放されたカレンの墓を作る事は構わない。
この村を救つたオマエの母なのじゃからな。」

「・・・・・・」

「そしてオマエにはこの村に戻る権利を譲る。」

「・・・・・・」

「結界が再び破られた今、より強い結界を張らねばならん。ワシはもうこの体じゃ、協力してもらえんか。」

「いつまでも外の世界を拒絶し続け、誰も受け入れられないようではこの村はそう長くはもつまい……。」

「リアナ……！」

やつと言葉を出してくれたと思ったら、どんな事と言ひ出した。

この村の歴史、住民、全てを否定する言葉だ。

「オマエは自分が何を言つていろのかわかつていろのか……！」

「ええ。
儂はこの村に戻る気はない。」

「オマエはカレンに似、優秀な子じゃ……考え直せ……！」

「あなたもわかつていろのはずでしよう。」

今この世界では何かが起つとしているのを……

外の世界に目も暮れずゲミル族といつ殻に閉じこもり続け、魔法という力があるのにそれを世界のために使わず、そんな人間に、儂はなりたくない……。」

「あの珍獣達にたぶらかされたのか！？」

「これは儂の意思じゃ。」

もうこんな悲劇を起さないためにも、儂はあの者達と共に旅に

出る。

この魔法の力が人々を少しでも救えるのなら儂は戦う！！」

「もういい、オマエには失望したわ！！

さつさと出てゆけ！！オマエなどゲミル族ではないわ！！」

「儂はゲミル族ではありません、人間です。」

最後にそれだけを残すとリアナは行ってしまった・・・

そのときのリアナの顔は何か吹っ切れたようなそんな顔であった。

薄暗い大広間でエイスという男は佇んでいた。
何かを感じているかのようにずっと・・・

「精霊の加護・・・覚醒してしまったか・・・」

そして突然エイスの体に激痛が走った。

エイスはその場で崩れ落ち、口からは大量の血を吐き出す。

「エイス様！？大丈夫ですか！！」

そこに忍装束のような服を纏つた、長い金色の髪を後ろで結った女性が現れる。

「ぐう・・・・、シャナ・・・・？」

「一度お休みになられた方がよろしいのでは・・・」

シャナと呼ばれた女性に支えられエイスは何か立ち上がった。

「残りの三つの場所はわかつたのか？」

「『水』と『風』はわかりました。

『火』はまだ調査中です。」

「そつか・・・

では『水』にリヴァレ、『風』にヴァファムを向かわせろ。
我々は結界に護られた精霊に手出しあ出来ぬが、
奴等の手に渡らないよう見張る事は可能だからな・・・」

「ですが、四天王の一人も向かわせては
この城の警備が薄くなってしまいますが・・・」

「心配いらん。

この状況ではしばらくテスミオス共も大人しくしているだらう。
『上』の連中も『鍵』が揃つまでは傍観者を続けるだらうしな・・・

・

「・・・わかりました。」

ではそのように手配をしておきます。」

「それと、オージを見張つて置け。

奴等が何を企んでいるのか知るためにもな・・・

「わかりました。

それでは・・・」

そう大広間から出ようとしたといひ、
思い出したようにエイスが呼び止めた。

「シャナ・・・いつもすまんな・・・」

「いえ・・・

失礼します・・・」

シャナが大広間から出たのを確認した後、
エイスは再び崩れ落ちた。

「私のやつていることは間違つてゐるのかもしけん・・・
オマエ達が生きていたら、今の私を見て嘲笑うか?
それとも・・・」

第十話 オージ暗躍

「……以上が今の動きです。」

「ああ、じつは苦勞だつたな。」

まったく人気のない海沿いの丘の上で
オージはシャナの報告を受ける。

「それと、やはりエイスはオージ様について怪しまれておりますが・
・」

「ふん、奴相手に怪しまれずに行動するのも無理といつもの。
怪しまれるのは初めから承知の上だ。」

「ですが、このままでは我々の計画に支障をきたす恐れが・
・」

「オレを誰だと思っている？

オマエはまだエイスに近づき、オレに情報を報告すればいい。」

「……はい、失礼しました・
・」

「つづづく上の老人共はオレに無理難題を言つ・
だが、所詮エイスも『鍵』を狙う身・
この状況でオレに仕掛けるほどバカではない。」

「・
・

「どうひでトジュン達はどう向かおつとしている？」

「今日の朝、コビナメ村に向かつたようです。」

「次の目標は『水』か……
オマエの報告では水と風に刺客を送つたそつだな?」

「はい、水にリヴァレ、風にヴァファムを送りました。」

「では、風の方に仕掛けでみるか……」

「では私が……」

「いや、いい。

暇潰しにオレが直々に行くさ。

丁度あの辺りに発見したのだよ、『適格者』をな。」

オージは不敵な笑みを浮かベシャナを見た。

「それでは……

もう一人の『覚醒』が始まるのですね……」

「ああ。

覚醒後、デジュン達へ近づけてみるか……」

「それはあまりにも軽率では……」

「くどいぞシャナ。

オマエはいつからオレに『指図』が出来るようになった?」

「申し訳ありません……」

「・・・まあいい。

オマエはその刻が訪れるまでエイスの監視を怠るな。」

「了解しました。

それでは失礼します・・・」

シャナは消え、丘の上でオージは一人になった。

「所詮、老人共とエイスの愛玩具か・・・」

そう呟き、オージもその場から姿を消した。

「なんだこの祠は・・・」

薄暗い祠を何者かに導かれ歩くスラップ。

そして入口から100m程歩いた先にそれはあった。

「よく来たね・・・」

そこにはつづくと黄色く輝く少年がいた。

「あんたか、オレの頭に直接話しかけて来たのは・・・」

「久しぶりだね。

あ、といつてもキミには以前の記憶がないのか。」

「一体・・・何を言つてこる?」

「キミの前世・・・

そう、ボク等精靈の加護を得てガイアを封じたとされる伝説の勇者の一人『リューネ』・・・
キミはリューネ同様、大地の精靈のボクの力を得てもらう。」

「オレはそのリューネとやらの転生した姿であるから、前世同様あんたの力を貰えるのか・・・」

「ああ。それにしてもキミはリューネとそつくりだね。格闘術が得意であるところといい、ね・・・」

そう言い精靈はスラップをジロジロ見る。

「・・・何が言いたい?」

「なんでもないよ。

さあ世間話はここまでだ。

キミの仲間が今ガイアの手下と戦っているんだろう?
手遅れにならない内にボクの手を握つて。」

そう言うと大地の精靈はスラップに手を差し伸べた。

「それだけで精霊の加護とやらが受けれるのか?」

「ああ。

でも、ボク等精霊の加護は所詮キツカケに過ぎない。
多少パワーアップはするが、その後はキミ次第・・・」

それを聞き、スラップは精霊の手を握る。

精霊の手はとても暖かく、今まで感じたことのない虚ろな存在に感じた。

「さあ、これで終わったよ。」

そう言われスラップは手を離し、自分の体を確かめる。

「確かに特に何も変化は無さそうだな。」

「そうだね。

スラップ、どうかこの世界を救つてあげてくれ・・・」

「ああ。

必ずガイアを倒し、この世界を平和にしてみせるーー!」

「・・・・・・・・

キミ達は先代の勇者達のように、この世界の真相、未来を知ることになる。

それでも決して挫けずに頑張って欲しい・・・」

「世界の真相?

それは一体・・・うわっ!?

精靈の姿がゆりゅりと揺りやが、今にも消えそつであつた。

「それはいざれ分かる・・・

頼んだよ・・・」

精靈は跡形も無く消滅し、祠は元の闇に包まれた・・・

「・・・という事があつたんだよ。」

三人は早朝にリアナの家を出発し、ゴビナメ村に向かつ中、スラッグはデジコンとリアナに自分が経験した精靈について話をていた。

「なるほど、そんな事があつたのかあ。」

「あの村の精靈が儂等にとってそんな重要なものだつたとはのう・・・」

「ああ、まあオマエ達もいざれ経験すると想つが参考までにな。」

「しつかし、オマエだけずるいよなあ。

オレがそこに行けばオレが加護を受けれたんじゃねえの？」

「いや、その大地の精靈はオレの前世にも加護を貰っていたりしい。
だからそいつが転生した姿のオレも、前世同様に大地の精靈の加
護を受けるのが自然じゃないか？

精靈が呼び掛けたのはオレだけだったみたいだしな。」

「やうじゅのう。

精靈との相性もあり、誰でもいいといつ訳ではなきやうじゅ。

「くつそーー！」

次はオレが精靈の加護を受けてえなあーーー！」

「お?

ほれ、やうじゅしてこむつかりけひにコビナメ村らしきものが見えたぞ
よ。

リアナの指差す方向に、村が見えた。
海の近くだけあって船もたくさんあり、漁師達が忙しく作業するの
が見える。

「おほーーー！」

もうそろそろ昼だらへーこの村で昼飯にじよづぜーーー。
獲れ立ての魚とかうまそうだーーー！」

「やうじゅのう。

朝から歩きつぱなしで僕も腹が空いたわ。

「じゃあ昼飯とこくか。

「おい！…あんたらだよ、そこの人。」

「ん？なんじや？」

突然、漁師の男に声を掛けられる。

「あんたらだな、丸い珍獣連れた一人組みは。
全身白タイツの変態からあんたらに手紙を預かっているんだが。」

「な・・・・！」

「二人組みじゃなくて三人組みだ！…！」

怒るデジュンを余所にスラップが答える。

「すまない、その変態からの手紙を見せてくれないか？」

「これだ。

確かに渡したからな、そんじや。」

三人は渡された手紙を読んだ。

すまない、少し野暮用で私は同行出来なくなつた。

船の手配は済んでるので、港にある『シェイド丸』に乗つてカイ
リーン海域まで行つてくれ。

そして海底に潜る手段も船長に伝えてあるので、よろしく頼む。
ドクターZより

「土壇場で怖くなつて逃げたんかあの変態は…・・・」

「ふむ、あの船ではないのか？
ショイド丸と書いてあるが・・・」

「なー？」

本気である船なのか・・・？」

ドクターZより指定されたショイド丸は
かなりオンボロであり、とても二人は乗りたいとは思わなかつた。

「絶対沈みそうな船だよな・・・」

「オラの船が沈む訳あるか！？」

「はふっ！..！」

デジュンはヒゲをもつさつ生やした体格のいい男からゲンコツをも
らつた。

「あんたは？」

「オラはショイド丸の船長を務めるアロンだ。
話は聞いている、乗りな。
もちろん昼飯も用意してある。」

「用意がいいな、今回のドクターは・・・」

「失礼じゃが、本当にあの船は大丈夫なのか？」

「お嬢ちゃん、船も男も見た目じゃないんだぜ?
オラを信用しろ。必ず目的地まで連れてつてやるよ。」

「まあいいか・・・
何か秘策があるんだろうし、乗せてもう一つ事にするよ。
行くぞデジュン。」

「あ、ああ・・・」

なんでオレはいつもこんな役ばかりなんだ・・・
デジュンはつくづくそう感じずにはいられなかつた。

デジュン達が船に乗る事を遠くから確認する白タイツの人間。

「すまんな・・・
今回は別件で一緒に行く事が出来ん。
なんとか頑張つてくれよ・・・」

そしてデジュン達は精霊を目指しカイリーン海域に向かう。
ガイア四天王の一人が待ち構えているとも知らずに・・・

第十一話 海の底での戦い

「おひ、目的のカイリーン海域に着いただよ」

目的地に着き、船長の「ロロン・ハーディュン達の元へ行く。
そこで船長が見たのはぐつたりしている一人 + 一匹の姿であった。

「おえつぶ・・・もう少し何とかならなかつたのか・・・」

「やはりボロい船じゅつたな・・・」

「さすがに丸いオレモ」の船酔いは・・・」

「なんでえなんでえ！
だりしねえなあ、こんなもんの搖れでよーーー！」

「いや、すまない・・・

とりあえず目的地には着いたようだが・・・」

「とつあえず礼はまわるよ・・・」

「おおみーーー

「だがこつからオメハ等どうすんだ?
見渡す限り海なんだが・・・」

船長の言つ通り、周囲には島一つ見えず、視界には海しかない。

「確か海の底だったよな・・・
スラップ、どうすんだ?」

「いや、オレに聞かれてもな・・・」

「「」の底に精霊がいる・・・！」

何か感じ取ったのかリアナが呟いた。

「リアナ、分かるのか？」

「ああ、これがお主の言っていた精霊との共鳴なのじゃね？
確かに何か不思議なものを感じるわい・・・」

「てことは今回の精霊はリアナなのか！－

・・・またオレじゃないのね・・・（・・・）（・・・）

「まあそんな気を落とすな。

しかしどうしたものかね、底に潜る手段が無いしなあ・・・」

「あつ！－！」

何か思い出したように船長は船の倉庫に向かった。

「どうしたのじゃ船長は・・・

すると船長は、人の頭がスッポリ入りそうなガラスのメットを三つ持つて來た。

「そいや、白タイツの変態からこれをオマエ等に預かってたんだわ。」

「なるほど、これがあれば海の底まで行けるな。」

「ホントに用意がいいのう・・・」

「オレは体」とスッポリ入るんすけどね・・・

三人はガラスのメットを被る。

「すまないが船長、オレ達が戻るまで船をここに停めてもらつてい
いかな?」

「当たり前だら、オメエ等はこの船がなけりや村に戻れないしな。」

不本意だが、帰りもこのボロ船に乗らなければならぬ。
またあの揺れを経験すると思つとぞつとした。

「よし行くぞ・・・」

「了解じゃーーー！」

「主人公なのに、最近はスラップが仕切ってるなあ・・・」

三人は同時に海へと飛び込んだ。
まだ見ぬ精霊を求めて・・・

しばらく潜つていると、ある祠が見えた。
(どうやらオレのようじやな・・・)

共鳴がどんどん大きくなるわ・・・）

祠に入つてみると、そこはぼつかつと空洞になつていた。

「じゅやうじには空氣があるみたいだな。
しかし、あんな窮屈なメットに体が丸いと入つてたらしどい
わ・・・」

「オマエはそうだらうな。

だが服がビショビショだ、風邪引かないうちにしゃべると蒸まされ

うぜ。

どうだリアナ、精靈との共鳴は？」

「どんどん大きくなつてるわよ。

ここで間違いない。」

リアナはキョロキョロすると、ある一点を指差した。

「あそこじゃ。あそこの奥に精靈がいる。」

リアナが指差した先に、

大きな胸がこぼれ落ちそうな程露出が激しい派手なボンテージ姿の女性が見えた。

「あれか？あんなもんのか精靈で。
かなり派手なお方ですが・・・」

「いや違う・・・

オレが見た精靈はもっと不思議な感じがしたが・・・
てか普通に考えてあんな露出する精靈ておかしいだろ。」

「何者じやお主はーー！」

「ふふ、あなた達を抹殺する者よ・・・」

そう言うと女は水で作り出したいくつもの刃を三人に投げつけた。

「あぶねえ！－

なんだあの女は！－」

「どうやら精靈ではないらしいな。
ガイアの手下か！？」

「あはははは！－

あたしは四天王の一人、リヴァーレ！－

あなた達に精靈を渡すわけにはいかないわ！－」

「破廉恥な女め！－

儂等の邪魔をするといつのなら容赦はせぬぞ！－

リアナは腰の袋から魔石を取り出した。

「この田舎娘が！－

アシユラを倒したくらいでいい気になつてんじゃないよーー！」

「田舎娘か・・・

「ふ、お面白いのう。

ではその田舎娘の力を見せてくれるわーー！」

「お、女同士の争いだわ・・・」

「やばいな、デジュン離れたほうがいい。」

スラップはデジュンの手を掴み、急いで一人から離れようとした。だが時既に遅し、リアナとリヴァレの攻撃が炸裂し、一人はその爆風で吹き飛ばされた。

「ぐー！これがゲミル族の魔法か！！」

「いやこれはアシュラ戦より凄まじいぞ！..」

お互の攻撃後の煙から一人の姿が見えてきた。ほぼ同威力で相殺されたのか、共に無傷である。

「やるわね田舎娘！..
少し悔っていたわ・・・」

「まだまだこんなものではないぞよ！..
消し去る前に聞きたい事がある。

罪の無い人々を無差別に殺し、お主等は一体何が目的じゃ？

「あたしを消し去るなんて無理だと思うけど。
それにしても罪の無い人・・・ねえ。」

「そりゃークリーチャーを操り、オレの村を破壊しやがって！..
ガイアの目的はなんだ！..」

「ぐーあははははは！..

クリーチャーを操り、罪の無い人々って笑わせないでよ。
あなた達、本当に何も知らないのね。

それでも本当に勇者の転生なの?」

「なんだと・・・?」

「口ケにしやがつてえ!!

村のみんなの仇だ、行くぜえ!!」

デジュンはリザヴァレに向かつて行つた。

「あなた達ではあたしは倒せないわよ。」

スカツ

「はぶつ!!

デジュンの猛攻空しくリヴァレをすり抜け、地面に落ちてしまった。

「すり抜けた・・・何をやつた!??」

「なあんにも?

言つたでしょ、あなた達じゃあたしの足元にも及ばないのよ!!」

リヴァレは振り上げた右手から無数の水の刃を飛ばした。

「危ない!!」

リアナはデジュンとスラップの前に行き、魔法でバリアを作り出した。

「すまねえ、助かつたぜ・・・」

「あやつには何かタネがありそりじゃな。」

「今度はオレがやつてみるわ。

この大地の精霊の力でな！！」

スラッシュはバリアの中から抜け出し、空高く舞い上がる。

「はああ！－流星落！－！」

しかしそれでもスラッシュの攻撃もすり抜け、リヴァレが立つ地面に大きな窪みを作り出す。

「ふふ、直撃したらさすがのあたしもやばいわね。」

「オレの攻撃でもダメか・・・」

「おい、何か体が・・・」

「どうしたのじゅうじゅう？

「・・・！」

「やつと効いてきたわね、特性の麻痺薬よ。

この部屋に来た時に薬をバラ撒いておいたの。」

「え・・・たねえ事しやがる・・・！」

「しかしあ主もバカじゅの・・・

致死性の毒ならすぐに勝負は着いたところのこ・・・

「すぐお終いはまらないでしょ？ ジワジワと拷問しながら殺してあげるわよ。」

「見た目通り女王様気取りかよ・・・悪趣味な女だな。」

「あなたは美形だから最後にじっくり可愛がってあげるわ。簡単にイケるなんて思わないでね・・・まずは・・・そうね、丸い珍獣からいこうかしら。」

「オレかＹＯ！？」

「なんでいつもオレばっかり・・・」

「あなたは焦らさずすぐにイカせてあげるから心配しないで。」

リヴァーは倒れているデジュンの頭目掛けて水の刃を突き刺そうとする。

「ああああー！死ぬーーー！」

「デジュンーーー！」

間一髪、スラップが水の刃を掴みデジュンは一命を取り留めた。

「助かつたぜスラップ・・・」

「ああ、だがこれはさすがにまずいぜ、オレも体が動かなくなつてきやがった・・・」

「二人仲良くなきたいのならそつしてあげましょうか？」

リヴィアレは水の刃をスラッシュヒトジュンの両腕に刺した。

「ぐあうーー！」

「「」のアマ・・・ーー！」

「それでもまだ体を動かせたとしても
両腕は地面に水の刃で刺さつてゐるから
私に攻撃することや逃げられる事も出来ないでしょ？」

「く、デジュン、スラッシュ・・・」

「リアナーー！オマエは逃げるーー！
ここで三人殺されたらもう取り返しが着かないーー！
せめてオマエだけでも・・・」

リヴィアレは騒ぐスラッシュの右足に水の刃を刺した。

「ぐあーー！」

「逃がさないわよ、あの田舎娘もね。
さあそろそろ一人の頭にブスッとイキましょーか。」

「あ、ああ・・・」

儂はまた大切なものを田の前で失うのか・・・
そんな事は嫌じゃーー！」

じやがこの体では魔石を取り出す事が・・・
魔法詠唱、それしか・・・

出来るのか？今の儂に・・・

やるしか・・・ない！！

リアナはそう決意し、魔法の詠唱を行い始めた。

「つーーー！」

リヴァレは後方からプレッシャーを感じ振り向いた。
そこで見たのはリアナの体から発せられるとてもない魔力のオーラだった。

「なつ、シャナの情報では田舎娘は

魔石無しでは魔法は発動出来ないはずでは・・・？」

（魔力が高まるのがわかる・・・
よくわからぬがこれはいけんぞよーーー）

「おいスラップ！！

リアナがすんごい魔法を撃ちそうだぞ！！
これは期待していいんじゃないのか？

「ああ、だがこの状態ではオレ達も巻き添え喰らひんじゃないか？」

そんな事を言いつてる間にリアナはリヴァレに向けて光の球を撃つた。

「あ・・・」

「くつーーーそんな魔法がああーーー！」

リヴァレは光の球を打ち消すべく、無数の水の刃を放つたがそれでもリアナの魔法は揺らぎもせず真っ直ぐにリヴァレに向かって行く。

「おい！…マジかよ！…
オレ等もいるんだぞ！…」

「リアナを信じろ！ジユン…」

「オマエが巻き添え喰つて言つたんだろうがあ…！」

「！」の田舎娘があああああ…！」

チユドオオオオン！-

「やつた…・・・のかのう…・・・

そこにはアジコンとスラップしか存在せず、リヴァレの姿は無かつた。

「ビラヤリ無事のようだなオレ達…・・・

「オレの言つた通りだろ？

だがどうやらあの女は物理攻撃はダメでも魔法攻撃は効いたみたいだな。」「

「儂にも魔法詠唱が出来た…・・・

いや今は体の毒を解毒せねば！…！」

リアナは魔法で自らの体の毒を抜いた。
そしてデジュンとスラップの毒も抜き、
二人の体の傷も回復させた。

「サンキューなリアナ！！

オマエの魔法のおかげで助かつたぜーー！」

「だがいつにも増して魔法が強力だつたな？

近くに精靈がいるから力が增幅されているというのか。」

「かもしだぬ・・・

魔石無しでも魔法が使えたのもそれが理由かもしだぬな・・・

「よつしゃーー！ガイアの刺客も倒した事だし、
わざわざとリアナに精靈の加護を貰えてもらおうぜーー！」

「そうじゃな、まあ難しい事は後からでもいいじゃろ？

三人は精靈がいると思われる祠の奥へ進んだ。

第十一話 疑問

薄暗い祠の中を三人は精靈求めひたすら進む。

「どうだリアナ？

結構奥まで来たが精靈は感じるか？」

「ふむ、共鳴はかなり強くなつてこるがよ。もう少しじつや」

「しつかし驚きだよな。

いつのまにか魔石なしでも魔法使えるようになつてゐるじやん」

デジュンはリアナの魔法を放つ真似をしてみせた。

「あれは儂の力だけではないぞよ。

あんな高レベルの魔法は魔石を使用しても扱えぬしな・・・
これも精靈との共鳴がなせる業かのう。」

「て事は精靈の加護を受ければ今よりもっとパワーアップするでこの
とか？」

「いいなあ・・・オレも早く欲しいぜえええーー！」

「おい、じつやら着いたみたいだぜ。」

スラッシュは奥のぼんやりと光るものを見た。

「ふむ、じつやう儂だけに来こと言つてゐるよいつつ・・・
すまぬが、しばし待たれよ。」

「ああ、じゃあオレ達はここで待つてるよ。」

「オレ、精靈見たことないから見たいんだがなあ・・・」

二人を置いてリアナは精靈の元へ歩む。

「確かに精靈というだけあって凄まじい生命力を感じる・・・
じゃが、何か迷いのようなものが・・・？」

『サラ・・・』

「！！」

目の前の一人の女性が現れた。
肌は青く、とても美しい・・・
リアナは彼女が精靈だと直感的にわかった。

「儂の名はリアナ、リアナ＝フェズリールじゃ。
お主が精靈か？」

「そう・・・私は水の精靈・・・
今はリアナという名なのね・・・
あなたがここに来た理由は分かっています。
私の、精靈の加護を得たいのでしきう？」

「そうじゃ。

儂等はこの世界を滅ぼさんとするガイアを倒すために・・・
そのために力を貸して頂きたい！！」

「ガイア・・・ファルステイアの神・・・

あなた達はこの星の神を倒すつもりですか・・・

「神じやと・・・?」

「ガイアはこの星の創世より存在する神、
あなた達はそれに立ち向かおうとしているのです。」

「ガイアが神じやと?『冗談ではない!!
あれは悪魔じや!!人間に害をもたらす悪魔じやぞ!!?
一体お主等精霊は何を知っているのじや?
知つている事があるのなら教えてほしい!!』

「・・・・・・

答えは私からは言えません。

しかしあなた達はいずれ真実を知る事になります・・・

「一体何を・・・」

「まず勇者を四人全員揃え、四人の精霊の加護を得ること・・・
その後ガイアの元へ向かいなさい、この世界の真実を知るために・
・」

そう言つと、水の精霊はリアナへ手を差し伸べた。

「さあ私の手を取りなさい。

そうすれば精霊の力を得ることになります。」

リアナは黙つたまま精霊の手を握る。

すると、リアナに不思議な力が流れ込んでくる。

「これが精霊の加護を受けるとこいつ事なのか・・・?

「ああ終わりました。どうですか感じは?」

「何か不思議な感じじゃ・・・

儂は以前も同じような事があつたよつた気がある・・・

「そうですか・・・

もう時間が来ました、リアナ・・・

「!/?体が・・・?

精霊の姿がゆりゅりと揺らいだ。

それは蜃氣楼のように、今にも消えそうである。

「少し力を使いすぎてしましました・・・

またしばりく跳つります・・・

「すまぬな、儂のために・・・

「いえ、これも運命でしょう。

それではリアナ、決してこの世界に失望せず

頑張つてやれ!・・・

やつ言い残し、精霊は消えてしまった。

「儂等が知らない何があるのじゃな、この世界に・・・

「あ、おいリアナが戻つて来たぞ！..」

「どうやら精霊の力を得たようだな」

祠の奥から戻つてきたリアナに一人は駆け寄つた。

「待たせたな二人とも。

無事、水の精霊の加護は得たぞよ。」

「お～これあとはオレだけか！..」

「いや、まだ勇者がもう一人いるはずじゃ・..

「こればかりはドクターＺからの情報を得たいといふじやな。」

「そうだな・..

「とりあえず船に戻るか、船長も待つてるだろ？」

そして三人はゴロンの船へと戻る。

「船長、戻つたぜ～」

「お～丸いの、無事だつたか。

「さうやうが、おれの仕事が終わつたよつだな。」

「ああ、ありがとうございます。船頭さん。

コビナメ村までも頼むよ。」

「あいよ、飛ばすんでしつかり捕まつてうよーー！」

スラップの言葉を聞き、ゴロンはすぐ船の操縦に向かつた。

デジモンの言葉の途中でショイド丸はもの凄いスピードで村に向かつた。

もの凄いスピードのおかげで、かなりの短時間で村に着いた。

「えええ
・
・
・

加減てものを知らないのかい・・・」

「デジコン！」

そんなこと書つてる場合ぢやないぞ。」

「あん? 何よ。」

「これは・・・一体何が起きたのじゃ・・・」

先に船から降りたスラップとリアナが呆然としている。デジュンはその一人の姿を見て何か嫌な予感がした。

船から降りた先には、思ったとおりの事が起きていた。

「おい・・・何だよこれ・・・」

そこには何匹ものクリーチャーが村を襲撃していた。その姿は虫や鳥、獣と様々であった。

建物は破壊され、死体がいくつも転がっている。

「二人とも、まだ生存者がいるかもしない！！
クリーチャーを倒し、生存者を探すぞ！！」

「了解じゃーー！」

スラップとリアナは急いで村へと向かう。だがデジュンはそこから動けないでいる。

「オレの村のようにいくつもの人が殺されていく・・・
なんで、なんでなんだよ・・・」

クリーチャーを倒していくスラップとリアナ、
精靈の加護を得た二人の前にクリーチャーの屍の山が出来上がり
ていく。

「こいつら強さ自体はたいしたことないが数があすぎる……！
これじゃ生存者を探すどころじゃないぞ……！」

「やつじやな……」のままでは儂の魔力もすぐ死んでしまうわ……

そんなとき、どこからか子供の声がした。

「！？」

「まさしくあの子供クリーチャーに囲まれてこる……」

「！」からでは間に合わないぞよ……。」

まだ10歳にも満たない少女へとクリーチャー達は一斉に飛び掛かる。

「二人が戦っているのにオレは何をしているんだ・・・」

『アナタガタタカウノハナゼ?』

「みんなを守りたいから・・・」

『アナタノソノテハ、ナンノタメニアルノ?』

「みんなを守るために・・・」

『アナタハオリジナルノ・・・』

「！」

『コノセカイデモアナタハ・・・』

「そうだ!!

オレは戦う・・・』の世界も滅ぼさせないために・・・』

デジュンはクリーチャーに襲われそうになつてている少女へと
物凄いスピードで向かつた。

その場から少女への距離は100m程であつたがまさに一瞬だつた。
少女の回りにいたクリーチャーが一瞬で消滅したのだ・・・

「今のは・・・デジュン・・・?」

「クリーチャーが肉片一つ残さず消滅・・・
デジュンにあんな力が・・・」

「嬢ちゃん、大丈夫か?」

少女は恐る恐る田を開け、回りを見出した。
先程まで自分を襲おうとしていた化け物は消え、
代わりに丸い珍獣がいた。

「え・・・丸いお兄ちゃんが助けてくれたの・・・?」

「ああ。嬢ちゃん、お父さんやお母さんは?」

「まだ家の中に・・・」

そのままいつと少女は燃え盛る家を見た。

「あそこか・・・
わかった、スラッシュとリアナはこの少女を見ててくれ!...」

「火の勢いが強すぎていつ崩れるかわからない。
気を付けるよデジュン!-!-」

デジュンは無言で頷き、少女の家へ向かつ。

そしてデジュンが突入して5分程経つただろつか。
その家は凄まじい音を立てて崩れていく。

「お兄ちゃん……」

「大丈夫ですよ、デジュンなら……」

リアナは少女を抱きしめ言ひ。

しかしリアナも少女と同様心配であった。

だがデジュンは無事、崩れた家の中から現れた。
二人の夫婦を背負つて……

「パパ……ママ……」

少女は父と母に抱きついた。

そして父と母も自分の娘を強く抱きしめる……

「ああ、なんとお礼を言つていいのか……」

「ありがとうございます、丸いお兄ちゃん……」

「良かつたな、お父さんとお母さんが無事で。」

(父親と母親か……)

オレがもつとしつかりしていればオレの親も助かつたのかな……

)

「リアナ、この子のお父さんとお母さんの火傷を治す事、出来るか

?」

「出来るが、お主の火傷の方が酷いのでは……」

「オレは大丈夫だ、先にこの一人を頼む。」

「了解じゃ、では・・・」

リアナは両手を二人の前に持つて行き、魔法詠唱始めた。

リアナの手から発せられる不思議な光を浴び、二人の火傷は見る見る内に消えていく。

「これでOKぞよ。」

「本当にありがとうございます・・・」
「ここまでして下さるなんて・・・」

「いってことよー！」

オレ達はそのために戦っているんだし・・・」

そう言い、デジュンはスラップとリアナに向き直る。

「まだ他にも生存者がいるかもしね。」

手分けして探そう！？」

「ああ、まだクリーチャーがいるかもしね。」

「あんた達はなるべくオレから離れないようにしてくれ。」

スラップは三人の親子と共に他の場所を探す。
そしてデジュンとリアナは・・・

「あつひひひ・・・」

「カツコつむけすきじや、バカ・・・」

『デジュンはリアナに魔法で治療してもらひ。

「いやあ、一応主人公じゃん?
キメるときはキメないと・・・」

「意味がわからぬわ。それより・・・」

「ん?」

「いや、何でもない・・・」

(いやつは儂等とは違う力を持っているということなのか・・・
あの時のいやつは、精霊の加護を得た儂等以上であった・・・)

「じつやう生存者はこれだけか・・・」

しばらく探した結果、生存者はほんの10人も満たなかつた。

「この村ももう終わりです・・・
我々は他の村に移住しようかと思います・・・」

「そうか・・・

あまり力になつてやれなくてすまない・・・」

謝るスラップに住人達は首を振る。

「いえ、そんな事はありません・・・

あなた達がいたからこそ我々は生き延びられたのです・・・」

そして住人達は村を出る支度を整える。

「もうこんな事は二度と繰り返させない・・・」

「デジュン・・・」

「そうじやな・・・

そのためにも儂等が頑張るしかないのじゃ・・・」

(ガイア、クリーチャー・・・

もしかしたらオレ達は何か勘違いしているんじゃないか・・・?
それにあの声・・・何か、何かが引っ掛かる・・・)

第十二話 ハンター

薄暗い部屋のベッドの上に横たわるエイス。

そしてエイスの下半身にまたがるシャナ。

二人は裸のまま重なり合い、シャナはエイスの上でゆっくりと上下に動く・・・

「ん、エイス様・・・」

「・・・・・・・」

シャナは熱を帯びた体を淫らにゅうりと、ときには激しく動かすが、エイスは何も反応を示さず、いつもの冷たい表情のままだった。

「エ・・・イス様・・・?」

「もういい、降りろ・・・」

そう言いエイスはシャナをどかせ、ベッドから降りた。

「エイス様・・・」

「オマエの中には私とは別の男が映っている・・・」

「・・・・・・・」

エイスは服を着直し、背中を見せたまま続ける。

「その男も私は誰だか知っている。

貴様が何のために私に近付いたのかもな・・・」

「私は・・・それでも、あなたが・・・」

シャナは顔を伏せ、呟いた。

そのときだつた、エイスの部屋にあるスピーカーのような物から着信音が鳴つたのは。

「なんだ?」

『お休みの所失礼します!!』

エイス様、大変な事が起きました!!』

「申してみる。」

『リヴァーレ様とヴァファーム様が・・・

リヴァーレ様とヴァファーム様が倒されました!!』

「なんだと・・・?」

『その場にいた兵によりますと、

リヴァーレ様はデジ Yun一行に。

ヴァファーム様は謎の三人に敗れたとの事です・・・』

「謎の三人・・・」

『詳しい事は不明ですが、

それぞれ銃、棺桶、そして巨大な剣を持った三人との事です。』

「その三人をマークし、風の場所は今後も見張つておけ。
それと、この話は隊長クラスのみとする。」

『了解しました、それでは・・・』

通信は消え、エイスはその場で考え込む。

（リヴァーレがデジュン達に倒されるのは有り得るとして、ヴァファムを倒せる人間がこの世にいるとは・・・まさかそこにデジュン達以外の『適格者』・・・いや、『超越者』の方か？）

適格者だった場合、風はもう手遅れだな・・・）

「シャナ」

「はい・・・」

「兵に『火』の搜索を急がせろ、
それとオージを呼び戻せ。」

「了解しました・・・」

まだ服を纏つていらないシャナを残し、エイスは部屋を出た。

「私はどうしたらしいの・・・？オージ・・・」

「てかよ、あの変態は一体何やつてるんだかな？全然連絡ねえじゃんよー！」

「デジュン一向はユビナメ村の住民より近くの町の場所を聞き、そこへ田舎歩いてた。

「確かに連絡がない以上、人が集まる場所で情報収集するしかないの。」

「ところでリアナ、オマエ精霊に何か言われなかつたか？世界の真相がどうとか。」

「確かに言われたが・・・」

「儂が聞いたのは、ガイアがこの星の創世より存在する神であるといふことだけじゃ・・・」

「神だと！？」

「精霊達はオレ達に一体何を隠しているんだ・・・」

冷静に呟くスラップの隣でデジュンは

「ガイアは神なんかじやねえ！！

オレやリアナの村、ユビナメ村をあんな様にする奴が神な訳ない

「……」

熱くなる『トジユン』を静めるよつて、リアナは手を『トジユン』の頭に乗せた。

「分かつてゐる……分かつてゐるのじや。
じゃがエイスやオージ、そしてガイア……
奴等を止めねばならんのは確かじやが、
それだけではこの戦いは終わらない氣がするのじや……。」

「かもしれん……
だが何も分からぬ以上は今出来ることをするしかないな。」

「今度こそはオレが精靈と会つ番だろ?
そのとき無理矢理でも聞き出してやるぞ……。」

「その意氣だ『トジユン』……」

突然の声に二人は辺りを見回す。

「聞き覚えあるだよ、この声は……」

「やつと現れたか変態め……」

滋ぐ『トジユン』の後ろに、その男は現れた。

「ふむ、ビツやラコアナは精靈の加護を得れたようだな。」

「ああ、あとは『トジユン』の精靈、最後の勇者とその精靈だけだ。
登場が遅れたからにはちゃんと情報は仕入れてるんだろうな?」

「まかせたまえ。

」の先に『ドンダケ』という町がある。
そこではくじ詰そりではないか。」

「勿体ぶりやがって変態め・・・」

「デジュン達はドクターZについて行き、ドンダケに到着する。
そこは今までデジュン達が見てきた村とは比べ物にならないほど栄
えていた。

「すうげえなーーなんか一杯店があるぞーー。」

「オマエ、そんなキヨロキヨロすんなよ・・・
一緒にいるオレらまで田舎者と思われるじゃねえか。」

「あ？喧嘩売つてんのかロンゲ？」

「田舎者丸出しなんだよオマエよ。」

「いつもはああなのか？あの二人は。」

ドクターZは喧嘩する「ジユン」とスラップを見て言う。

「まあ、こんなもんじゃよ。」「

「苦労するね、キニは。」

「そうじやな。最後の仲間くらい常識のある人がいいのう。」

Г HAHAHА!!

次の仲間もエセ者など更にヰの苦勞が増えるね

「またぐじやな・・・」

ドクターZは、一つのリストランの前で立ち止まつた。

「いいがいいかな。

「ねえ等、それまでにして店の中に入るだよ。」

リアナの言葉に耳を傾けず、デジュンとスラップは殴り合っている。

「やれやれ、困ったもんだね。」

「君主等」

۱۰۷

リアナの右手に魔力が集中する。

「いいかげんにせぬかあ！！」

そしてその魔力が飛ぶ先は
・
・
・

あふあ
！！

リアナの魔法をくらうた二人は倒れてしまつた。

「まったく困ったものじやな。」

そう言いリアナは倒れた一人を引きずつて店に入つて行く。

「… キミも十分クセ者だよ・・・」

とある町の裏路地、そこに背中に巨大な剣を背負つた男が一人。

「來たか・・・」

「待たせたな。」

「いや・・・」

黒い服に金の甲冑と目立つ格好なのか
目立たないかハツキリしない・・・

それにオレに向けられたこの容赦ない殺氣・・・
この男、只者ではないな・・・

「静かなる豪風と呼ばれるソール＝ゲイン・・・
先日のキミの戦い、見せてもらつたよ。」

「・・・」

「しかし『刻印』の力を使えばもう少しスマートに戦えたと思うが。
それとも何か使えない理由でもあるのか、な？」

「・・・」

「おおつと・・・」

一瞬でソールは男の後ろへ移動し、巨大な剣を男の首下へ向ける。

「貴様何者だ・・・返答次第では・・・」

「甘いな・・・」

男の声が前からではなく、後ろから発声された。

男はソール以上のスピードで後ろへ移動したのだ。
そして右手をソールの背中に当てる。

一瞬で移動！？

このオレが追いきれなかつたのか・・・
それにこれは・・・

ソールは男の右手から発せられる凄まじいプレッシャーを
背中越しではあるが、危険に感じた。

「オレはオージ・・・
キミと戦うために来た訳ではないよ。」

「オレに一体何の用だ・・・
刻印の存在を知っているのであれば只者ではあるまい・・・」

ソールは動じず、オージと名乗る男に質問を投げかける。
そしてその巨大な剣で屠るチャンスを伺う。

「ハンター協会から話は聞いているのだろう?
オレが今回のキミの仕事の依頼者だ。」

「ある者達を始末することか？」

「ああ。オレにも事情があつて今は派手な動きは出来ないのだよ。」

そう言つとオージはソールの背中から右手を離れさせ、
腰のポケットから一枚の写真を取り出した。

「ここからの始末を頼みたいんだが・・・」

オージの殺氣が消えたのを確認し、ソールはオージから手渡された写真を見る。

その写真には丸い珍獸一匹、男と女が一人ずつ写っていた。

「左からテジュン、スラップ、リアナの三人だ。」

「・・・冗談じゃない。」

オレが出るまでもないだろう・・・」

ソールは手紙をオージに突き返し、早々に立ち去ろうとする。

「報酬は弾むが?」

「いらん・・・

他のハンターにでも頼め・・・」

「キミだけの特別報酬・・・

『神の世界へと続く扉』の情報・・・はどうだ?』

その単語を聞いた瞬間、ソールは立ち止まる。そして背中を見せたままオージへ問い合わせす。

「何か知っているのか・・・?」

「キミよりは知っているさ・・・

」の依頼が成功した場合、オレが持っている情報を全て教えよう。

「・・・いいだらう・・・

その依頼引き受けでやる・・・」

「ああ、今こいつはまだソーラーに向かってるはずだ。
見た目に戸惑わされるなよ、かなりの強敵だからな。」

「任務・・・了解・・・」

それだけを言い残し、ソールは立ち去つていった・・・

「ククク・・・わて・・・」

オージは上を見やり呼びかける。

「オレに向の用だシャナ。」

オージの呼び掛けに応じ、シャナは上から現れた。

「今のはもしや『適格者』では・・・」

「ああ、その通りだ。」

「そうですか・・・ではやはつトジュン達のところへ?」

「それがどうした? 貴様は一体オレに向の文句がある?
貴様は所詮ジジイ共やエイスの慰み者、
その分際でオレに立て付く気か?」

「そんな・・・ことは・・・」

「貴様を奴等の実験から助けたのは
オレだといいつことを忘れるな。」

「はい・・・」

「で、何の用だ？」

「何かエイスに動きが見られたのか？」

「はい・・・

リヴァアレヒヴァアファムが倒されました。

そしてエイスが今後の作戦のためにとオージ様を御呼びです。」

「クックック・・・

むしろ精霊の力をデジュン達が手に入れた方が手っ取り早いんだ
ろ？

奴はそれを知っているにも関わらず、この期に及んでも自分の
手を汚さないやり方を選ぶとはな・・・
もう答えは出ているだろうに・・・

「・・・・・」

「よかろう、オレもすぐ戻ると奴に伝える。」

「は・・・・」

それを聞いたシャナはオージの前から姿を消した。

「つぐづく綺麗好きな坊ちゃんな事だ・・・

昔の仲間の面影が残る奴等を自分の手で始末するのが嫌とはな・・・

・

オージは上を見上げ、

「もうすぐ『鍵』を持った神子も現れる。
運命の歯車は徐々に動き出す、か・・・
クツクツク・・・」

第十四話 疾風が如く

ガイアがいると言われる部屋にエイスはただ立ち尽くしていた。エイスは気が付いていた。

勇者の生まれ変わりの一人が既に『風の精霊の加護』を得ている事を・・・

「何もかもが繰り返しか・・・」

そこへ一人の赤いバトルスーツを纏つた男が現れる。

「イーフェイルか・・・

オマエには城外の警備を任せたはずだが?」

「エイス様、失礼を承知で意見させて頂きます。

エイス様は本気で今の状態を何とかしようといふ考えはあるのでしょうか?」

「何を・・・?」

「私はデスマニオスや上の連中より、今はデジュン達を一刻も早く抹殺するべきだと思います!!」

「・・・?」

「我々四天王が『影』ではなく、『本体』で出向けば手っ取り早いはず!!

何故それをなさらず、回りくどい事をなさるのですか!!」

「オマエ達四天王は精霊同様、ガイア様より生み出された存在だ。
それは四天王本体は精霊を入れるための『器』にもなり、
上の連中との戦での重要な戦力でもある・・・
万が一の事も有り得る。ここでオマエ達を失う訳にはいかんのだ・
・」

「しかし・・・!!

「昨今ではデスミオスの動きが活発になりつつあります!!
このままではこここの警備も・・・」

「安心しろ、デスミオスはまだ本格的には活動しない・・・
刻が訪れるまで待つのだ・・・」

「それは・・・ガイア様の意思なのでですか・・・?」

「無論だ・・・」

しばしの沈黙の後、

「分かりました・・・

「それでしたらもはや何も言いません・・・」

「そう言い残しイーフェイルは部屋を出る。

「・・・ガイア・・・様の意思、か・・・」

ドンダケのあるレストランにて・・・

「どうだい、ここのお物ドン茸は？」

「ドンダケはその名の通りドン茸の名産地でね。更にこのレストランはドン茸料理で特に評判なんだよ。」

「お～なかなかイケるや～これは～～！」

「変態もなかなか良い店知つてるな～～！」

「ふむ、儂の村にもこんな美味なキノコはなかつたの～～～」

「いやいや、ドン茸てシャレかよ～～。
それより真面目な話に来たんじゃねえのか？」

料理にがつづくデジュンとリアナと別に
スラップはかなり冷静だった。

「食えるときは食つとけよスラップ～」

「黙れ珍獣。第一オマハの体のどこにそんな食べ物が入つてくれんだよ～？」

「リアナもだ～～年頃の娘がはしたないだろ～～」

「お主、カツカとしそぎだのう・・・」

「H A H A H A ! !

じゃあそろそろ話そらか、これから仕事を。」

そうドクターNが切り出すと二人は真剣な表情になつた。
デジュンは相変わらず料理にがつついてたが・・・

「まず残りの精霊、『火』と『風』なんだが・・・
両方場所は発見出来たのだが、不思議なことに
風の精霊の反応が突然口ストした・・・」

突然の発言に一人、デジュンは食べるのを止め、
驚きを隠せなかつた。

「そ、それはどういうことじやー?
まさかガイアの手下が・・・?」

「いや、基本的に精霊の祭壇へは選ばれた者しか入る事が出来ない。
それはガイアの手の物でもそうだ。精霊を殺す事など不可能。
だからこそ基本的に奴等はキミ達が精霊の加護を得ないよう、
先に祭壇を発見し、キミ達が来るのを待ち伏せするくらいしか出
来ない。」

「じゃあなんでなんだよー?」

精霊が一つでも欠けたら戦力ダウンじやねえか!!--

「落ち着けデジュン。

ドクター、オレ達のように勇者の生まれ変わりが
その精霊の加護を得たという可能性は?」

「その可能性が高い、いやそれしか有り得ない。

精靈は加護を「与えたら、しばらくは力が弱る傾向があるからな。」

「儂等以外の者が精靈の加護を得たという事か・・・

ではその風の精靈の加護を得た者を探し出さねばならぬのう。」

「まだ確実にそうだとは言い切れないが、しばらく私も風の精靈に関しては調べてみる。

キミ達は明日にでも火の精靈の探索に向かつて欲しい。火の精靈の場所はここだ。」

そう言いドクターKは地図を差し出した。

「いじつて・・・?」

「さすがスラップ君だね。

旅をしているだけ地理は詳しいみたいだ。」

「オマエでリアナの村に関しても詳しかったよな。」

「まあ修行のために色々な所回つてたしな・・・

ちなみにここは有名な火山、『ブリリード山』だ

「火山で・・・（。 。 ；Hーツ！）

「火山とは・・・

さすが火の精靈といったところかのう。」

「ドクター、さすがにこれは厳しいぞ・・・

何か策はあるのか?」

「キミ達、リアナ君の魔法があるではないか。
私の目算ではリアナ君の耐熱魔法の持続時間は2時間程だと思つ
のだが、

どうだねリアナ君?」

「まったくその通りじゃな。

じゃがこの魔法はかなりの魔力を消費してしまう。
今の儂の魔力でも一日四回しか使う事が出来ぬ。」

「魔法の使用回数が限られてることば、
恐らく火の精霊の適格者である「デジュン」と
魔法を扱うリアナの二人が好ましいんだが・・・

「ガイアの手の者がいると思われる以上、
ここは三人で行くべきじゃろうな。」

「私もその方が安全だと思つ。
さて・・・私はそろそろ行くとするよ。」

そう言いドクターNは席を立つた。

そして懐からお金出し、デジュン達に渡す。

「Eijiは私の奢りだ。これを使いたまえ。」

「お~変態気前がいいな。」

「Hahaha!!

キミ達には頑張つてもらつていいからね。」

「これくらいこはお安い御用や。」

「ふむ？ 儂の見間違いなのか、
ドクターのお金、かなり不足しているように見えるのじやが・・・
・？」

「H A H A H A ! !

それでは諸君、頑張ってくれたまえ～

ぼふうん！ ！

「ぐうほおえ！ ！

変態めこんなレストランで煙球かましていきやがった！ ！

「・・・それより、いこの料理、
結構な額なのじやが・・・

「・・・ドクターの金とオレ等の金合わせて・・・
かなりギリギリで行ける・・・か？」

「くつそー————あんヤロー！ ！

今度会つたらばつてえタダじやおかねえ！ ！

『その刻印の力は回りの者までも傷つけてしまう代物なんだぞ！？ オマエはそれを判つてて使ったのかよ！！』

これはオレが生きているという証であり、
オレの謎を解く手掛かりでもある・・・
それを否定されるのであれば・・・

『貴様のようなガキには過ぎた代物だよ・・・』

こんな物がオレの体に無ければ・・・

『この世界のどこかに存在する 神の世界へと続く扉を探しなさい・・・
そこに全ての答えはあるのだから・・・』

もつと普通に生きていられたのかな・・・

『キミに僕の力をあげるよ。』

そして三人の仲間を探し、キミのやるべき事を見つけるんだ。』

仲間だと？オレに仲間等いらん。

それはあの二人も同様、仲間などではない。

オレはいつだって一人だ。

それはこれからも変わらん・・・

『それがキミに定められた運命だから・・・』

運命・・・オレが生まれたのも運命だと・・・？

馬鹿馬鹿しい・・・オレがここにいるのは運命ではない・・・

「これはオレの意思だ！！」

ソールの視線の先にはオージから見せてもらつた写真の奴等がいた。そしてソールは背中に背負つた剣を握り締め・・・

「まったくよお、今夜の宿代すんだよお！――

残りの金じや口クなどこ泊まれねえぜ？」

「お主、まったく金を持ってなかつたくせによくそんな事が言えるのう・・・」

「まったくだ・・・

ちょっとそこらへんでバイトでもしてきたらどうだ？」

「大体あの大会で邪魔が入らなければ
スラップ倒して優勝して今頃大儲けだつたんだよ・・・
あ～なんか借金があつたような気がするが時効だよね？よね？」

「オマエじやオレには勝てんぜ？
て借金で一体何！？」

ガキイイイイイン！！

「・・・・・・・・」

「いきなりなご挨拶だな・・・！」

突然の謎の男の攻撃をスラップは何とか受け止めた。

「おひおひおひおひ！」

「一体何が起きたんだよ！？」

「お主ガイアの手の者か！？」

「オレはある者に依頼され貴様等を始末しに来た・・・それだけの事だ・・・」

「始末て穏やかじやねえな・・・

第一その依頼者てのがガイアの手の者じやねえのかよ！？」

「貴様等には関係の無い事だ・・・

さあどういつから殺されたい？

三人まとめて来るか？」

「なめやがつてえええ！！

おいスラップ、こいつはオレにまかせろ！..」

「まかせらつてオマエ、無理だろ！..」

「大丈夫だ！..こんなナメた野郎オレがやつてやる！..」

「いやつはこうなつたら聞かぬしな・・・

スラップ、このは任せてはどうだらうかのつ。」

「はあ・・・わかつたよ。こいつはかなりの腕前だ。やばくなつたらすぐ変われ、いいな？」

「ああ……わあ行くぜ……
て、まず名前を聞こつか?」

「ハンターのソール＝ゲイン……
戦闘レベル、ターゲット確認……
オマエを……殺す……！」

それは一瞬だった。

ソールは瞬時にデジュンの懷へ移動し、その大きな剣で薙ぎ払う。
そして薙ぎ払うと同時に、
ソールが移動した際に生じたと思われる豪風がデジュンの頬を撫で
る。

「ぐうううーー！」

デジュンは何とかソールの太刀は避ける事に成功するが、
ソールは巨大な剣を軽々と持ち直し、『デジュン』掛け再び薙ぎ払う。

「あの野郎、ガイアの手の者の割には
意外と汚い手は使わないな……」

「どういう事じゃ?」

「いや、最初の不意打ちは確かに卑怯と言えば卑怯だが、
真正面からまづオレを狙ってきた……」

「よく意味がわからぬぞよ……」

「普通最初に狙うなら、始末しやすそうな女のリアナか弱そうなテ

ジユンだよな。

だが奴はそうさせず、オレから狙つてきた・・・

「つまり弱者からではなく、敢えて強者から狙つたと?」

「ああ、それにこの感じはまさか・・・」

「やはりお主も感じたか・・・

デジユンはまだ感じる事が出来ぬであろうが、精靈の加護を得た儂等には判る・・・」

「どうした・・・

その程度の腕でオレに勝てるつもりか・・・?」

ソールの凄まじい速さの攻撃に、デジユンは避けるのが精一杯であった。

「ちい!!

「あんなバカでかい剣を持つてこんな早く動けるのかよ!-?」

ソールは大きく剣を振り落とし、デジユンはギリギリの所で避ける。あまりの威力に剣は地面深く突き刺さったが、いつも簡単に剣は振り上げられ難ぎ扱われる。

だがその一瞬の隙をデジユンは見逃さなかつた。

「チャーンス!!

これでもくらいなあ!!」

デジユンはソール目掛け猛烈なタックルをかます。

が、それもお見通しであり、ソールは瞬時にデジュンの背後へと回る。

「チェック……メイト……」

ソールの巨大な剣がデジュンの右頬に触れる。

その冷たい感触、ソールの殺氣にデジュンは額に冷汗を流してしま

う・・・

「はあ・・・

だから言わんこっちゃない、あのバカ・・・

「どうするのじゃ？

もうろん助けるのじゃろ？」

「それはそうだが

何とか奴を説得するしかないのか・・・

そんなときだつた、一人の少女がデジュンとソールの間に割つて入り・・・

「丸いお兄ちゃんをいじめないで…！」

「オマエは…?

「バカ…危ないから早くどけ…！」

その子はコビナメ村でデジュンが助けた少女であつた。
目に涙を溜め、だが決して流さずソールの目を睨み付ける。

「・・・・・・・・・・・・

ソールは剣を背中に戻し、

「ま、待ちやがれ！！

まだ勝負はついてねえぞ…！」

「・・・命拾いしたな・・・

だが今度会つたときは容赦しない・・・」

そう言い残し、ソールは一瞬でその場から退散してしまつ。

そこには静かに風が吹き、

まるで嵐の豪風が去つて行つたかのようであつた・・・

第十五話 少女ラキの恋？モテモテなデジュン

「来たか・・・」

ガイアがいると思われる大広間にオージとシャナ、ソールが現れた。

「エイス、久しぶりだな。

シャナから事情は聞いたが何か大変な事になつていてるみたいだな

？」

（白々しい男め・・・

私が何も知らないとでも思つてているのか・・・?）

そうエイスは口に出しかけたが、

今そんな事をしては今までの監視が無駄になる。

それはオージも同様、お互いがお互いを監視するという関係上余計な言動は無用だ。

刻が訪れるまでエイスもオージも事を起こさないだろう。

「ああ、デジュン一行は既に四天王の一人を倒した。

もう一人はデジュン以外の奴等に倒されたみたいだがな・・・

そしてデジュン達は明日の朝、火の精霊がいると思われるブリリード山に向かう。

ブリリード山の次はいよいよこのガイア城に攻めてくるだろう。

「ほう、あの下らん大会からかなり成長したようだな。

それで、オレはどうすればいいんだ？

呼んだからにはオレに何か用があるのでどう？」

「明朝イーフェイルをブリード山に向かわせ、デジュン達の目的を阻止する。

オマエにはその間、この城の護りを任せたい。」

エイスの後ろからイーフェイルが姿を現す。

（なるほど、影とはいえ四天王の最後を向かわせ、オレを自分の目の見えるところに置くか・・・）

これはかなり焦っていると見るが、それとも・・・
だがオレとしてもソールの覚醒という任務を終わらせた以上、
後はこいつの監視でも構わんのだが、上がそれで納得するかどうか・・・）

オージはシャナを見、シャナは頷きで返す

（年寄り供はお見通しどうじとか・・・
だが、ここからはオレのオリジナルでやらせてもらひまへ。）

「ああ、了解だ。

だが話を聞いたところ、デジュン達はかなり腕を上げている。
そいつ一人では心許ないだろ？」

その言葉を聞いてか一瞬イーフェイルの眉間にシワが寄った。
だがそんな事を気にせずオージは続ける。

「そのためにオレは今まで役に立ちそうな奴を連れてきてやったの
よ。

紹介する。こいつの名はソール、かなり腕が立つぜ？」

エイスはソールの目を見つめる。

何か不思議な違和感を感じて、無意識の内に言葉を発してしまつ。

「その・・・目は・・・?」

「オレの目がどうかしたか・・・?」

「いや、何でもない・・・

いいだろう、イーフェイル、オマエはソールと供にブリリード山に向かうのだ。」「

「了解しました。

ではソール殿、明日の準備のためにこちらの部屋に来て頂けますかな?」「

「了解だ・・・」

ソールはイーフェイルと供に別の部屋に行き、この大広間は残された三人だけになつた。

(あの感覺は”超越者”・・・?

だが奴の目に刻印は刻まれていなかつた。
オージめ、一体何を企んでいる・・・)

「さて、オレは疲れているんだが、
とりあえず休ませてもらつていいか?」

「ああ、構わん。」

「それじゃしばらく休ませてもらつよ。

それと・・・シャナが寂しがっているぞ？
ゆつくり出来るときはシャナの相手をしてやれよ。」

何がそんな可笑しいのか、ニヤニヤしながら
そう言い残しオージもまた大広間を後にした。

「エイス様・・・

「シャナ、奴は一体何を考えている？

奴が連れてきた男、ソールとやらは何者だ？」

「いえ、私は何も・・・

腕の立つ者としか・・・

「・・・そうか。

まあいい、オマエも疲れているのだろう？

デスマオス供が攻めて来たときにはオマエにも手伝つてもらひ。
そのためにも今は体を休める。」

「わかりました・・・それでは・・・

あ、エイス様・・・

「・・・なんだ？」

「いえ、何でもありません・・・」

「・・・・・・・・

シャナが部屋を出るのを確かめてか、
エイスの目の前に一人の部下が現れる。

「どうした・・・？」

「先程のソールという男、奴は先日のヴァファム様の件の三人組の一人です。」

「なるほど・・・そういうことか。

後でイーフェイルに伝える、ブリリード山にてデジュンと供にソールも抹殺せよと！…！そしてこの任務内容はオージ、シャナには漏れぬよう重々気を付ける！！」

「はっ！！

・・・ですが今始末しなくてよろしいのでしょうか？」「

「オージがいる以上この城内で始末するのは得策ではない。今はオージだけでなく上の連中までもが動かれると面倒だらうしな・・・

だがブリリード山であればいくらでも始末するには容易いだろう。

「

「そういう事ですか、納得しました。
まだ奴等には利用価値がありますからね・・・」

「そういう事だ・・・

ふつ、オージ・・・いや上の連中の目的が少しづつ見えてきたな・・・

・・・
そう何でも自分達の思い通りにつましくいくと思つなよ・・・！・・・

エイスはガイアがいると思われるカーテンの前に立ち、

「”ベーレイニガン”……
“いつせえ完成すれば後は上の連中といえど脆いものだ。
それまでの間何としても精靈と勇者達を揃わせる訳にはさせん……
」

「まつたく何だつたんだよ、あいつあ……

今度会つたら絶対何倍にもして返してやんぜ……。」

「それよつお主、まずは命の恩人に感謝せねばいかぬだらう。」

リアナが田配せし、デジュンはあのときコビナメ村で助けた女の子の視線に気付いた。

「あ、ああ。

今日はオレが助けられちゃつたなあ、ありがとじよ。」

「丸いお兄ちゃん、ビijoも怪我はないの……？」

「これはもしや少女とのフラグが立つた?」

とスラッシュとリアナは感じたそつな・・・

「ああ大丈夫だぜ！－！」

それよりキミがなんで？」

「村があんなことになつてからね、
こここの街に住む事になつたの・・・」

「やうか・・・

「この街は結構大きいし、住むにはいい所かもしけないな。」

「お兄ちゃん達はまたどこか行つたやつの・・・？」

少女はつぶつぶつした瞳でデジュンをみつめる。

(おこおこ、あの子本氣でデジュンを・・・?)

(まあ趣味は人それそれだからのう。

若さゆえの過ちといふことで・・・)

「ああ、お兄ちゃん達は悪い人達を倒すため、
明日こじまの街を出るんだ。」

「やうなんだ・・・」

少女がそつ落ち込んだとき、デジュン達の前にその子の両親が現れた。

「おや、あなた達はこいつをやの・・・」

「あ、どうもなのじや。

娘さんから聞きましたが、この街に住むやつで……」

「ええ、これだけ大きい街ですから住む家はすぐ見つかりました。前の村の生活とは違いが大きいのでなかなか馴染めませんが……」

「

そう言いながらも少女の父と母は笑いながら話を続けた。

「それより、急ぎでないのでしたら私達の家でお茶でもどうですか？ 命を救つて頂いたお礼もしたいと思つていましたので。」

突然の少女の父親の発言に驚いたが、『デジュン達は顔を見合わせ、ここはお言葉に甘えよう（うまく行けば今夜の宿代が浮くかも）』と考えた。

「お邪魔でなければ……
ですが我々は今日の宿を探さなければいけないので、
そんなにゆっくりは出来ませんが……」

（うまいぞよスラップ！－

さりげなく宿の当てが無こととを言つてしま－－）

「それでしたら是非家に泊まって下さい。
娘のラキも喜びます。な、ラキ？」

「うん……」

（キタ
だぜーー）

（。。。

－－ ですがスラップ

(「それで今日の宿せば安心じゃのう」)

「 もや、それでまじめに。」

テジュン一行はナツカキの父親に誘われ、家に泊まる事になった。

「お邪魔しま～す！～！」

「フキ親子モヘ最初に足を踏み入れたのはテジュンだった。

「それじゃあなた、私は晩御飯の仕度をしますわ。」

「ああ、今日はテジュンさん達がいるんだ。
『ひつひつ』を頼むぞ。」

(ふうむ、『ひつひつ』も出して頂けるとせ・・・
これはなかなかお得じやのう・・・)

(オレのおかげだぜ、感謝しちよ？)

(儂等で意地汚いのう・・・)

「 ねえ ねえ お兄ちゃん。」

「 」の絵本読んで欲しいの。」

「 おお、 いいぜーーー。」

なんたってオレは絵本読みの天才と、 ひとと

絵本を持つたラキはデジューの手を引つ張り、
「 」の絵本を自分の部屋に招き入れる。

「 ははは、 あなた達が来たおかげでラキもあんなこはしゃいでます。
今日は本当にありがとうございました。」

「 いえいえ、 お礼を言ひのはまいかですよ。
」の絵本をありがとうございます。」

「 晩御飯まだ時間が掛かりますので、
それまであなた達の事についてお話を聞かせて下せませんか?」
「 儂等の事について・・・ですか?」

「 」の紹介が遅れましたね。
私の名はダイス、 これでも一応武器を作つたりして生計を立て
ます。」

「 はあ」

「 ちなみに妻のウーンは薬師をやつてしましてね、

「これがまたよく効くんですよ。」

「あの、話がよく見えないのじゃが・・・」

「いえね、あなた達のために武器、防具をプレゼントしたいと思つてるんですよ。

明日の朝に弓を発つという事なので今から新しいのを作る事は出来ませんが、

在庫の中からでしたら、あなた達に合ひ物をすぐ用意出来ますので・・・

そのためにあなた達の戦闘スタイル、サイズを教えて頂きたい。

「わすがにそこまでして頂く訳には・・・」

泊めてもらひて、じつじつしてもらひつ身でありますながらもさすがにそこまでは悪いと思うスラップとリアナであった。

「いえいえ、是非用意させて下さーー！」

命を助けて頂いたんですね、これでも安心くらうですよーー！」

ここまで言われたからには断る訳にはいかないだろ？、とスラップは考へ、

「わかりました、お言葉に甘えさせて頂きます・・・

スラップ達は自分達のスタイル、サイズを教え、

武器と防具は明日の出発までに用意してもらつ事になつた。

そしてダイスとの話が終つた頃、

母のウエンが現れ、晩御飯の準備が出来た事を知らせた。

「いやあこんな大人數での食事だと乐しこですなあ」

「やうね、どうせなら明日出発と言わず
わざ少しうづくつしていけばここに……」

「ははは、でもオレ達でば世界の平和を守るために戦つてゐんだぜ
」。

「平和になつたらまた寄らしてもいいよ……おばさんとのメシもつま
いしな……」

「お兄ちゃん達、また来てくれるの?

「いつ?いつ?」

「え~っと……

まあ近いうちだよ、近いうちーーー。」

「絶対だよ?絶対ちゃんとラキのところ来てね?」

「ああ、約束だ!!

「ちゃんと迎えに来るから待つててなーー。」

(何、この気持ちは…?)

(迎えにきて、デジモンはちゃんとあの子の気持ちを
分かつての台詞なのかのう……)

「まつたぐりキはすいぶん丸いお兄ちゃんが好きなんだなあ。」

「あつははははははーー！」

いや～モテモテはつらこなあ、ねえスラッシュ君ーー！」

「なんだよ、その勝ち誇った顔はよ・・・
せつかくのメシが不味くなる、いっちゃんじやねえ

「なんだオマエ悔しいのか、ああん？」

「おこ珍獣、オレに喧嘩売つてんのか？

いいぜ、今なら高額買取中だ」「ラアアアアアーー！」

「お主等人様の家でやめぬかーー！
まつたくいつもいつも・・・

「ははは、賑やかでいいじゃありませんか。」

「せうね、あらわキ？』

母親はワキの口の周りにベッとついたソースを拭き取る。

「ママ、ありがとおーーー！」

「まつたぐ、まだまだ子供ねえ」

「ははははははは

その日はみんなが楽しく笑い、楽しい食事だった。
オレにもこんな日が続くと思つたんだよな・・・

毎日山に狩りに行って、家に帰つたら

親父とお袋とメシを食つて、その日の狩りの事を話したり・・・

そんな何の変哲もない、いたつて普通の日常。

それがガイア、エイス、オージ等の仕業で突然失われてしまつた・・・

必ず、必ず仇は取るよ、村のみんな、親父、お袋・・・

第十六話 再会、そして決闘

それは誰の記憶なのか……

それは決して有り得ない記憶……

だが深いまどろみの中で確かに垣間見た・・・

もう一人のオレの姿を・・・

「こつくぜああああー！」

「ワシは負けん!! 贠けはせぬぞおおおおお!!」

一体の丸い生物は互いに激しくぶつかり合つた。
そして激しい爆発音と共に映像はピツッと途絶え、また別の映像が
流れる・・・

「このファルステイアを守るため・・・ガイア、貴様を倒す！！
精靈よ、私に力を！！この世界を守る力を！！」

תְּלִימָדָה בְּבֵית-הַמִּזְבֵּחַ

だが今見ている記憶は、お互い先程の記憶とは違う人物であった。

ガイアと呼ばれたそれは、壁に埋もれた巨大な女性だろうか、顔で

あつた。

そしてそれに立ち向かうは、肩まである美しい銀髪の男であった。

『私はこの星の守護神……

我が滅せればこの世界は滅ぼされるであろう……

精靈に選ばれし者よ、それでも主は我を討つと申すか……？』

「黙れ！！そんな虚言を信じられると思つか……！」

貴様を倒し、クリーチャーを止め、私はこの世界の平和を取り戻す！！」

ヘイワ・・・ソレハニンゲンヲシヨウキヨスルコト

ヒトガヒトデアルカギリ、カナシミノレンサハエイエンニッヅク・

・
ソレハトオイミリイデモオナジデアリ、ソレハファルステイアノハ
メツライミスル・・・

ダカラワタシハ・・・

それはその記憶に混じつて何者かの声が聞こえた。
とても氣味の悪い、聞くだけで寒気を感じる声だ。

これは一体何なんだ・・・？

初めの映像でオレが戦っている相手は・・・ガイア？

なら一つめのこの映像は誰だ？

こんな記憶、知らない・・・

オレは知らない！！

一体何なんだよこれは・・・
オレが一体どうしたってんだ・・・！

「デジコン！…いつまで寝てやがんだ！…いいかげん起きろ…！」

「んんん」

「おーーー！ 嬢ちゃんがテメエを待つてんだろがーーー。」
「いつもの聞き慣れた怒声、
スラップか・・・？」

そう言い strap はデジュンが被つて いる 布団を剥ぎ取る。それに巻き込まれデジュンはベッドから転げ落ちた。

「おひー！」

「よし起きたな。

おばさんが朝飯作ってくれたんだぜ?
冷めないうちに早く来いよ!—」

「おお、わかつた・・・」

目覚めたばかりにも関わらずデジュンは意識がハツキリしていた。
原因は分かっている。あの夢だ。

夢?いや、夢じゃない。

あれは確かにオレが持っている記憶、
だが有り得ない記憶、身に覚えのない記憶・・・

「何か、オレにあるつてのか・・・?」

考えてもまったく答えが出ないことは初めから分かっている。
だがどうしても何かが引っかかる・・・
何か・・・大事な事を忘れてる?

「お兄ちゃん、ご飯食べないの・・・?」

「あ、ああ、ごめんな。
すぐ行くから待つてくれ!」

今は考へても仕方ないか・・・
この戦いの先に答えが見つかるかも知れない、
今はそつ考へ行動しよう・・・

「ソール殿、これを使いなされ。」

ブリリード山へ向かう途中、ソールは怪しげな首飾りを受け取った。

「・・・何だ、これは？」

「ブリリード山はマグマによってとてもない熱氣です。
常人ではとても耐えられるものではありません。
そのための首飾りです。」

周りにいるイーフィールの手下を見ると
皆同じ首飾りをしている。

「・・・気が向けばな。」

「わかりました、それでは先を急ぎますぞ。」

「ああ・・・」

(デジュンとか言つたな。

その一人の仲間もそうだ、奴等とオレの中の精霊の力の共鳴・・・
あのとき精霊に言われた言葉、仲間を探せと・・・

それが『神の世界へと続く扉』を見つける鍵になるとも……

「どうなされましたソール殿？」

「何でもない……」

(だがこれでいいのか?
オレは一体何をしたい?
精霊の力を全て得るため?
『神の世界へと続く扉』を見つけるため?
刻印がオレを選んだ理由を知るため?)

(全では奴等と再び対峙したとき明らかになるのか……?
そのときオレは……)

「どうですか、サイズが大きい、小さいはないですか?」

「ああ、武器防具供にピッタリだ。

それにこのオープンフィンガーグローブ、

これはかなり気に入ったぜ!!」

「そのグローブには軽くて硬い特殊な金属が埋め込まれてまして、今までの素手での格闘よりかなり有利になると思いますよ。」

「確かにとても金属が入つてるとは思えない程軽いな・・・
おっちゃん、ほんとにサンキューーー！」

そう言いにスラッシュは拳の素振りを始める。

「う・・・む・・・」

「どうしたリアナ?
サイズが・・・でかいのか?」

「全体としてはピッタリなのじゃが・・・
その・・・胸が・・・のう・・・」

どうやらダイスが用意した法衣の胸のサイズが合つてないらしいへ、胸の辺りがぶかぶかのようである。

「す、すみません!!
サイズ間違えましたか!?!?」

「・・・いや、儂が見栄張つて
胸のサイズをサバ読みしてました・・・
じゃが、ぶかぶかも悪くはない、儂はこれで良いぞよ。」

「それでしたら良いのですが・・・
ちなみにその腕輪にも秘密がありましてな。」

リアナは自分の右手に付けてある腕輪を見た。

「その腕輪の窪みにリアナさんが所持している魔石をセットすると、普段の1・5倍程の力を發揮するんですよ。」

ダイスは自慢げに腕輪の説明を続ける。

「更にこれがメインなんですが、

これを使用すれば詠唱魔法と同時に、魔石の魔法を使えます。

更に更に！！

その方法を用いれば二つの魔法を混ぜ合わせる事も出来、その力は未知数です！！

今までそれを行つて来たのは大魔法使いのカレン様だけと言われています。」

「母上が・・・

儂の魔法と、母上の魔石・・・」

リアナは魔石が入った袋を抱きしめ、

「今一度、母上の力を貸して頂きます・・・

ダイス殿、ほんとに感謝致します・・・」

二人がダイスの武器防具でパワーアップしている中、一匹置いてけぼりな生物がいた。

「おい、盛り上がりっているのは良いけどよ。

オレのは・・・？」

「オマエのはないぞ。何を今更（笑）」

「いやいや、普通主人公のオレもパワーアップしなきゃおかしくね？大体オレだけ未だに精靈でパワーアップもしてないんだし」

「まあお主がそつ言つのももつともなのじゃが、お主に合づ武器や防具となるとのう・・・」

「自分の体系見て言えよ。
オマエに合づモノなんてないだろ。」

リアナはあくまで静かに告げようとしたが、スラップは横からハツキリと言つてしまつた。

「 」

「いやいや、お主今更驚かれても・・・」

「時間があればデジモンさんは新しく作れたのですが・・・
いえ、時間と”原魔石”さえあれば・・・」

ダイスは申し訳なさそうにそつ咳く。

「原魔石・・・

確かに魔石は、ゲミル族が原魔石に魔法を封じ込めた物。
つまり魔石の元じやな。」

「ええ。元々原魔石はとてつもない魔力を秘めており、その力を用いて誰でも魔法を使えるよう作られたのが魔石です。もつとも、原魔石の魔力の扱いが難しかったため、結局使用者の魔力が必要になり、

魔法詠唱を短縮出来るだけという代物になりましたがね。」

「その原魔石とデジュンの武器が関係あるのか？」

「原魔石は本来、武器や防具に使われる石なんです。
原魔石を使用したアイテムの事を”魔道具”といい、
その力はとても凄まじく、あなた達の役に必ず立つのですが・・・
この時代、原魔石がなかなか発掘されなくてね・・・」

「無いものをグチグチ言つても仕方ないわ。
いいぜ、オレはこのままでよ。」

「せめてデジュンさんにはこれを・・・」

そう言いウーンは傷薬、そして炸裂弾を3つデジュンに渡した。

「その炸裂弾はかなり強力なので、使用時には50m程離れて使用
して下さいね？」

「50m離れて・・・

本当にかなり強力なのじゃな・・・」

「本当に色々サンキューな！..大切に使わせてもらつぜ！..」

デジュンはウーンとダイスに礼を言い、
その二人の後ろにいるラキに近づく。

「ラキ、またな。

落ち着いたら必ず来るからさ、そんな悲しい顔すんなよ。」

今でも泣きそうなラキの頭に手を乗せ、優しく撫でてやる。

「絶対約束だよ？」

ホントにホントに絶対だよ・・・？

「ああ、オレを信じろ！――

この『デジュン』をな――！」

ラキは流れそうな涙を堪え、満面の笑みで・・・

「うん――！」

「それでは儂等はもう行きます。

本当に色々お世話になつたのじや。」

「このグローブ大切にするぜ！――

オレ等の勝利を祈つてくれよ！――」

「おっちゃんも、おばちゃんも、ラキも・・・
またな～～～！――」

そして三人は旅立つた・・・

「本当に不思議な方達だ・・・」

「そうね・・・

本当にクリーチャーに怯える毎日から解放してくれそう・・・

「お兄ちゃん、気を付けて・・・」

「いつとおつ、デジュンとスラップはリアナの前に並んだ。

「それでは一人とも、そこに並んでくれ。」

「よしはマグマに落ちなきやいいんだろ。」

「わかつたぜ。」

「了解じゃ。
但し持続時間は2時間、そしてあくまで熱を和らげるだけであり、
マグマに落ちたりしたならば耐熱魔法を受けてても即死じやから
な?」

「了解じゃ。」

「ここにオレの精靈が・・・
よしリアナ、耐熱魔法を頼む。」

「あれか・・・
確かに熱気が伝わっていくな。」

「あれがブリード止じや。」

「見えたぞよ。」

「では・・・」

リアナは少し長めの詠唱を始める。そして詠唱が終わると同時に、水のようなものが三人の体を包み、消えた。

「これでOKじゃ。」

「よっしゃー！」

「これで準備万端だぜー！！」

「持続時間は2時間・・・
いつガイアの手下が現れるかわからない、
デジュン、リアナ、急ぐぞ。」

耐熱魔法の時間は2時間、それでもしその2時間過ぎたとしても、耐熱魔法はあと一人分しか使えない以上、三人は急ぐしかなかつた。

「どうだデジュン？

精霊との共鳴はあるか？」

「うーん・・・

なんか体がピリピリはするんだが、
まだ近くにはいないみたいだ・・・」

「お主の共鳴だけが頼りなのじゃ、頼むぞよ。」

「ああ、なんとか頑張ってみ・・・!..」

そのときテジュン、スラップ、リアナの三人は何かを感じ取った。

「これ・・・が精靈の共鳴・・・？」

「いや違う、精靈が近くにいるからオマエも感じるんだろ。
これはもう一人の勇者との共鳴だ。」

「勇者！？」

まさかこの近くにいるのか！？

「もう一人の勇者・・・
確かソールと言ったか、奴がいるぞよ！！」

「は！？」

ソールが勇者だつて？」

その時だった、見覚えのある巨大な剣を持った男が上空から降つて
来たのだ。

そしてソールに続いて見慣れない男達が何人も降つて来る。

「また・・・会つたな。

今回はある娘もない、今度こそ・・・殺す！！」

ソールはその巨大な剣をテジュン達に突きつけ、
自分は既に攻撃の意思ありといつ事を示す。

「ソール殿、助太刀致します！！」

「イーフェイル、手を出すな・・・
こいつ等はオレがやる・・・」

ソーラーに言われたイーフェイルと呼ばれた男は、
他の兵士達にも手を出さぬよう指示した。

「あくまで私達の目的はデジュン達の抹殺、
少しでも不利になるようなならば手を出させて頂きますぞ。」

「ああ……」

「スラップ、リアナ。

せつしきの話がたとえ本当だらうとも……」

デジュンは構え、

「オレはあのときの仕返しをしなきゃ仮が済まねえ……」

「いや、ちよっと待てよ! デジュン……」

「気が済むまでやらせよう! スラップ。

どのみちソールも『ひらの話には心じる』とは無くなつだしね。」

・

「ち・・・

一人が疲れ果てた頃に説得するしか無いってかよ……

「いくぞああああ、ソール=ゲイン……」

「来い、デジュン……」

デジュンの拳、ソールの大剣が激しくぶつかり合った……

第十七話 刻印といつ名の呪縛

「いっくぞああああ、ソール＝ゲイン！！」

「来い、デジュン・・・！」

デジュン両掛け振り下ろされる大剣、
デジュンはその剣の腹に一撃を放つ。

ソールは大剣」と後ろへと体を持つて行かれる形となり、
デジュンは更に大剣を握る腕を思い切り蹴り上げた。
そして大剣はソールの手から離れ、

「ちいっ！！」

「やひせるかよ！？」

デジュンは更に剣を空高く蹴り上げた。
そしてその反動を利用してソールの懷へとデジュンの拳が炸裂する。

「しゃあっ！…どうだ！？」

ソールは岩壁へと吹き飛ばされた・・・

はずであつたがそこにはソールの姿はなく、

「落ちる・・・！」

「な、テメエ！…」

デジュンは頭を掴まれ、そのまま地上へと叩き落される。

「あちやー・・・途中までは良かつたんだがな。」

「このままではまずいぞよ・・・」

「ん? 何がだ?」

「このままでは耐熱魔法の効果が切れる。

今はソールなぞに構わず精靈を探すべきなのかもしれぬ・・・

「今回の精靈はデジュン、奴しか精靈の居場所はわからない。
ならば奴を精靈探索に行かせ、オレ達がこの場を何とかするしか
ないんだが」

「あの調子では無理じゃ のう・・・
儂等が手助け出来る状況ではないし・・・」

上空より落下してきた大剣をソールはキャッチし、
再び大剣の先をデジュンに向ける。

「く、くそあ・・・

なんて素早い動きなんだ・・・」

「立て・・・

貴様の力はこんなものではないだろ? う・・・」

「つたりめえだあああ！！」

二人は再び激しい攻防を繰り広げながら上空へと上って行く。

「イーフェイル様、今がチャンスかと・・・」

「分かつていい、分かつていいのだ・・・」

イーフェイルは何かスイッチのような物を握り、スイッチを押すのを躊躇っている。

「エイス様の命令とはいえ・・・

」のような汚い真似など・・・！」

「ですが確実に仕留めるためには・・・」

「・・・ええい！！

」のような汚い方法で殺される事、恨むなら私を恨めよ・・・！」

イーフェイルは意を決し、力強くスイッチを押す。

スイッチが押された直後、上空で凄まじい爆発が起こった。

「な・・・？」

「デジュンヒソールが！！」

「突然爆発・・・じゃと？」

上空で戦っていたデジュンヒソールの突然の爆発、

あまりに突然すぎたためスラップとリアナは状況を飲み込めずいた。

「マジかよ、おい・・・
デジュン！返事しろ！聞こえてるんだろ！？」

スラップの声空しく、スラップの下へ返つて来るのは爆発した物の残骸のみ・・・
そこにデジュンとソールの姿は無かつた。
いや、この黒い焦げた残骸こそが一人なのか・・・

「こんな、こんなのはないよ・・・
こんな・・・デジュンが・・・」

リアナはその場で泣き崩れた。

スラップも涙を流した、が静かにイーフェイルの方へと向ぎ、
よくも、よくもデジュンを・・・

「テメエか・・・!
きつたねえ真似しやがって・・・
ここで貴様等の息の根、止めてくれる！..」

「つるせえ喋るんじゃねえ！..テメエは絶対殺す！..」

スラップはその拳をイーフェイルへと放つために、
デジュンの仇を取るために、立ち向かう。

「それでいい・・・
プラズマアアブレイイイイイク！！」

イーフェイルから放たれた雷はスラップの体を突き抜ける。

「があ・・・・！」

「スラップ！！

く・・・」れ以上儂の仲間を死なせはせぬーー！」

リアナは属性風を司る魔石を右手の腕輪にはめ、

「奴を切り裂け！！レベル10発動！！」

「ぬるいわーー！」

スラップがされたように、

雷は魔法とリアナ自身を突き抜いた。

「あああああっーー！」

「どうした、こんなものかーー！？」

「これが勇者の力なのかーー！」

「ちっくしょうーー！」

「儂等では無理なのかーー！」

一人は満足に立ち上がる事も出来ず、涙を流した。

勝てないのが悔しくてじゃない。デジュンが殺され、何も出来ない無力な自分に悔しくて……

「違うな……」

スラップは何とか立ち上がり態勢を整え、続けた。

「奴は死んじゃいねえ……
オレは信じる……あいつを……」

「そうじゃな……
今もそこらへんで倒れておるはずじゃ……」

「ああ……
だからっ……こいつをさうと倒して……」

「デジュンを探す……行くぞよスラップ……」

リアナの回復魔法で一人の体は完璧とは言えないが回復した。

「その意気や良し……

何度でも私の雷で貫いてみせるわ……」

(このような奴等に私は汚い手を……
せめてもの情けだ、苦しまぬよう殺してやる……)

「破壊拳、くうえええええ……」

「母上、儂に力を貸して下され……

風と地、レベル20、ダブル魔法発動……行けえええ……」

「これで決めるぞーー！
サンダアアアアストオオオオムーー！」

「ソール、オマエももうすぐ10歳になるんだろ？」

「5日後……ジュックが10歳になった2日後にな。」

「こことはたつた一つの”刻印”、オレが頂いちゃうことになる
なー」

「オマエには無理だ」

「オマエそんな事言ひへ。

見てろよ、ぜってーオレが英雄になつてやるからなーー！」

オレの村には男子が10歳になつたとき、

刻印が刻まれた金色の眼球を右目に移植するという儀式がある。

この”刻印”を持つ者は神に選ばれし者だそうだ。

眼球を移植する前の子供達の間では、この世界を護る英雄になれると言われている。

その眼球を移植し、拒絶反応を起こさなければ晴れてその村”限定”の英雄となれる訳だ。

だが拒絶反応を起こせば刻印付の眼球は早急に抜き取られ、元の眼球は神への贊とされる。

そして儀式に失敗した子供は片眼で生きて行くことになるのだ。今までこの眼球に選ばれた者は誰一人としていない。それは即ち、この村の男は全員片眼ということになる。

そもそも、この刻印付眼球がどこから手に入れたのか、移植する事自体が間違っているのではないか、

オレは憧れより、疑問と不信感の方が大きかった。

そしてオレの儀式の前にジユックの儀式が訪れた。結果は言つまでもなく、駄目であった。

ジユックが失敗したとなれば次にはオレ、オレが失敗すればまた次の子供へと、

”英雄”が見つかるまで永遠に繰り返される。

「馬鹿らしい……」

他の子供は英雄に憧れ、そしてその夢は当たり前に打ち砕かれる。オレは英雄になりたいとは思わない、刻印に選ばれる訳もない、やつても無駄ならオレの片眼を無駄にしてまで儀式などやりたくもない。

そう思っていた・・・

オレの10歳の誕生日、その”夢”は無残にも打ち砕かれる・・・

「お、おおおおおお・・・

ついにこの時が来たのじゃ・・・!..」

「ソール大丈夫?痛くは・・・無いの・・・?」

「ソール、オマエは神に選ばれたんだ・・・

オマエの父である事が今日程誇りに思つた事はない・・・」

オレは、どうやらここいつひの血ひ”神”とやらに選ばれたみたいだ・
下らない・・・だがオレが選ばれたおかげで、この儀式は今日で終
わるのだ。

まったく嬉しくない・・・下らない、下らない、下らない!..
オレは横で泣いている父と母を、刻印が刻まれたこの新しい右目で
睨んだ・・・

「あ～あ、結局オレはダメで、オマエが選ばれちまつたかあ・・・

ジユックは包帯で纏された右目を撫でながらそう呟く。

あの日から金色の瞳は、オレの本来の瞳の色になり、
本来持つてた瞳と変わらない様で、とても儀式を行つたとは思えな
かった。

だがこいつの右目はカラツポなんだ・・・

儀式で得たもの、ジュックは”黒い”目。
オレはこの新しい目・・・

「まったく嬉しくないさ・・・

こいつに選ばれてからが大変なんだよ。

村の連中には変な特訓はさせられるしな・・・」

「良いじゃねえか。なんたってオマエは英雄だぜ?
神に選ばれた人間なんだぜ?」

「・・・・・・・

このオレの右目こはめられた眼球に拒絶され、
片目を失つたこいつ、いや今までの男達に比べればオレはマシなのが
かもしれない・・・

だがこれのおかげでオレの村は崩壊する事になる・・・

「た、大変だ村長!!

武装した集団がこの村に!..」

「何!?

・・・まさか目当では”刻印”か!?」

「このタイミング・・・

それしかありえねえ!..

奴等、”扉”がどうとか言つてやがった!..」

「いかぬ！！

長年待つて現れた子・・・
奴等に渡してはならぬーー！」

オレが刻印に選ばれてから数日後、
100人近い集団が村に攻め込んできた。

大人の男達は謎の集団と戦い、
オレ達子供や、女、老人は村長の家の地下へと隠れた。

「なんで、なんでこんな事になつたんだよ・・・」

「オレの親父から聞いた話なんだけどよ、
奴等、どうやら刻印に選ばれた者を狙つているらしいぜ・・・」

「じゃ、じゃあまさか奴等はソールを・・・？」

刻印に選ばれなかつた子供達、儀式すら出来ずにいた子供達、
それらは皆オレを、この右目を見た。
そいつらの目は、オレとの右目がこの戦いの原因だと静かに語つ
ている。

オレか？オレがいけないのか？

オレだつて好きでこんな物を得た訳じやないーー！

「みんな止めるよーー！」

今はそんな事言つてる場合じやねえだろーー！」

「ジユック・・・

「安心しろソール・・・

オマエを悪く言つ奴はオレが許さねえ！！」

「すまない・・・」

そのときだつた、天井が剣や色々な刃物に貫かれ、
その隙間から光が降り注ぐ。

「ま、まさか見つかつたんじゃ・・・」

「どうするんだよ！？」

「こ、こ、こんな所、逃げ場も何もないぞ！？」

そして天井は見事に破壊され、一斉に集団はオレ達の所へ駆け寄る。

「おい貴様等、この中に刻印に選ばれたガキがいることは知つてい
る。

さつさと渡せ。」

单刀直入であつた。

そして集団の何人かが剣をこちらに向ける。

「ガキ供を力タっぽしから調べてもいいんだが、
こちらも時間が惜しいのでな・・・」

リーダー格の男が合図し、その部下が右端の子供の頭を剣で貫く。

女、子供、老人は一斉に悲鳴を上げる。

そして更に、殺された子供の左の老人も頭を貫かれた。

「騒ぐな！！

右から順に殺してゆく・・・騒いでも殺す。
見つかるまで殺してゆくからな、
殺されたくなければさつさと教える。」

それ以降、誰も喋らなくなつた。

最初に殺された子供は右目が無い。

奴らは刻印所持者を殺してしまわないように、まず右目が無い男、女、老人を殺すつもりだろう。

こちらが刻印所持者を教えなければ、右目が存在する男のみ残せばいいのだ。

所持者かどうかは後でゆっくり調べればいい。

どちらにしても所持者はバレる。違いは犠牲者が出るか出ないかだ。いや、教えたところでこの雰囲気では・・・

だがそんなとき、

「ソール・・・

あなたはここから逃げなさい。」

オレの隣にいた母親が囁く。

『私が時間を稼ぐからそのスキに』と・・・

一体どうやって？

まさか命を捨てる気か？

今まであんた等は刻印、刻印で親らしい事をしなかつたくせに、

こういうときだけ親気取りか？

いや違うな！－あんた等は下らない崇拜心でこの”眼球”を守りた

いだけなんだ！！

だがオレはこんな所で死にたくはない。
だからあんたがそう言つなら、オレはあんたを犠牲にさせてもうひ
！！

そして母親が立ち、母が言つスキとやらを作りつとしたときだった。
同じようにジユックも立ち上がり、

「なんだ貴様？」

もしや貴様が刻印付か？」「

「ち、違つ・・・

でも刻印を持つてる奴なり・・・知つてゐ・・・

ジユック！？

まさか・・・オレを・・?

「ほう・・・

どいつか教えてもらひおつか？」

「そ、それは・・・」

「それは？」

「あいつだ・・・あいつが刻印のーーー。」

「…………！」

「！」は・・・？」

「……」

「く、つがふあ・・・！」

ぐぐ、オレは・・・生きているのか？」

口、腹部から血を流しながらソールは辺りを見回す。
下はマグマ、ソールは岩壁に突き刺さった大剣にぶら下がっている
状態だ。

「そつか・・・奴のおかげで・・・
奴は・・・？」

つま先の辺りに違和感を感じる。
目が霞んでよく見えないが、丸い生物が見える・・・

デジコンか？

「ハ、ハハ・・・」

ビハやハ奴のおかげで、お互ハ助かつたみたいだな・・・

第十八話 無力

「立て・・・
貴様の力はこんなものではないだろ？・・・」

「つたりめえだあああ！！」

二人は再び激しい攻防を繰り広げながら上空へと上って行く。

「テメエも勇者なんだろうが！！
なんでガイアの味方なんてしてやがんだ！！」

「・・・オレにはオレの目的がある！！

そのためならば利用してやるさ、何でもな！！」

「バツカ野郎があああ！！」

デジュンの拳がソールの大剣に叩きつけられる。

「つ！・・・なかなか良い一撃だ・・・
だがオレにも譲れないものがある！！」

彼は・・・彼は心に深い傷を持つている・・・

デジュン、キミ達しか彼の傷を癒してあげることは出来ない。
どうか、彼を救つてあげて欲しい・・・

「これは！？」

「この声、この感じ・・・風の精霊か！？」

「ド」を見ていろ……

11

ଏହାକୁ ପରିବାରରେ ମଧ୍ୟ ଅନୁଭବ କରିବାକୁ ଆଶିଷ ଦିଲାଯାଇଛି ।

ソールはデジュン目掛け思いつきり切り裂く。
その切先はデジュンの頬を掠つた。

「ちいこ！」

卷之三

ソールの腰にぶら下げる首飾りが突然真っ赤に光りだしたのだ。

「ソールつ！？」

デジュンは咄嗟に首飾りに手を伸ばした。

そしてそれをソールの腰から引き剥がす瞬間・・・

ג' ינואר 1970 • • •

「気が付いたか・・・」

卷之三

オレは・・・あのとき・・・?」

デジュンはソールの足に引っ掛けている状態で辺りを見回す。

「マグマの上」

と、一矢に爆弾で吹き飛はされたよ」たゞ、

デジユンの顔に上から大量の血が降り注ぐ。

「オマエすごい血じゃないか!?」

首に掛けていたならアウトだつた……

自分の腹部から生暖かいモノを感じる。
よく見てみるとかなりの出血だ・・・
腹に穴でも開いたか・・・?

いや、デジ Yun が引き剥がしていなかつたらアウトだつた。

デジュンを見てみると、全身に火傷を負っている。だがオレよりはかなりマシな状態だった。

「オレは貴様の敵だ。」

何故オレを助けた・・・

「わからねえ・・・

オレはオマエが嫌いだ。
ガンガンにぶつ飛ばしてやりたいくらいにな。」

「・・・・・・

「だが、オレは聞こえた。

ぶつかり合うとき、オマエの中の風の精霊が
オレに言つたんだ。オマエを救つて欲しいと・・・」

「・・・・・・

「そしてオレは見た。
オマエの悲しい過去を・・・？」

「オレの・・・過去・・・？」

「それを見て、オマエが何を求めているのか・・・
信じていた者に裏切られたこと・・・
自分が無力なため大切なものを失つたこと・・・
オレはオマエを理解した！！」

「何を言つてゐる・・・
貴様にオレの何が！？」

「分かるさー！オレや、スラップ、リアナ・・・
みんな同じなんだよ！オマエだけじゃない！！
オレ達は自分が無力なせいで・・・あのとき無力だったからっ！－！」

目の前で大切な者の命が奪われていったんだつ！
みんな、みんなそなうなんだよ！！」

「だから・・・だから何だと言つんだ！？」

「オレ達は何のために精霊に選ばれたんだ！？これ以上悲劇を繰り返させないためだろ！？」

あのときは無力だったさ、オレもオマエも・・・でも！今オレ達には力がある！！

勇者の生まれ変わりとして転生し、精霊という力を得た！..
オレ達は力を合わせ、この世界を何とかしなきゃいけない！..
あのときの後悔をもうしないためにも・・
今オレ達は争っている場合じやないんだつ！..」

「く・・・」

「オレを信じろ！..オレ達はオマエを裏切らない！..」

「！..」

「だから・..

だからオレ達に力を貸してくれ！..

オマエの力が必要だからつ！..オレと供に戦ってくれ！..
ソオオオオオオオルゲイイイイイインンン！..！」

「あいつだ・・・あいつが刻印の！！」

ジユックはオレを指差し、そう吼えた。

「ほう・・・あいつか・・・」

「ジユック・・・？」

「ソール、すまねえ・・・
オレは・・・オレは・・・
まだ死にたくねえ・・・！！
オレは刻印にも拒絶され、今まで良い事なんて何も無かつた・・・
だから、まだ、まだ死にたくねえんだよお・・・」

「・・・・・・・」

怒りなど沸かなかつた・・・

ただ、親より信頼していた親友に裏切られたのが悲しくて、
オレは呆然とジユックの言葉を聞き流すだけだった・・・

「そ、そうだ。

オマエには言つてなかつたが、

オレ、この前隣村のルーに告白したんだ！！

まだ返事は貰つてねえんだけどよ、良い感じだつたん

「小僧、『」苦労だつたな。」

バンツ

静かな部屋にその無機質な音だけがやけに響いた。

「オレ達の任務・・・

ヘイム村の豚供を抹殺し、刻印のガキを捕獲すること・・・
悪いな、元々貴様等豚供を生かす氣は無いんだよ。」

それを聞いた途端、みんなの顔が青ざめる。

「オマエ達、刻印のガキ以外は全員殺せ。」

「了解。へへ、隊長、女はどうじやすいか?
どうせ殺すんなら・・・」

「好きにしろ。但し最後は殺せ。」

オレはガキを上まで連れて行く、集合時間には遅れるなよ?」

「イエッサー!!

「ことだテメエ等!..口頃溜まつてる分吐き出すぜえ!..」

兵士達は一斉に、女達の衣服を破り捨て、
己の欲望を満たすためだけに行動する。

女は悲鳴を上げ助けを求めた。

だが子供、老人は何も出来ず、田をそらす事しか出来ない。

オレは状況を把握出来ず、倒れているジュックを見る。

額から血が流れている・・・
これは一体何だ？一体何が？

「ジユック・・・・・・・？」

銃で頭を貫かれた・・・のか？
さつきまでここにいたジユックはもういない。
ここにあるのはただの肉の塊だ。

こんなにも・・・こんなにも人間の命は簡単に・・・！

「さあ来い！！」

隊長と呼ばれた男がオレの手を掴んだ。
だがオレはそれを振りほどく。

そして女に夢中になつている兵が脱いだ服からナイフを取り出した。

「オマエ等・・・オマエ等！.. よくも、よくもつーー！」

「まったく世話が焼けるガキだ・・・」

こいつ以外は自分達の行為に夢中で、オレ達のことに気が付いていない。
せめて、せめてジユックを殺したこいつだけはっ！..

「うわあああああーー！」

オレはナイフを奴の腹に刺すべく向かった。
だがそいつにとつては、例えオレがナイフを持っていようが関係無かった。

ナイフは蹴落とされ、腹に拳が叩き込まれる。

「おふあぶつ……あくあ・・・・」

「大人しくしてろ、そうすれば痛い思いはしない。
今だけだがな・・・」

「ぐうう、う、うわあううう・・・」

オレは・・・無力だ・・・

親友を殺され、女はこんな奴等の慰みモノに・・・
オレは英雄じやないのか・・・?
何にも出来ないじやないか。

むしろ、こいつらを呼び込んだのはオレじやないのか?
オレがこんなのに選ばれなければ、こんなことにはならなかつたの
では?

オレは泣くことしか出来なかつた・・・

「ガキ、行く・・・ぞあ!?!」

隊長と呼ばれた男の腹から剣が突き抜けた。

それはオレの母親らしき人物が背中から刺した物だった。

「キサ、マ・・・ー!」

「ソール!…早く逃げなさい!…

あなたはこんな所で死んでは」

ザシユ

「はぐあはあ……」

オレの母親は、その男の剣によつて腹を切り裂かれた。

「舐めた真似しやがつて……！」

く、これは”再生”に時間が掛かるか……」

その男は生きていた。

あれだけの傷をものとせず、平然と立つていたのだ。

それだけの騒ぎが起これば、遊んでいる兵達も異常な事態に気が付く。

兵達は何事かと女を投げ捨て、オレ達を取り囲む。

この時点で、オレの母親の捨て身の策は見事に失敗した……

「ソール……ごめん……さい……

今ま、あなたに……母親、らしいことなんて何も……」

「もう、喋るなよ……

分かった、分かったから……！」

「刻……印に選ばれたのは偶然……なんかじゃ、ない……
あな、たの、運……命……」

「つ……喋るなつてんだろ……」

「「」

「この世界、のど、こかに存在す……神の世界へと続く扉を、探・
なさい……

そこに……全て、の、答えはあ……るのだから……」

Г. Г.

最後、ぐるぐる

ほほ、親・・・らし、事・・・出来な、く・・・て・・・」め・・・ね?」

「・・・か、・・・あれんつー！」

オレは何年ぶりだろう、刻印刻印とやたらつるさくなつてから親と認めていなかつた人を、母さんと呼んだ。

・・つ！・・・あ、
り・がと・・

それが最後の言葉だつた・・・

卷之二

母さんの体はすっかり冷たくなり、
もはやピクリとも動かない・・・

「かあさん！-!かあさん！-!

それはそのとき突然輝き出した。

「ま、まさかあのガキ、このタイミングでだとー?」

オレはその場にいた敵を全て消した。

跡形もなく、息の根を止めてやつた・・・

どうやってやつたかなんて覚えていない。

ただ分かるのは”刻印”の力だという事・・・

オレは敵を消した後、生きている人間を置いて地上に出た。

そこは、あるものは死体、瓦礫のみ・・・

その中には、体に何本もの槍が突き刺さった父親がいた。

オレは目の前で大切な者を失った。

オレは何て、何て無力でどうしようもない・・・

「オレは・・・一体何なんだ・・・！」

「オレは、オレはっ！..！」

「まだ生き残りがいたぞ！！

・・・・・っ！あの目はまさか、隊長がやられたのか！？」

地上で父親達と戦っていた奴等だろう。

奴等は続々とオレ周りに集まつて来た。

死のう・・・死んでみんなの所へ行こう・・・

そうすれば何もかもが楽になる・・・

『この世界のどこかに存在する 神の世界へと続く扉を探しなさい・

・・

そこに全ての答えはあるのだから・・・』

「つーーー！」

右目を押さえ、

「探すさ・・・探してやるさつ－－
そうすれば全て分かるんだろ－－
この目が－－オレの運命が－－」

もちろんあの連中もだ－－！

必ず、必ず後ろで糸を引いている奴がいる－－
そいつらも全て見付けて殺してやるつ－－

オレは残りの敵から黒幕を吐かせるため、

色々な手を使い奴等を痛めつけた。

だがどんなに痛めつけても奴等は何も喋らない。

結局、オレの拷問に耐え切れず敵は全員死んだんだ。

唯一ある手掛かりといえば、奴らが着ていた上着・・・
その袖に描かれた銀色の狼のマーク・・・それのみだ。

オレは宛てもなく彷徨つた。

ただ、母が言つた扉、銀色の狼のマークを探して・・・

いつだつたか、ある遺跡で出会つたんだつたな。

エイジ・・・お節介な、本当の兄みたいな奴だつた・・・

オレは奴に誘われてハンターになつた。

そこだつたら世界中の色々な情報が手に入る。

そこだつたら”神の世界へと続く扉”、

オレの村を襲つた銀色の狼の黒幕、

何かしらの情報があると思った。

何より、こいつならオレは本当に信頼出来る仲間だと思った。
でもエイジはオレの仲間じやなかつたんだ……

いや・・・違う。

あいつはオレの事を信じてくれていた・・・
信じていなかつたのはオレ・・・

あいつはオレの事を本当の仲間だと思つてくれた。
オレが拒絕していいたんだ、全てを・・・

ソールの瞳から涙が流れた。

「つ！ー」

「オレは・・・もうあんな後悔はしたくない・・・
オレは無力なまゝは嫌だ・・・つ！ー」

「だったらオレと一緒に来い！ー
オレ達は無力じやないんだつ！ー」

「オレは、オレは・・・つ・・・！」

第十九話 仲間との絆——田代覚める炎の戦士

「オレと一緒に来いソール！！」

「オレは、オレはあつ……」

ソールはデジモンを駆逐へ蹴り飛ばす。

「ちよー・?おまー……」

空高く蹴り飛ばされたデジモンは何か地上に着地し、まだマグマの真上でぶら下がっているソールを見る。

「オレは・・・もうダメだらつ・・・
オマエだけでも・・行け！…」

「バカ野郎が・・・
いつまでも一人でうじうじしゃがつて……このまま終わつても
いいのか!?
このまま無力のまま終わつていいのか!…」

デジモンはソールへと手を伸ばし、

「仲間てえのはな、片方だけが手を差し伸ばしただけじゃ成り立た
ねえ！…」

「…」

「お互いが手を差し伸ばし、ちゃんと掴み合つてこそ仲間だらが！」

!

「テジコン」

「オマエの怪我だつてな、オレ”達”の仲間が何とかしてくれる！！
だからこの手を掴めソール！！」

エイジ

オレは今、本当に仲間といふものかわからぬな気がする……

オレは」一いつ等の仲間になると決めた。

オマエとも本当の仲間になつてみせる。

余猶古事記など測義を用ひて木々の形を揃むか

「わあ早くしろ……」の手を掴むんだ……」

卷之三

だが、デジモンの手が短すぎるため、

「何してるんだ！？」

まだ悩んでるのかオマエはー?早くしやー!「

• • • • • • • • • • • • • • •

届かないいつての・・・

「はあつ・・・！・はあ・・・」

「スラップつ、い、今回復を・・・」

今にも倒れそうなスラップとリアナ・・・
彼等は何度も敵の攻撃を受けていたのだ。

一ノ二三の筆

テヌニのよーだ何間を何とも思われぬ奴にはわがんないたるよ・

「儂等は必ずデジュンとソールを助ける！！

そして儂等のような悲劇を繰り返させないために・・・」

「うるせえ！」やがて彼は叫んで、机の上に手を叩きつけた。

「ちいっ！」

プラズマアアアアブレイイイイイイイク！！」

「ぐあつああああああつーー！」

「つあうつわああーー！」

イーフェイルから放たれた雷は一人を貫く。
だが二人はそれでも・・・

「何故・・・何故なんだ！？」

「テメエを倒すまでは何度もだつて立ち上がって見せるや・・・」
「二人が生きておるのこ、儂等だけが死んではならぬだらつ・・・」

「オレは・・・どうやらオマエ達を過小評価していたようだ・・・
オマエ達のためにもーーー！オレも本気を出させてもらうーーー！」

イーフェイルの両手に巨大な雷の玉がいくつも集まり、
それは更に巨大な一つの矢となる。

「これは・・・マズイかもな・・・」

「さすがにアレを喰らえば儂等でも・・・」

「これで終わりにしよう・・・

「プラズマブレイク・アルティメットーー！いきいーー！」

「すまねえデジコン・・・ーー！」

「ガアアアアアアンーー！」

突然爆発が起き、イーフィールはその雷の玉もろとも吹き飛ばされる。

「お、オマエ生きて……」

「やはり生きておったか……」

二人の視線の先にはソールを抱えたデジュンがいた。

「今戻つたぜ……一人とも無事か?」

「へ、へへ……

やっぱ死んでるかもとも思つたが……

「ひりの氣も知らねえですよ……」

「何はともあれ、ソールも何とか無事のよじやな。」

「ああ、こいつに回復魔法、耐熱魔法を掛けてやつてくれ。」

「こいつは熱対策も何もしてないみたいだからな。」

デジュンはリアナの前にソールを倒し、
リアナはソールの容態を確認する。

「この傷はかなり酷いのう……

それにこの熱、よく熱対策せずここまで耐えられたものじや。」

「リアナ、治せるか?」

「治せるが……耐熱魔法、ここまでの傷を回復させる魔法となると、

儂の魔力は完全に尽きることになる・・・
見たところ、お主も火傷が酷いようじゃが？」

「オレは耐熱魔法のおかげで爆発にも多少耐えたんだろう。
オレはいいからソールを何とかしてくれ。

そいつはオレ達の仲間だからな！！」

「まったくオマエはスゴイ奴だよ・・・
オマエを見てたらオレもまだ頑張るしかねえな！！」

「いや、後はオレ一人でやる。
オマエもリアナとソールと一緒に休んでてくれ。」

「オマエ何言つてんだよ！？
オマエ一人で・・・」

そこでスラップは倒れこんだ。

デジュンが生きてた事によつて、今までの緊張の糸が切れたのだ。

「オレが何とかするよ。だから心配するな！！」

「ち・・・すまんが頼んだぜ・・・」

そしてデジュンは爆煙の中の一撃を見つめる。
徐々に爆煙が晴れ、そこには・・・

「この私にここまで傷を負わせるとは・・・
なかなかの炸裂弾だな。雷玉を盾にしなければマズかった・・・」

「それはオレとソールへの不意打ちに対する仕返しだ。」

「・・・・・。

不本意とはいえ、すまなかつたな。

そして生きていてくれた事に礼を言つ。」

「何を今更・・・

毎度毎度テメエ等は汚い手ばかり使いやがつて・・・
人の命を何だと思つている！－！」

「言いたい事は分かる。

だが、私にも今更引けないのだよ・・・」「

イーフェイルは両拳に雷を纏い、構える。

「オマエも戦士なのだろう。

ならば！－！戦いで貴様の正義を証明しろつ－－

この四天王最後が一人！－！イーフェイル参るつ－－！」

デジュンも構え、イーフェイルはデジュンへと仕掛ける。
だがデジュンはその小さい体を生かし、相手の攻撃を紙一重で避け
る。

「なるほど、動きは悪くないな。

だがこれはどうだ！－！」

「な－？」「

避けたと思った右の拳が急に伸びた！？

「はあああああ！－！」

せええいやああああああー！」

雷を纏つた拳が何発もデジュンに叩き込まれる。

避けたと思つたら直撃。それを何度も繰り返しながら。。。

「はがうはつ！！」

「あの野郎！！

拳の雷が一瞬伸びて攻撃しやがつたてのか！？」

「儂等と戦つたときのように対集団用広範囲攻撃、そして今の対個人用一点集中型攻撃・・・やはりあの者、只者ではない・・・」

（アーチー・マーティン）

デジュンは何とか致命傷を避けるべく防御のみ。

だがそれでもイーフェイルの攻撃はじわじわとデジモンの体力を奪つてゆく。

「アーリーだゾジハーン!!

貴様はその程度ではないだろう！！

「わかつてらあああーー！」

デジュンのパンチを繰り出すが、イーフェイルには届かず、逆に痛恨の一撃をもらう形となってしまった。

「ぐあふつ！！」

「私の買いかぶりすぎか・・・
所詮貴様はその程度、誰一人守れぬ弱者なのだ！！」

更にもう一撃叩き込まれテジュンは吹き飛ばされる。

「あうっ・・・！」

「さあデジュン・・・
もう終わりにしようか、これでつ！！」

イーフェイルは先程不発に終わった
プラズマブレイク・アルティメントの構えを取り、

「オレは・・・諦めないぞ！！」

オレを信じてくれた仲間のためにも！－！こんな所でつ！－！」

「だが貴様にはそれだけの力は無いのだ！！
力が無ければその想いは何の役にも立たん！！
貴様は無力なのだ！！」

「オレはこんな所で朽ちはしないつ！－！」

「ならばこれに耐えてみせるテジュン！－！
私を失望させるなあああああああつ！－！」

プラズマブレイク・アルティメントが放たれた。

その巨大な雷の矢は、デジュン目掛け真っ直ぐ飛んで行く・・・

(偉そうに吠えたが・・・オレはこの程度か・・・)

かついわっこ・・・でも出来ねえよ、すまねえみんな・

そのときだつた、ソールは目を覚まし叫んだのだ。

「デジュンっ！ 貴様はオレに供に戦うと、仲間だと約束しただろ

オレ達は無力じゃないと！！オマエが言つたんだつ！！

二んな所で終わるのか才レ達はああああああつ！！

「ソール・・・」

「手助けしてやんだ！！こんな所で終わんじゃねえぞ！！

「スラッシュ…！」

「儂等の力、お主に託す！！

今こそお主の闘志の炎を燃やすのじゃーー！」

「リアナ・・・みんな、ありがとう・・・
オレは負けない！－諦めない！－」

ソール、スラップ、リアナの精靈の力が一斉にデジュンに集まる。

既に諦めかけた闘志が再び燃え上がるとき・・・
”それ”はデジモンの気持ちに応えよう。

それは赤く、彼等の闘志を餌として燃え上がり、
それはデジュンの強大な力となつて今、具現化される！－

「オオオオオオオオオオ！」

「私のプラズマブレイク・アルティメットがつ・・・
かき消されただとつ！？」

イーフェイルが放つた雷の矢は一瞬でかき消されてしまった！－
その闘志の炎につ！－

「オレは・・・諦めない！－
この闘志の炎でオマエを燃やし尽くし！－
その先のガイアを必ず倒すつ！－
このファルスティアを守るために！－」

デジュンは両拳に炎を纏わせ、その両拳をイーフェイル向け力強く
組む！－

そしてその炎は巨大な火柱となり、イーフェイル向かって放たれる
！－

「これはまさか・・・！－精霊の、力！？」

巨大な火柱の渦で敵を包み、身動きを取れなくし、
そこへ強力な一撃を撃つ！－

「はあああああああつ！－

くらえイーフェイル！！これが仲間との絆！！

オレ達の力だああああああああああああああああああああ！！！」

デジュンは右手一点に炎を集め、イーフェイルに撃ち込むため飛ぶ！！

「私の体よ！！動けええええええええええええ！！

貴様のその力つ！！打ち碎いてみせる！！

プラズマブレイク・アルティメット！！いけえい！！」

「だああああああらっしゃああああああああああああああ！！！」

デジュンの炎の拳、イーフェイルの雷の矢が激しくぶつかり合づ！！
だが雷の矢はデジュンの拳に打ち碎かれ、そのままその拳はイーフ
エイルに撃ち込まれた！！

「がふあああつ！！か、かはつ・・・・・！」

イーフェイルは血を大量に吐き出し倒れこむ。

「見事だ・・・

オマエ達の・・・絆、見せてもらつた・・・

私の最後の相手がオマエ達で、良かつた・・・」

「イーフェイル・・・オマエ・・・」

イーフェイルが倒れた今、残された兵達は・・・

「イ、イーフェイル様が・・・」

「いりなつたらオ、オレ達だけでも戦うんだーー！
今の奴等ならオレ達だつて・・・」

兵達は一斉に『デジュン達を取り囲む。
だが・・・

「引け！！オマエ達は城へ戻り、この事をエイス様に伝えろーーー！」

それはあまりにも意外な台詞であった。
確かに今、この状態でこの人数で襲われたら『デジュン達』でさえ危う
いにも拘らずだ。

「し、しかし・・・」

「これ以上私に恥をかかせるなーー！
オマエ達は引くのだつーー！」

「は、はいーー！」

兵達は一斉に敬礼し、撤退していった。

「オマエ・・・」

「ふ・・・私も甘いな・・・
どうした？何を見ている・・・
敗者等気にせず前に進めーーそしてこの世界を救つてみせりーー・
あの世とやらで貴様等の正義、見せてもらひやーー・・・」

イーフェイルは立ち上がり、崖まで向かつ。

「イーフエイル！！」

「やうせだ・・・トジロノー!」

イーフェイルは崖から身を投げ出す・・・
下のマグマに向かって・・・

「イーフエイルウウウウウウフー！」

それは余りにあつけない、この戦いの幕引きであつた。・・・

「オマエは・・・確かに最後まで戦士だつたよ・・・
オマエの事は、絶対忘れない・・・」

第一十話 真実はどこに

「なるほどね・・・

道理で見付からぬ訳だ・・・」

ドクターKは深い森の中で気配を絶ち、様子を伺う。その視線の先には巨大な城がそびえ立っている。

そして、その城にぞろぞろと怪しい集団が入城して行く様をドクターニは見つめる。

「…………」井原も既に調査はしたはずだが、あのときはあんな物無かつた……。

何らかの装置で普段は姿を隠す、というのが筋かな？

ガイアの兵と思われる連中が全員入城したのを見届けると、ドクターZは退散しようとする、がその時だった。

「が！？」

この場から立ち去ろうと踵を返した瞬間、ドクターEは顔を何者かに撃まれたのだ。

卷之三

掴まれた指の隙間から見える顔に見覚えがあった。

それはエンファイ会場で現れた一人の内の一人、エイスであった。

「エイス・・・いや、オマエはやはり・・・
私の予想が今、確信に変わったよーーー」

バアアアン

ドクターZの顔の布は跡形もなく、一瞬で燃え尽くされた。

「ぐ・・・」

「その縁の髪、瞳・・・
オレも今確信に変わったよ。
やはり貴様だつたか、ネス・・・」

「懐かしいな、こうやって顔を合わせるのは。
オマエは少しあつれたんじやないか？」

「あれから1000年も経つ・・・人が変わるには十分すぎる時間
だ。」

「オマエは変わらないな・・・姿、声、年・・・何も変わっていな
い・・・」

「1000年か・・・人が腐るには十分すぎる時間だ。」

「オマエはその長い時間、体が腐るより先に頭が腐つたかよ。
オレが変わっていないなら、オレがどういう人間が分かるだろ?
まさか忘れちゃいねえだろ?うなつ!ー」

「ネスと呼ばれた男は、いつものように煙球を地面に叩き付ける、
はずだったが・・・」

エイスはネスの煙球を持つ右腕を掴んだ。
掴まれた右腕は一瞬で真っ黒な灰にされる。

「ぐつ、ああああーー！」

「分かつているさ・・・長い付き合いだ。

相変わらず、下らん玩具遊びが好きなんだろ？」

「くつ・・・・・！」

「貴様の右腕はオレの炎で灰にした・・・

今この場で殺されたくなれば妙な真似はするな。」

「つ、なあんてな。くつくつ・・・

全てお見通し、さすが供に戦った仲間でか？」

腕を跡形もなく燃やされたはずのネスからは、痛み、恐怖といったものがまったく見られなかつた。そればかりか、血や、肉を燃やしたときの嫌な臭いがまったくない。

「相変わらず、よく分からん男だ・・・

まさか、自分の身体までも玩具にしたと？」

「御名答、だがそこまで分かつていながら油断したなーー！
オマエもそのスカした性格は変わってねえよーー！」

ネスの腹部が左右に開き、光輝く。

「つーーー！」

「バーニング」

オレの新兵器、『ビッグバン・カノン』！！』

「そんなおもちゃが私に通用すると思ったか？」

「なんだと！？」

「オマエは私の仲間だつた最後の一人。
残念だよネス・・・」

エイスの右拳に黒炎が集まり、それは漆黒の火剣となる。

「レーヴアテイン！」

燃え尽きた!! 我が炎の劍に!!

エイスの火剣は巨大化し、ネスに向かつて伸びる。それはネスの腹部から放たれた光を貫き、そして・・・

「くつーーー！」」「んな・・あつ・・

!

「オマエ達大丈夫かあ？」

戦いを終えたデジュンはスラップ、リアナ、ソールに駆け寄る。

「来るの遅えんだよ・・・」

「じめん・・・」

「まつたぐじや。」

「・・・じゃが、お主も精霊の力を得たのじやな？」

「ああ、あのとき突然力が溢れて来たんだ。」

オマエ達みたいにまだ精霊には会っていないけど・・・」

「おやぢりへじの近くにこむのじやな・・・
儂等ははじで休んでおる。デジュン、火の精霊に会つてへくるのじ
や。」

「おう!!

「そうだ、回復魔法使えないんだろ?みんなこれ使えよ。
ラキの母ちゃんから貰つた薬だ。」

デジュンはリアナ達に傷薬を渡した。

「よし、じゃ行ってくるよーー!」

「デジュン・・・」

そこでソールが呼び止めた。

「ん?」

「ありがとう・・・

そして・・・よ、よひ、よろしく・・・」

「無理するなよ・・・

ま、改めてよろしくなー!」

「オレはスラップだ。

ドンダケのときの不意打けは貸し一つな?
て訳でよろしく。」

「儂はリアナじや。

たつた一人の可愛い女子じやからとて、襲いつでないぞ?
うむ、よろしくなのじや。」

「・・・よろしく・・・」

「あはは、なんだよオマエ等のそれはあ

(これがお互に手を差し伸べ、掴み合つてこいつ事、仲間といつ事。
デジモン、オレはオマエから大事なものを教わったよ・・・
本当に、ありがとう・・・)

「よし、あまり耐熱魔法の時間も残っていないしな。
急いで行くよ、それじゃー!..」

デジュンを見届け、ソールは一人に聞く。

「いつもアイツはああなのか？」

「そうじやな・・・

あの明るさに、儂も不思議と引き付けられた。

本当に不思議なやつじやよ。」

「ただのバカという見方も出来るがな。

ソールもそんなデジュンに引き付けられたんだろ？」

「・・・そうだな。

オレはあいつ、オマエ等と併に戦うと決めた。
もう後悔しないために・・・

「大体一ひらへんのような気がするが・・・
あそこ・・・か？」

明らかに怪しい洞穴、今までのパターン上有り得ると略ぎ、
デジュンは洞穴に入つていく。

中は一切の光が無く、どこまでいっても暗闇であった。だが、不思議と迷うことなくそこに辿り着いた。

「よお兄弟、オイラの力、気に入つてもらえたか？」

「どこからともなく聞こえる声。

「あんたが火の精靈・・・か。」

淡く輝く少年はデジコンの問いに答える。

「正解、これでオマエ達は四人の精靈の加護を得た訳だ。まずはおめでとう。」

「あのとき、あんたの力が無ければオレ達はやられていた。ええっと、ありがとうございます。」

「そんな無理してかしこまらなくていいぜ？
元々助ける気なんか無かつたんだしな。」

「な・・・」

「あそこでやられるなら、それも運命・・・
それまでだった。だが・・・」

火の精靈の指先に小さな映像が表示される。

「分かるか？これがオマエの前世、勇者の一人マルスだ。」

「そいつが…？ オレの…」

それはデジュンが夢で見た銀髪の剣士だった。

「あいつもな、仲間のためになら自分を犠牲にしてでも戦い、
そしてどんな絶望的な状態でも決して闘志の炎を消さず戦い抜く
奴だった…」

「…………」

「あいつをオマエに重ねて見てしまったんだよ。
そんなわけだ。オイラが力を与えたのは。」

「なんつうか…」

「精霊のくせにいいかげんだってか？
まあ四人の精霊の中じゃオイラが最年少だしな（笑）」

「ははは…」

「で、オマエさん達はこれからどうする？」

やはり先代の勇者達と同じく、星神ガイアと戦うつもりか？」

「当たり前だ！！教えてくれ！！ガイアが何故星神なのか、
封印されたはずのガイアが何故復活したのか、この世界の真実と
は何か…！」

「ん~いくつかオイラ達精霊からは答えられないのがある。
それでもよければ、ヒント程度なら答える」とは出来るが。」

「それでもいい……教えてくれ……」

「まずガイアが星神、これは事実。

ガイアはこの星の創世記から存在している、この星の防衛システムなんだ。」

「防衛、システム……何のための？」

「それは”怨靈”、“クリーチャー”……色々呼び方はあるみたいだけど、正式名称は”デスミオス”。そのデスミオスからファルステイアを守るためだ。」

「クリーチャー……デスミオス……つ……ことはガイアとそのデスミオスは……ガイアがデスミオスを操っている訳ではないで事か！？」
「ありや、てつきり知ってるものかと思つたけど。オマ工達はそういう認識だつたんだな。」

「デスマオスて一体何なんだ！？」

「奴等の目的、何故オレ達人間を狙う！？」

「オマエが人間かは別として……

デスマオスはこの世界に生きとし生ける物全ての天敵とも言える存在。

奴等の目的等は一切不明だ。無限に現れ、破壊の限りを尽くす。そしてそれらからこの星を守る、それが星神ガイアだ。」

「でもデスマオスはかなり前から存在しているし、それは一体？ガイアの防衛システムなんか機能していないじゃないか！？」

デジュンに構わず、火の精靈は続けた。

「永い間、この星を防衛していたガイアの力は徐々に弱り始め、それに比例して活発化する『テスミオス』、そしてどういう訳か突然のガイアの暴走。

暴走したガイアは、自らの体から異形の者を作り出し、人間達に牙を剥くようになつた。」

「それはまさか・・・」

「その暴走したガイアを止めるために四人の者が立ち上がった。それがオマエ達四人の前世、”マルス””サラ””リューネ””アデュー”だ。

そして四人はガイアを封印し、ガイアから生み出された異形の者達も活動を停止した。

ガイアが封印されたおかげで、更に『テスミオス』は活発化する結果となつたけどな。」

「何が何だか分からない・・・そんなことが・・・」

「だが100年程前に何者かがガイアを復活させた。一体何のために復活させたのか・・・いや、むしろガイアの暴走こそがこの戦いの発端だ。一番の疑問はその暴走だらうな。」

「まさかエイスとオージーが・・・？」

「・・・さあね・・・」

オレが答えられるのはギリギリここまで。

あとは自分の用で確かめてくれ。」

「・・・わかった。

色々ありがとな。おかげで色々分かつたよ。」

「いや、オイラもギリギリの状態・・・
オマエ達に加護を与えるていつのはな、結構身体に負担が掛かる
んだよ。

しばらくは人間の前に姿を現すことは出来なくなる・・・
その間にオマエに話せて良かったよ。」

「・・・何故そこまでして、自分の身を削つてまで・・・
オレ達に力を貸してくれるんだ?」

「オイラ達精霊はガイアから生み出された身。
だからといってガイアとは完全に独立した存在だから、ガイアの
状態には影響されないけどね。」

「ガイアから生み出された存在だつて!?」

「でも、例えかつては人間の敵だつたとしても・・・
オイラ達の生みの親であるガイアが何者かに利用されるといつの
なら、

それを止めたいと思うのが普通だろ?」

「・・・・・・」

「さあ、もう時間だ・・・
どうか、オイラ達の親を解放してやつてくれ・・・
この悲しい運命から・・・」

そう言い残し、火の精靈は消えてしまった。

「ガイアとデスマスは繋がっちゃいなかつた・・・オレはガイアが仇だと思い込んでいた・・・」

ガンツ
!!

拳を思い切り壁に叩き込む

ରୂପକାଳିକାବିଦୀ

オレは今までみんなの仇いやない奴と戦っていたのか!!」

デジュンは更に何発も壁に叩き込む。

「オレ達は何も知らなかつたんだつ！？」

第一十一話 それぞれの想い

「お、デジュンが戻つて來たぜ。」

スラップの指差す先にはデジュンがいた。

「何か様子がおかしいの……」

「確かにあの野郎、ガラにもなく暗いな。」

「……」

三人はデジュンに駆け寄つた。

「お主、精靈から何かを聞き出したのじやな?」

「ああ……」

いつもと違つてデジュンは二人は戸惑つたが、今は話している時間はない。

耐熱魔法の時間も残り僅かであるため、早くここから抜け出さなければいけいからだ。

「まずはブリッコード山から出る、それからじょじょに話せよ。」

「スラップの言つ通りじゃ。デジュンもそれでよいな?」

「ああ、すまない……」

「・・・デジュン」

「何だ・・・?」

「これから始まる戦い、オレ達は負ける訳にはいかない。迷うな、その迷いが命取りになるぞ・・・」

「そうだな・・・ありがとなソール。」

四人はブリリード山を後にした。

『特殊な力を持たず、ただの人でありながら最強の力を持つ者』

『ゲミル族と人間との混血であり、ゲミル族以上の魔力を持つ者』

『”扉”に触れずに刻印を手に入れた者』

『そして、イレギュラーであるオリジネイターの者・・・』

「は・・・四人の、最後の覚醒は先程終了した模様です。」

次はこのガイア城に攻めてくるでしょう。』

自室にてシャナは腕輪から発せられる四人の声を会話していた。

『とんだ曲者揃いだな。』

『やはり一番の謎はオリジネイターの存在だろう。何故あやつがこの世界に存在しているのか。』

『理由は察しがつく。ただ確証が無いだけだ。』

『本当の意味での覚醒をしない限り、現段階ではオリジネイターは脅威ではない。』

今は我々の計画を進めるのが先だ。まずは奴等を利用し、あの力を手に入れる。』

「了解しました。では当初の予定通りに・・・」

『そのためのオマエとオージだ。』

全ては神の世界へのために・・・』

そこで腕輪からの通信は途絶える。

その通信が終わったのと同時に、オージはシャナの部屋へ入つて来た。

「年寄りどもの話は終わつたか?」

「オージ様・・・」

「まつたく、この城に閉じ込められてから暇でな。」

「仕方ありません、デジュン達はもうベリーへ攻めて来るでしょう・・・」

「次の戦いはオレ達もやらされる。
オレが用意した人形もやつと役に立つ訳だ。
もちろんオマエにも戦つてもらつ。」

「は・・・」

「ふ、オマエの部屋に来たついでだ・・・
エイスのようにオレの相手もしてもらおうか?」

「命令とあらば・・・」

「冗談だ・・・戦いは近い、体を慣らしておけよ?」

「了解しました・・・」

オージは部屋を出る。

(もうすぐ私達の計画が始まる・・・
私はそれでいいの・・・?エイス様・・・)

「そりか・・・そんなことがのう・・・」

四人はブリリード山を降り、体を休めるために街を探している所であつた。

そして四人は街を探しつつ、これからのこと話を話し合つた。

「オレ達が戦う相手・・・それはガイアではなく、エイス、オージ、そしてクリーチャーであるデスマオスて事か。」

「ああ・・・オレの仇はガイアなんかじゃなかつた・・・」

「そんなにウジウジすんなよ・・・

確かにオマエの仇はガイアではなく、デスマオスだった。でもな、精霊の話だとガイアが暴走したにも訳がありそうだぜ? ガイアを暴走させたのはエイスやオージの可能性が高い。」

「ふむ・・・その後、勇者に封印されたガイアを復活させたのじやろうか。」

「確証はないがその可能性は高いな。

奴等はオレ達四人と精霊の力が揃うのを阻止しようとした所を見ると、

そこにもまだ秘密がありそうだな。」

「奴等がオレにオマエ等の抹殺を依頼したのは、

勇者の生まれ変わりを共倒れにさせるためだつたのだな。」

「・・・・・」

「そんなクヨクヨすんなよデジュン！－

仇じやないからといって、このまま奴等を放つておけないだろ。」

「オレ達は無力じやない・・・オマエが言つた言葉だ。

無力じやないのならこの力、この世界のために役立てるべきだろ？・
・・」

「デジュン・・・

儂等がこれからすべき事は、ガイアを正常に機能させ、デスマオス
からこの星を守る。
そして今後この星に住む者達を、儂等のような目に遭わせない・・・
じやうづへ。」

「さうだな、確かにみんなの言つとおりだ・・・

精靈と別れてからずっと暗かつたデジュンの表情が、いつもの明る
い表情に戻った。

「よつしゃー！

わざと体を休めて、椅子とオージを倒す－－
そして必ずこの星を守る－－！」

「その一直線馬鹿、それこそがデジュンだな。」

「つむ、落ち込むのはデジュンじゃくなこのつ。」

「馬鹿でこそだ・・・」

「テメエ等ー！みんなしてオレをバカ呼ばわりかよー？」

四人の決意が固まつたときだつた。

四人は突然の雨に振られてしまつたのだ。

「ちひくしょおーー戦いが終わつてこんなんかよーー」

「つべこべ言わす走れデジュンーー」

「むーーあそこに洞穴があるーー

あそこで雨宿りするぞよーー」

雨宿りが出来そうな洞穴を見つけると、四人はすぐさま洞穴に入る。

「ふう、服がびしょびしょで風邪引きそうだ・・・」

「オマエは服なんか来てないだろ・・・
つたく、魔法で回復してもらつたとはいえ完治じやないもんで走るのは辛いぜ。」

「・・・ソリで雨が止むまで待つか。」

「そうじやのう。一度そこに木の廃材がある。
これに火を付けてはどうじや？」

「そだな、このままじや風邪引くし服を乾かすか。まかせとけーー！」

「儂は奥で乾かすので、向こうにも火を頼むぞよ。」

「おー、男連中は！」で乾かしてゐるよ。

まずはこいつから・・・出る、オレの炎おおおお！！」

デジュンが叫ぶと、デジュンの右手の手の平に炎が燃え上がる。そしてその炎を廃材に移させる。

「よつしゃ、次は奥だ！！

燃えろ、オレの炎おおおお！！」

デジュンは奥へ行き、先程と同様に廃材に火を点ける。

「お主、いちいち呼ばなければ炎が出せぬのか・・・？」

「いやいや、気分の問題でえか・・・

やつぱ技出すときの掛け声で大切だと思つよ～」

「まあお主がいいのならいいが・・・
では服を乾かす故、覗かぬようにな。」

「わかつたわかつた。スラップとソールにもちやんと言つておくよ。

」

デジュンは最初に火を点けた場所に戻り、火の傍に座る。見ると、ソールは脱いだ服を火の傍で乾かしているが、スラップは服を着たまま座り込んでいる。

「ん？濡れた服、脱がないのか？」

「いいよオレは。」のままでも。「

「濡れた服着たまんまだと風邪引くぞ？
てか恥ずかしいとか？男同士なのに？」

「そんなんじゃねえよ。」

「何を今更・・・なあソール？」

「・・・」

「ソールだけじゃ不公平だよなあ」

デジュンはニヤニヤしながらスラップに近づく。

「な、なんだよ・・・」

「いやいや、大事な仲間が風邪を引いたら困るしな。」

「だからなんだよ・・・！その手は！？」

「行くぞソール！オレを援護しろ！――」

「・・・任務了解」

デジュンとソールはスラップの服を脱がせるべく襲い掛かる。

「やめろおおおお――！」

スラップは必死に抵抗するが、服は半分ほど脱がされかけていた。
そのときだった。

「ん? なんだこれ」

ふに・・・

「・・・む」

ふにふに・・・

二人はスラップの胸から奇妙な感触を感じた。

「なあ、これって・・・まさか」

ふにふにふに・・・

「む、むね・・・」

ブシュ――――ツ――

「お、おいソール! ?」

ソールは大量の鼻血を噴出し、その場に倒れこんでしまった。

「意外に純な奴なのかソールは・・・」

「おい・・・」

後方より殺氣・・・
殺られる! ?

「テメエも血を噴出せやあああああ! !」

オレは一体何発喰らつたんだろう……
気が付いたとき、オレは血だらけの状態で倒れていた。

「一体何の騒ぎじゃ……？」

騒ぎを聞きつけて、下着の状態のリアナが覗きに来る。
そしてそれを見たソールは……

「ぐはあああ……」

ブシュー――――ツ――

「下着姿で鼻血とは……儂もなかなかの美貌じゃのう。」

「・・・・・」

「スラップ？ お主も儂に見惚れたか？」

言つてみたが、とてもそんな空氣ではなかつた。
よく見てみると、スラップの胸が……

「お主……女じやつたのか……？」

「・・・・・・・」

普段はサラシで巻いていたのだろう。
ほどけたサラシの隙間から小振りな胸が見える。

「何故今まで黙つておつた？」

リアナの問いにスラップは長い沈黙の後、

「オレは既に女を捨てたからだ・・・」

そう、この場にいる四人は皆、何かしらの戦つ理由がある。それはスラップも同様、暗い過去を持つっていたのだ。

「オレは女を捨て、奴等に復讐をすると決意した・・・オレが戦う理由はオマエ達と同じや・・・」

デジュンは起き上がり、

「オレ達は仲間だ。

聞かせてくれ、オマエのことを・・・」

スラップはゆっくり頷き、静かに語り初める・・・

第一十一話 雨が上がり、私の心は

オレの村、リトリーの村は本当に何の変哲のない普通の村だつた。そんな村に奴等は突如現れたんだ・・・

「クリーチャーだ！クリーチャーが来たぞ！！」

「くそつたれがつ！今日はいつも増して数が多いぞ！！」

「女子供は隠れろ！！男供は武器を取れ！！」

オレ達の村にクリーチャーが現れるのは日常茶飯事だつた。だから村の男達が奴等を駆除するのはいつもの事、今日もいつものように駆除出来ると思っていた。

だが、奴等はいつものクリーチャーでは無かつた。数が多いこともそうだが、奴等は何かが違つた。

そう、奴等からは何か人の意思のような・・・

「おらああああ！！」

男は斧を振り下ろし、それはクリーチャーの腕を切り落とす。

「イタイ、イタイヨオオオ！！・・・タスケテ・・・タスケテヨ・・・

・

「なつー？」いつ喋るつてえのか！？」

奴等はクリーチャーでありながら人間の言葉を喋るのだ。

今までのクリーチャーはまだ本能の赴くまま破壊を繰り返すだけであった。

だがこいつらは人間のように言葉を発する。助けを求めている・・・

「タスケテヨ・・・コンナノハモウ、イ、ヤ・・・ダ」

「くつ・・・」こいつら何を言つて・・・

「惑わされるな!!これが奴らの新しい手かもしけん!!
殺せ!!クリーチャーは全て殺すんだ!!」

「で、でもこいつら助けを求めて・・・いるんだろ!??」

「馬鹿野郎!!余所見を・・・」

男が気付いたときには既に頭を半分食われたときだった。

「あつ!!ああああつ・・・かつ・・・」

「く・・・馬鹿野郎が・・・!!

みんな惑わされるな!!こいつらはオレ達を殺す氣だ!!」

「アアアアア!!イヤ、ダ、イ、エアアアア!!」

「モウコロシテ、グベエアバアハガアア!!」

村人は助けを求めるクリーチャーを殺す。

殺されるクリーチャーの断末魔・・・今でも思い出す・・・
あれは間違いなく人間だった・・・

村に現れたクリーチャーを全て殺したときだ。

奴等の体は再生した。切断された手足、潰された頭が全て元通りに・

「な、なんて奴等だ・・・」

再生しきつた奴等は一斉に牙を剥ぐ。

卷之三

「わざわざがつひ…」

あつという間だつた、村人が殺されていくのは・・・
そしてオレの父や母も・・・

「コナ……あなたは」に隠れていなさい……」

「何があつても」「からは出るんぢやないぞ・・いいか?」

オレは両親にクローゼットの中に押し込められる。

「イヤだ、イヤだよ！パパ、ママと一緒にいい！！」

「詰つゝ」と聞いて・・・ユナ、これがあなたに渡しておくれ・・・

L

それはナイフだった。

「ひつゝ、ひつゝ。」

「ユナ、あなたは私達が守つてみせる・・・
それはお守りよ・・・でももしものときは・・・」

そしてゆっくりクローゼットの扉は閉じられた・・・

母から渡されたナイフ・・・

今思えばクリーチャーに襲われたときのため・・・ではない。
これは自害するためのものだ。奴等に苦しめられて殺されるよりは、
自分で楽に死んだ方がマシということだらう。

扉が閉じられてからしばらくして、クリーチャーの呻き声が近くなる。
奴等がすぐそこまで来たのだ。

父と母、そしてクリーチャーの叫び声が一斉に上がる。
何かを切り刻まれる音、そして断末魔・・・

その断末魔が誰のものか・・・

オレは怖くて、耳を塞ぎつづくまつて震えていたことしか出来なかつた・・・

ガン、ガンガン！！
ガリガリガリガリガリ！！

「ひつ・・・」

これは父や母じゃない・・・！
これは奴等だ・・・殺される・・・

そのときだつた、今度は殴られたよつた鈍い音が・・・
その鈍い音がしばらく続いた・・・
そして静かになつた頃である。

「ンンン・・・

「フーーー」

先程のクリーチャーの、扉を爪で削るよつた音とは違う。
誰かいるか確認するために扉を叩く音・・・
これは人・・・?

「・・・・・・・」

それでもオレは怖くて扉を開ける」とが出来なかつたのだが・・・
オレがずっと物音立てずにジッとしていると、扉は開かれた。
そしてそこには・・・

「大丈夫か!-?」

人間だつた。男性である。

年は五十代だらうか。鼻の下、顎に白い鬚が生えていたのでオレは
そう判断する。

そしてよくみると、男の服は胴着であり腕や胸はすごい筋肉でに包
まれていた。

(格闘家?...じやあむひきまでの鈍い音は?)のおじさんか?)

!!

オレはそんなことより、すぐに現状を確認するため、男を押しのけ
クローゼットから飛び出す。

嫌な予感がした。この生臭い臭い・・・

それはすぐに気付いた。

クローゼットを出ですぐにそれはあつたからだ。

「ひつ・・・・」

「つ、ダメだ！見るな！！」

オレは男に抱き寄せられる。この残酷な有様を見せないようだが大柄な男がこんな小さな子供を抱き寄せたところで、隙間から見えてしまうのだ。

「オマエの両親なのだな・・・
二人は死してなお、クリーチャーをクローゼットに近づけようとしなかつた・・・」

その無残に切り刻まれ、食い千切られ、飛び散ったモノをオレは目に焼き付ける・・・
こいつらは絶対に何者かの意思を受けている。何故かそう思つてしまつた。

こいつらが人の言葉で助けを求めたこと、
助けを求めながらも、自分の意思とは無関係に襲うような感じ・・・
それだけの理由で、いや十分な理由だ。オレはそう思つた。

もちろん誰かのせいにしたかったこともある・・・
ただのクリーチャーならば、まだ諦めもつくこともある・・・かもし

れない。

それ程オレの村はクリーチャーの被害が酷かつた。
一種の自然現象のようなものだ。

だがこれは何者かの仕業と思えてしまった以上、
オレは必ず復讐すると誓つた！！

そのためには強く・・・強くならなければ・・・！
強くなるには・・・

「……」までがオレの村が滅ぼされた経緯だ。」

「スラップ・・・

「悪いな『ジユン』。一番付き合いの長いオマエにも話してなくて・・・

「いや・・・」

「しかしソール、オマエのはまだ聞いていないが、恐らく似たよう
な境遇だろう。

「この四人は皆、何者かに村を滅ぼされている。・・・

「オレはクリーチャー・・・・」

「儂はガイアの手下じゃな。滅ぼされたといつても完全ではないが。

」

「オレは謎の組織・・・」

「そしてオレはクリーチャーに似た生物・・・

「これは偶然か？オレにはどうもそういう思えないことがある・・・」

「確かに偶然にしては・・・

「儂等にはいくつか共通点があるのう・・・」

四人はしばし考える。

「いや、すまない。

脱線してしまったな。話の続きをしようか。」

「そう言い、スラップは話を続ける。

「何をしていろ?」

「…………」

男はオレに声を掛けるが、オレは気にせず手で地面を掘り続けた。

「まさか村人全員の……墓か?」

男の声はまつたく耳に入らない。
そつ、オレは考えていたんだ。これからのこと。

「ねえ……」

「ん?」

「おじさん……強いんだよね?」

「いや、オレはまだ弱い。修行中の身だ。
この村を守ることが出来なかつたしな……」

「でも、強かつた……」

「そう、か……」

オレは土を掘るのを止め、男の顔を見る。

「あたしは・・パパとママを殺した奴に復讐をしたい・・・
あのクリーチャーはいつものじゃなかつた!!」

あれは人間・・・のようだつた！！必ず誰かの仕業なんだ！！！
そいつに復讐したい！！そのために強くなりたい！！！」

「復讐は・・・何も生まない。

そんなことを考えるのは止せ・・・」

「それでも！！あたしは絶対許せない！！
あたしを強くして！！あいつらが倒せるようにならん！！
おじさん格闘家なんでしょう！？だったら・・・」

「しかし何者かの仕業かどうか分からぬ。
ただ突然変異のクリーチャーであるかもしけん・・・
悪いことは言わん、復讐なんて馬鹿なことは止めろ。」

「絶対にあればクリーチャーなんかじゃない！！
あんな苦しそうに助けを求めて・・・無理矢理戦わされて・・・
あたしの村の人達だって、あの人達だって・・・
好きで殺し合いをやつた訳じゃない！！」

「・・・オマエはまだ若い、若すぎる。

今日のことを持れることは言わん、忘れられるはずもない。
だが普通に生きる。それがオマエを命がけで守つてくれた父と母の
ためだ・・・・」

「あの人達のためにも、あたしの家族のためにも・・・
このままあたしだけ生きていいくなんて出来ない！！
あたしは絶対に村をこんな風にした奴に復讐をしたい！！
だからお願ひ！！あたしを・・強くじで、ひつく、ぐだ・・さい・・
・」

男はしばし考えた。

そして

「オレの名はクライス＝トーラー。」

「オマジ、何を言つ?」

「コナ・・・か。格闘家にしてはいまいちだな。
オマエは、そうだな・・これからはスラップ=トーラーと名乗れ。
オレの弟子になる以上、女は捨てる。オレもオマエを女扱いはしな

「わかつ、わかりました・・・！」

「修行はさつそく明日から行う。」

・・・今日はみんなの墓を作ろう。オレも手伝う。

「はい」

「歸匠のもとで修行すると決めたそのときにオレは女は捨てた。だから今まで女といふことは隠して生きてきたんだ。これからもオレのこと今まで通りに接してくれ。」

「わかつたぜスラップ！！」

悪いな、辛いことを話させて・・・」

「いや、辛いのはいいのみんな同じだ。気にするな・・・」

「ふむ、そういう事情じゃったのじゃな・・・しかし、今その歸匠はどうなされているのじゃ？」

「あ～、まあ、喧嘩別れっていうか・・・そんな感じだ。別れたあとは一人で各地を旅しながら修行したり・・・」

「オレと闘ったあの格闘大会も修行のためだったのか。」

「そうだ。あんな結末になるとほ思つてもなかつたがな・・・」

「しかしスラップ・・・お主はどうするのじゃ？このまま儂等と行動を供にして仇を探すつもりか？」

「ああ。オレ達のこの偶然、仇・・・それは必ずガイアに関係すると思つんだ。

だからオレはこのままオマエ等と旅を続けるぜ。」

「お主がそういふのなら・・・」

「ああ、改めてよろしくなスラップ！..」

「・・・・・」

ソールだけは胸の感触が忘れられずスラップの顔を見れずについた。

「ああ、よろしくな。

おし、雨も止んだみたいだし今夜の宿を探そづ。」

「そうじやな、もう田が暮れる頃じゃ。では行くかのう

「ソール何突つ立つてんだよ、行くぞ。

あ、待てよスラップ！！」

「・・・・了解。」

ソールはつづむき加減に答えた。

ソールはまだ胸の感触が忘れられず・・・

「さつきまでの雨が嘘のように綺麗な空だな・・・

スラップは真っ赤に染まつた空を見つめ考える。

師匠と墓を掘つてたときの空も、こんな綺麗な赤だったな・・・

スラップは、腰に掛けてあるナイフを握り締める。

それはあのとき母がくれたナイフ・・・

師匠・・・オレには大事な仲間がいます。

あのときは喧嘩して修行抜け出してしまつたけれど・・・

この戦いが終わつたら、こいつら連れて師匠に会いに行きます・・・

あのときのことを謝つて、そして仲間を紹介します。

それまで待つていて下さい師匠・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0175d/>

デジュン

2010年10月17日04時27分発行